第5章

思　い　で

第5章　思いで

つくば抄

浅井堂朗
在籍：調査情報部　情報資料課

妖（あや）かしの科学祀（まつ）りや春浅く
－ 60.4.14 －

最初に熱研図書館に伺って、芥子色のカーペットや窓外に林立する科学万博パビリオンの景観に驚きとちょっとした羨望を感じたのを、つい先日のように思い出す。勿論その時点では、そこが終（つい）の職場になるなどとは毫も思わなかった。

仙場氏、近藤氏、高沢氏、町村氏の後を受けて病上がりの半人前の身がご迷惑とは承知しつつ、資料課長を拝命したのは、図書館業務に精通した優秀な三橋嬢がおられたので、自分は刊行の実務を分担することで職分を遂行できると考えてのことであった。

命拾いの一年記念や神無月
－ 61.10.2 －

試験圃に桑焼く畑白いけり
－ 61.12.11 －

快適な職場を与えられて、昼休みには、せっせと桑畑の道を歩き、体調の維持を計っていた。

風に転（ころ）び我を追い越す桑落葉
－ 62.1.20 －

野兎は枯葉色なる陽（ひ）を過（よ）ぎり
－ 63.12.27 －

五十八才に達するを期に、退職を願い出る決心を固める頃、熱研図書館を五階から、桑園の一角にある大型機器整備工場跡に移す計画がおこった。思い返せば、総研入所間もなく青山から西ヶ原へ、更に農研が筑波移転で、現環研へと、大きな図書館の引っ越しに度々立ち合った経験がある。図書館移転のベテラン要員として最後のお勧めが出来ると張り切ったのだが、設計内装ほぼ仕上がって、いざ引っ越しの寸前に退職となり、後任の峰尾氏に引き継いでしまった。

もう歩くことなき道を春の風
－ 64.3.20 －

定年の威儀を正して春四月
－平元 .4.3 －

社会科学者としての研究者、自然科学者としての研究者、肌合いは確かに違い、研究支援の行政職も同様の温度差をもつのが、不思議でもあり、面白かったが、熱研で仕事をするに及んで国際人としての研究者というのがあり、中庸を得た素敵な人達であることを知った。

三十有余年の農学図書館業務の最後を熱研で締めくくることが出来た幸運を、今に至るまで感謝している。

マドラス税関

荒井　克祐

昭和44年6月。赴任地はインド・デカン高原南端のマイソール市、土地の人々がガーデンシティと愛称するインドでも数少ない気候温暖の地である。そこに南アジア最大のインド中央食料技術研究所がある。研究テーマはパーボイルドライス、一言でいえば、籾米を十分に吸

水させたのち、蒸し煮、乾燥させると、貯蔵性、精米性、ビタミンなどの栄養素が向上するという、インドの伝統的なポストハーベスト技術の研究である。着任半年後、一時帰国の時期が迫ってきた頃、マドラス税関から貨物が着いたので輸入許可書を提出せよ、といってきた。いやな予感がした。インドに研究機材を持ち込むときは予め輸入許可をとっておかなければならないことをそのとき知った。早速、大使館の農務官になきついたが埒があかず、その日から悪夢のような税関との苦闘がはじまる。誇り高きアプライサーは口をへの字にまげ容易に妥協しない。課税するの一点張りである。インド人の友人と税関中を駈けずり回ったが解決の目処はつかない。すったもんだのあげく最後に提案されたのが、「インド政府・ガンジー首相あてに研究が終わりしだい再輸出するむね申請すること、もし再輸出しなかった場合は課税されても致し方ありません」というボンドを出すことで、課税保留の一時輸入が許されたのである。暫くして機材がマイソールに送られてきたのは一時帰国の一週間前であった。

二年の任期を終えて帰国する際、機材類一切を再輸出したことはいうまでもない。通関業者から「貨物はユーゴスラブラインに載せたのでそのB/L（船荷証券）を送付する」といってきた。帰国してから3年くらい経ったころ、在印大使館経由で税関から書類が届いた。「貴殿は任務終了後、機材を再輸出するというボンドを出しているにも拘わらずまだ輸出していない。約束をはたさなければ課税する」といってきたのである。なにを今ごろそんなことを、私は帰国する前にマドラスの通関業者を通して再輸出しているのでその業者に問い合わせて欲しいと返事した。すると半年くらいして「再輸出した証拠がない。証拠を示せ」といってきた。再度通関業者の名前と番地を書いて送ってそちらに聞いてくれと突っぱねると、また半年くらいして「これが最後通告。証拠がなければ課税する」といってきた。これは一寸面倒なことになってきたぞと覚悟したが、はたと思い出したのが帰国のとき大事に持ち帰った B/L である。インド人も忍耐強いがこちらもマドラス税関で鍛えられている。B/L のオリジナルを送って何処かで紛失でもされては目もあてられない。そこで、先ず反応をみるつもりでそのコピーを送ってみた。ところがである。これが効を奏してあっさりと証拠として認められたのである。そして返事にいわく「本書をもって再輸出したものと認む。至急オリジナルをおくられたし。それを受領したら本件はキャンセルされる」。

ICRISAT にて

飯塚典男
在籍：1977 年 10 月～ 1980 年 3 月

インドに行くといったら、旧熱研のロビーの雀達が“ビルマから西は外国だ”とか“インドは本当に良いところだ、インド人さえいなければ”とか“三ヶ月いたら尊敬する”など勝手気ままにのたもうた。その他貴重なる御意見を多数拝聴し、1977 年に単身で出かけた。任地は南インドのハイデラバード市郊外にある ICRISAT（国際熱帯半乾燥地作物研究所）である。発足間もないので施設は建設途上であり、仮研究室は立ち退き跡の農家であった。一階の土間がお茶のみ場で、二階に私の小部屋と小実験室があった。カウンターパートのレデイ氏はアメリカに 11 年もいたとのことであり、カーストは最上、並みのインド人とは少々違っていて、かなり気を遣って面倒を見てくれた。その理由は、彼はアメリカの大学で木村先生（元北大教授）と一緒だったとのこと。日本人とは真面目で優秀な民族だと思い込んでいたふしがあった。ところが私と木村先生とでは月とスッポン以上の違いがあることになかなか気がつかなかった。彼は大方のインド人から一目置かれていたので、おかげで私も半目ぐらいは置かれ、随分助かった。彼の家にはよく食事に招待され、香米入りの御飯に魚のカレー煮をご馳走になった。映画にも連れていってくれた。その他言葉のこと、ヒンズー教のこと、お城のような彼の実家のこと、そうそう仕事のことなど沢山の思い出がある。レデイ氏と私の助手はラジェシェウエリ嬢で、レデイ氏のお気に入りである。なかなかの才媛で随分助かった。言葉

は、出身地のタミル語のほか、英語、ヒンズー語、テルグ語、ウルドー語を操るので、時々通訳してもらった。よく風邪を引くので、動物食を食べなさいと言ったら、チキンを試したがどうしても喉を通らなかったとのこと。あるとき、私、結婚するかも知れないと言ってきた。それはおめでとう、と言ったついでにインド娘の結婚観について質問してみた。これは面白かったが、長くなるので取り止める。彼女は結婚し、私の帰国の際旦那と一緒に空港まで見送りにきて、素敵な言葉を残してくれた。"人と知り合うのは嬉しいが必ず別れなければならないのは辛い、今度は別の世界で会いましょう"と。その外、薄汚れたロビーでチャイを飲みながら、話に花を咲かせた研究員達、運転手の童話のような話の数々、テルグ語を教えてくれたお茶汲みの女の子、気を遣って戴いた所長夫人、など大勢の人達に世話になった。また、ホテルで出会った人達には日本の食糧、エネルギー、防衛問題などに鋭い質問をしたインド人教授、休日によく一緒に街にでかけた旧チェッコ人（今、どうしているのだろう）、世界情勢を説明してくれた大男のドイツ人、アフリカ某国の大使館員など、皆さんは日本について知識があり、恐れ入った。思いでは尽きない。

1974年から1999へ

五十嵐孝典

熱研とご縁が始まったのは今から25年前1974年である。この時はスマトラ島の畑作技術調査団の一員として、はじめて熱帯農業の実態や異文化に触れ、調査で接した2カ月にわたる情景が鮮明に蘇ってくる。出発前、村上所長はこの種の調査旅行は事前の準備が重要であり、予め報告書を作成し、それを現地で確認するくらいの意気込みが必要であると強調された。何事にも遅れをとってきた私は、アドバイスのようには出来なかったものの、このことをいつも思い出し、励みとしてその後の取りまとめ作業には大変役立った。翌年8月には10年余いた九州からつくばへ転勤し、11月から久保田さん、鈴木正昭さんとタイ農業局で熱帯畑土壌の肥沃土に関する共同研究に着手した。プラプタバー畑作試験場で1976年雨期からトウモロコシ－緑豆体系におけるマルチの効果が主要試験となったが、大干ばつ年にも稲わらマルチによって平年並みの収量が保障され、ほっとしたものである。その後も派遣された皆さんがタイ側と協力して、この試験を継続させ、稲わらマルチトウモロコシコンポストの長期連用が安定した高収量レベルを維持するなど、20数年を経た現在も興味ある結果を出しながら、試験が続けられていることは嬉しい限りである。当時、所属研究室長はウイシットさんで大変よく協力して下さり、C/Pのノンラックさんとプラパイさんを含め明るい女性研究員の多い職場で賑やかに共同研究を進めることが出来たのは幸いであった。

1980年に帰国して東北農試へ移動し、さらにJICA専門家としてパラグアイで2年間勤務した後、プール定員として再度、熱研に席を準備していただいた。農環研で退職後、15年ぶりにボゴール食用作物研究所におけるJICAの研究協力に専門家として参加し、20年継続されたプロジェクトの幕引きをしたことも奇縁である。結局、インドネシアでは大豆増産の専門家として通算5年半、滞在した。この間、熱研の皆さんとも絶えず交流を続け、御協力していただいたが、1993年4月に最終帰国となった。翌年、心臓手術のリハビリ中に思いがけず国際農研の資料編集室への協力を要請され、3度目の通勤となったのである。

編集室では、情報部の皆さんのご指導の下、江口さんと3名の奥様方の協力を得て、バートマンさんとも対応しながら、4年有余に及ぶ編集業務を経験することが出来た。この間、ブラジルを始め他の途上国を訪問する調査の機会も与えられ、私にとっては又とないよい勉強と経験を重ねることとなった。このように貴重な情報や外国人を含めた多数の知己が得られたのは、10年に及ぶ熱研－国際農研の皆様の暖かい御配慮の賜と感謝している。

走馬燈の熱研・JIRCAS

石原修二
在籍：1988年10月～1994年6月　情報部

1957年入省後、北海道から九州まで転々した後、94年6月退職までの5年9ヶ月をお世話になりました。退職後も、西アフリカ、東南アジアで6年近くを過ごすことになったため、TARC、JIRCASとはいまだへその緒が繋がっているように感じています。研究技術情報官（畑作物、中南米、後アフリカ担当）として、年数回の短期海外調査の他は、JARCや広報誌の編集、情報データベース作りなどが主な仕事だったと思います。Dr. Bartmanとのdisputesもよい思い出です。部員には長期在外経験者が多く、お茶の時間などには、報告書には出てこない、珍奇な経験談を伺う機会がよくあり、アラビアンナイトを聴いているような異国文化への憧憬を誘われる楽しみがありました。研究所の思い出とは、より多くの時間を過ごしたつくば本所での経験もさることながら、短期間でも出かけた外国のことが、同行した調査員の皆様の個性とともに、やはり印象として強く残っています。多くの旅程の中から先進国やJICA系等を省き、挙げさせていただくと次のような場所、事物です。

カリブ海のドミニカ共和国（コロンブスの息子の家）、バルベドス（珊瑚礁の塊が散らばる黒土の畑）、トリニダード（黒いタールが噴出する湖上の漫歩。はじめて見た、カカオの木と実）などの島嶼、沿岸のガイアナ（黒人の英語国。サトウキビの交配装置。操縦室と客室の区別がないプロペラ旅客機での低空飛行）、スリナム（同じくオランダ語国。大型機械化栽培により米を輸出）、ベネズエラ（ブドウは年数回採れ、熱帯のど真ん中でワインを醸造。芳醇な赤いグアバの実。はじめて食べたSapote（フィリピンではChicoという））。ブラジルではベレーン（日本人会忘年会での曲芸的ダイナミックなランバダ踊り）、マナウスのアマゾン川（乾季と雨季の水位差が10m位あり、白く濁った本流に、黒い支流が合流する地点で泳ぐ白い体表の淡水イルカ）、ロンドニアのポルトベーリョ（1晩泊まった日本人移住者の家。ガリンペイロ（gold-hunter）の息子、グアヤバナという果物）。チリではサンチアゴ（山上の白いマリア像、乾いたベージュ色の山の斜面に、water-harvesting　技術で作る小麦畑）、Concepcion（Eucalyptusの美林、山の中の温泉場とスキー場の残雪）、Puerto Mont（エニシダの黄色い花で埋まる山腹、牛の角を縛って牽引棒につないだプラウ作業の情景）。エクアドルでは、キト（観光地になった赤道。資料を送るため、包装の表面一杯に貼った郵便切手）、グアヤキル（渡船場の屋台で木槌で割って食べた蟹。ひなびた漁村の食堂で出たセビーチェという生エビのマリネ）。ホンジュラス（サン・ペドロ・デ・スーラの近くにある、バナナ会社の研究所で種をとるために集めたバナナの山、ロープウエーで運ばれるバナナの房）。コスタリカ（高橋元研究1部長の旧友の土壌学者、Tulialba（？）と言う熱帯農学雑誌を出す研究所）。初めて遭遇した西アフリカ（マリに入る途中寄った23年ぶりのパリ。サヘルサバンナの村人の躍動感溢れる舞踊と、土産にもらった、生きた鶏と山羊、灯油で動かす冷蔵庫、ハルマッタンの曇り空の下に白く蛇行する伝説の川ニジェール）。ナイジェリアのイバダンからニジェールのニアメまで、今川調査員と同行したLandRoverでのサヘル横断旅行でガソリン携行容器に買った大きな黒いjerry can。

家族にとっても貴重だった2年1ヶ月

伊藤一幸
現在：農業環境技術研究所環境生物部

数個の旅行鞄、20個を越す段ボール箱とともに、家族6人で飛行機に乗ったのは初めてであり、期待と不安に満ちた出国であった。その時までに、JICAの専門家として短期派遣の経験は

2、3あったが、妻と4人の子供を連れての長期出張は初めてであった。やや勉強に不安のあった中学1年の長男を頭に、乳飲み子まで連れてペナンに赴任したのは1989年10月のことであった。アパートが決まるまで、今はもうないイースト & オリエンタル（E&O）ホテルから日本人学校に通わせた。水稲直播技術の総合化を目指す熱研チームは各分野からそうそうたるメンバーがすでに集まっており、引っ越し、官用車の手配、生活必需品の購入など難なく終え、タンジュンブンガにただちに生活の基盤が確立した。子供達はスクールバスで通学した。私の職場は半島部にあり、60km離れたボンボンリマと120km離れたアロスターにあった。まだ高速道路が開通していないアロスターへは週に1回、泊まりで出かけることが多かった。

当時のペナン日本人学校は小・中学生合わせて100人足らずで、我が家の3人は学校にとっても3%を占め、大いに歓迎された。ことに当時は高校受験のため、中学生になると日本に帰す家族が多く、長男の同級生は男子0～1人、女子4～5人であった。ところが、先生方は各県から派遣された教育熱心な方々で、人数も多く、個人レッスンに近い教育環境でご指導いただいた。学習発表会、運動会、日本人会との共催の餅つき大会、スマトラ島への修学旅行など学校行事も盛りだくさんで、妻とともに親の力量が問われた。マラッカなどマレー半島各地も回ったし、休日には努めて海（水泳と釣り）、博物館、遊園地、植物園、動物園、私の職場などに連れ出した。私自身の家族に対する姿勢（研究のおもしろさと子離れ）もあるが、このときほど家族が結集したことがない。

一時帰国やフィリピンやシンガポールを旅行したときも、学校を数日休ませたが、勉強の遅れの面倒も日本人学校で見てもらった。そうこうしているうちに、引っ込み思案であったわが子達もそれぞれ自信をもってきた。

1991年11月の帰国のときには、ペナンを飛び立つ飛行機の中で別れを惜しんでみんな泣いていた。私の家族はこれまで各地で引っ越しを経験したが、あれほどのつらい別れはついぞ見たことがない（国家公務員の研究員の子供は旅芸人の子女と同じと言っていた人もいたか…）。「親の因果が子に報い」の一つの例であった。

今になって振り返ってみると、我が家の場合、マレーシアの職場や学校における日本人の規模と密度がちょうどよく、遊ぶお金もそこそこあり、また、それぞれの興味、やる気、元気がいっぱいの時期であったと思う。研究員が一人で現地に赴くならば相手国の人と対等に友好的にすればそれでいいが、家族を連れていく場合はこうした事情もJIRCASは考慮していただきたい。お世話になった方々にお礼を述べ、筆を置く。

世界を広げてくれたタイでの3年半

井上　駿
在籍：1979年1月～1983年4月
現在：技術士事務所「井上農研」

私がタイに派遣されスパンブリ稲作試験場を拠点としてタイ農業局と熱帯農業研究センターとの共同研究に加わったのは1979年3月から82年9月までの約3年半であった。

当時JICAはチャオプラヤ川三角州の中流域で輪中型の土地改良事業を進めようとしており、その事前調査の最終段階に調査団の一員として派遣されたのが前年の3月だったから、今から思えばその派遣が海外適性のテストだったのだろう。それまで農業技術研究所の鴻巣分室で16年間、そのほとんどを稲の生殖成長期の水管理の研究に費やし、傍ら筑波移転反対の組合運動にもずっと関わっていたので、人事をやる側から見ればもう動かそうということだったのだろう。輪中型土地改良事業は数ヶ月も水が引かないようなところの土地改良としては普及性がないという報告を聞いたが、取り上げられなかった。

報告書のもう一つの見出しは「美人秘書の写真と名刺の束」というテーマであった。現地事務所のタイ側の所長から、日本から次々に別の人が来て名刺をおいていくのでこんなに溜まってしまったと名刺の束を見せられたのと、その秘書がすごい美人で、事務所に来た日本人

が皆彼女の写真を撮っていくが送ってくれた人は一人もいないと言っていたことをそのまま報告書に書いたのである。一部の人はおもしろいと言ってくれたが、JICA では顰蹙を買ったかもしれない。

熱研から派遣された時のテーマは乾期に潅漑が可能な稲作地帯における水田作付体系だった。すでに先輩たちが試験場の中では各種の畑作物を乾期に作る試験で成果を出していたが、理想的な潅漑体系と、十分な労働力と、大型トラクターを前提にしての作付体系だったので、果たして現地でこれが使えるのかというのが私の疑問だった。実際に農家がそれに近い作付体系を実施している現地を探し、そこで試験場で作った技術と農家のそれを比較したいと提案したところタイ側に受け入れられ現地探しが始まった。落ち着いたところはスパンブリのような重粘土地帯ではなく、チャオプラヤ川本流のすぐ傍に細く帯状に分布する自然堤防上のシルトに近い土地の地帯だった。ここで使われているのは動力を使うものといえばハンドトラクター一台と、進んだ農家でも揚水ポンプがあるだけだった。

スパンブリの試験場でも平行して試験を進めていたが、乾期の稲作は1年目はネズミに完全にやられ、新品種を導入した2年目はラッギドスタントというウィルス病にやられて、乾期稲作の試験結果が得られたのは出張予定期間を2回延長した後の3年目だけだった。現地試験で分かったのは、タイにもすばらしい精農家がいるということ、落花生は手で抜けるような土の軽いところでなければ、収量はとれても農家は作らないということ、農薬も肥料もやらずに一見粗放に見える老夫婦のやっている農業も、収支計算で投入産出比を見ると精農家の場合とほとんど変わらないということ等であった。

試験の結果も私には一応納得がいくものであったが、私にとってのもっと大きい収穫は、タイの人たちから心の温かさを学んだことであり、生活に密着した生きた宗教として仏教を発見したことであった。おそらく、それ以前の自分に比べて一まわり廣い世界観をお土産に頂いて日本に帰ってきたのではないかと思う。

中国雲南省日中共同研究での思い出

井上　正勝
在籍：1986 年 11 月～ 1989 年 3 月
現在：愛知県農業総合試験場作物研究所

2 年 5ヶ月の間に 5 回出張しました。第 2 回目は妻と小学就学前の子供3名と母親の家族連れで出かけました。現農業研究センターの中川原所長さんもイネ遺伝資源のアイソザイム調査のため同行されました。この時は、飛行機の予約がとれず、寝台特急列車で上海から昆明まで 72 時間 3 泊 4 日の旅でした。車窓の風景は水墨画の題材を思わせる山や帆かけ船の浮かぶ川があり、貴州省では痩せた畑に貧しい農村風景が印象的でした。車内で上海から昆明の夫に1ヶ月の休暇を利用して会いに行く女性に出会いました。中国では沿海部と内陸部との経済格差、多くの民族がしのぎを削る歴史と小数民族問題、人口問題等急激な経済発展の影に多くの問題を抱えています。

家族もホテルに宿泊し休日には自由市場で珍しいキノコ、果実、食材、種子、漢方薬あるいは古銭を見つけて、中国の生活に触れることができました。我々外国人研究者は、英語の先生も含め外国人専門家として、祝日には民族舞踊鑑賞等のもてなしを受けました。

試験研究は育種グループ、いもち病研究グループ、耐冷性研究グループの 3 チームに分かれ試験研究を行った。1989 年当時合系 2 号、4 号、5 号、10 号の奨励品種栽培面積が増加し、共同研究の成果が明らかになってきました。中国側の蒋志農先生、通訳として案内していただいた故熊建華先生他、多くの先生方と家族ぐるみの親交をしていただいた。

育成対象標高は 1,500 ～ 2,000m で、厳しい冷害といもち病の激発地域であり、耐冷性、耐病性育種の意義は大きい。また、この地域は、遺伝資源の宝庫でもある。

昆明近郊の稲は日本の約3倍に近い超蜜植栽培（17 × 10cm）が行われている。出穂期は 7 月中旬以降だが、6 月中旬から始まる雨期まで

に充実した分げつ穂を確保するためには 1 穂 300 ～ 400 粒の超穂重型雲南在来稲にとって超密植栽培は意味がある。しかし、1 穂籾数が少なく分げつの多い合系 2 号はその 1/2 程度の疎植の収量が高いように思われた。

省内の旅行は、亜熱帯地域でタイ族の多い西双版納、標高 2,500m の極限状態で水稲栽培を行う麗江、昭通へ出かけました。また、奨励品種栽培視察のために多くの農村を見学できた。省外には世代促進栽培を行う海南島や北京、上海、広州、杭州、成都、重慶、南京等で国や省の農業科学院を訪問できました。

昆明市内には看護婦として従軍し、戦後中国人と結婚した福田さんの招待で昆明在住日本人学生と一緒に本場の餃子をご馳走になった。また、日本語を話す医者グループとのつきあいを森谷氏から引継ぎ、現在もその中の 1 名は名古屋市内に居住し交友関係を保っている。農業科学院の先生も含めこれらの方々と定年退職後の再会を念願している。

基盤技術研究部根粒菌グループ旗上げの頃

今井秀夫
現在：FAO インドネシア代表

1987 年 2 月 3 日、台湾にあるアジア蔬菜研究開発センターより帰国、翌日、農技研より熱研へ配置換えになった。理由はただ一つ、熱研の OB でもある当時の五十嵐化学部長に国際電話で“暇”な研究所に復帰させて欲しいと口をすべらせたことによる。その頃、すでに五十嵐さんの知る熱研と自前の研究者の育成と国内研究の強化を目指していた熱研とは大いに異なり、一番忙しい研究所となっていた。台湾での 4 年間の仕事を 2 ～ 3 年かけてのんびり取りまとめようとのもくろみは見事に外れ、基盤技術研究部の発足準備から運営まで、しっかり両足を踏み入れる羽目になってしまった。

基盤研究部発足後は、実体のない根粒菌チームのリーダーと称して好き勝手をやっていた。横山正（農工大）、村上敏文（指定試験）、友岡憲彦（生資研）のいづれも博士号を有する三人の優秀な若手研究者の先頭に立ってホラを吹く役目を甘受し、毎年使いきれないほどの研究費と最新鋭分析器に囲まれた優雅な生活であった。また当時は、熱研中に活気がみなぎり、総務部関係にも優秀な人材が揃っており、特に会計課と我がチームは切っても切れない仲になっていた。

主計係長の松井さんと組んで筑波機械整備費に初挑戦し、2 億円近い予算を獲得した。最先端をいく質量分析計と蛍光 X 線分析装置を購入したが、その後の対策が大変であった。買ったのはいいが、熱研は過去に全く実績がないので、技会施設課が視察を行い、その結果をみて次年度以降も機械整備費を熱研につけるかどうかを決定するとのことであった。台湾任務の骨休めどころか、新規機械の購入のたびに、まず一週間程度メーカの講習を受け、機械の基本操作を修得した。修得後は、直ちに試料分析に着手し、できる限り多くの分析データを蓄積した。

この様にして、帰国後 2 年以内に、少くとも上記 2 種に加えて、ガスクロ、液クロ、イオンクロマトの計 5 種類の機械を私一人が担当し、短期間で成果を上げることが要求された。

私の人生の中で真面目に対応した数少ない例である。おかげで施設課の監査も悠々とパスし、その後熱研が筑波機械整備費を配分される正式メンバーになれたのである。その意味で現在の国際農研が国内研究でも成果を上げる基礎を築いてくれたのは、松井さんを筆頭に古谷、竹田という歴代の主計係長と会計課長の貢献が大である。

根粒菌チームは私の転勤をもって解散したが、多くの若手研究者が集い、活発な議論を闘わせながら世界のトップを目指したチームの存在は忘れがたいものがある。松本省平、小林仁の両企連室長や山口武夫研二部長をはじめ多くの人達が根粒菌チームの部室をアフターファイブに訪れ、盃を酌み交わしながら熱研の将来を語り合ったのも楽しく、懐かしい思い出である。

チームは短命に終わったが、チームづくりに関わった人達はそれぞれの場所で大いに活躍しており、適当な理由をつけては酒を飲んでいる。

雲南・煙草・酒・火鍋

岩野正敬
在籍：1987年4月～1990年3月
現在：農業研究センター

雲南省。なんとも響きが良く、旅情を誘う省名である。国交回復後、大臣のお声掛かりで始まった水稲育種日中共同研究は同省農業科学院で実施されていた。所在地は昆明市桃園村。仙人と美女が住んでいそうな優雅な地名である。高台の5階に居室・実験室があり、窓から見える遠くの山々は緑草で覆われ、その中に羊が遊ぶがごとく白い石灰岩が散らばっている。眼下の水田は2月には菜の花で黄色に覆われ、民家から煙が立ちのぼる風景はまさに桃源郷であった。

この地に短期、長期で3回勤務した。いもち病抵抗性と病原菌のレース分化を調査することが仕事であった。育種からは国内でも実務の一線にあった人たちが派遣されており、人格円満、仕事熱心だったので中国側の評価も高く、その傘の下で自由に仕事ができたことは幸運であった。育種に多くの知人を得たことが熱研に勤務した最大の財産になり、その後何度となく助けていただいた。人付き合いは良い方ではなく皆さんに迷惑をかけたことを反省している。

長期の時は大曲から井上さん、古川から松永さんがすでに赴任されておられ私が加わって3人になった。井上さんは煙草駄目、酒は杯一杯。松永さんは酒ほどほど、煙草駄目。両方やるの私だけであった。雲南は中国有数のタバコの産地であり、中国側には愛煙家が多かった。自分が吸うときは周囲の人にも自分の煙草をすすめるのが礼儀である。当然のことながら自分が吸うときは人にすすめるので1日40本以上吸う日もあった。帰国後、大きくなった娘たちいわく、臭いから家の中では駄目。仕方がないからベランダの蛍族になったら、洗濯物の下で吸うことを禁じられてしまった。

大酒飲みを海量（ハイリャン）と呼ぶ。度数の高い白酒で乾杯、乾杯するのが私の常でなんともあさましいかぎりである。食べ物で気に入ったのが火鍋。トウガラシをふんだんに入れた激辛鍋である。薄暗い専門店の土間で低い木椅子に腰を下ろし、レバー、鶏肉、香菜等をいれて食するのだが、あまりの辛さに涙ポロポロ、汗ドット、鼻水ダラダラ、数日間は＊＊の穴周辺がヒリヒリといった代物である。日本側でこれにはまってしまったのが私だけで、激辛大歓迎のため中国人より中国人的だと言われてしまった。

帰国の翌年九州農試に転勤した。永年勤続者表彰の席で「上司、同僚の指導・援助に感謝し、数回の転勤に一度も不平をいわなかった家族、雲南にいた2年間家を守り、子供たちを育ててくれた女房に感謝する。何もできないが今晩は、賞状と銀杯を食卓に飾り、酒をのみ、そして女房の肩を揉んでやりたい」とお礼の言葉を述べた。定年後、仕事抜きで二人で観光に訪れてみたいが、やはり水田に入り、いもち病の病斑を取ってしまうような気がしてならない。

想い出 TARC-JICA

上野義視
在籍：1979年4月～1983年3月
1988年7月～1993年6月

熱帯農業研究センター創立後10年、揺籃期を過ぎ、一人歩きを始めた1980年頃長期在外研究員として3年半タイ国に滞在した。赴任時、日本とあまりにも異なる農業、研究環境、研究者の意識、生活環境に驚き、一方、在タイ熱研研究者諸兄の精力的な活躍に感銘を受けた。赴任先のタイ農業局長から日々雇用労働者に至るまで友好的、献身的であったために楽しく研究が出来たことは、これまで10年間の熱研研究者の積み上げてきた友好と努力の賜

であり、熱研が培った貴重な財産であると思った。地域農試に長期間勤務していたせいもあって現場の問題点に興味を持ちタイ研究者に尋ねたが要領を得ず、直接農民に尋ねようとしたが言葉がさっぱりわからない。それならとタイ語の勉強をした。結果として農業のみでなく、タイの風俗、習慣、考え方などの理解に随分と役に立った。

熱帯農業研究センター創立20周年にあたる1990年頃タイ国に熱研タイの代表として3年余滞在した。

熱研に対するタイ側の期待の大きさは、共同研究の要請の多いことから容易に理解できた。また、1988年加藤六月農林水産大臣が熱研タイ事務所を来訪され、熱研の活動に大変興味を持たれたと聞いている。その後タイ事務所充実のための予算が計上され、一方、タイ農業局からはそれまでの事務所の面積の10倍に相当する281 ㎡の提供を受け、1989年9月8日新しい事務所を開設することが出来た。これらは日本の関係者並びにタイ農業局の熱研に対する評価の現れである。

在タイした1989年から1991年、時あたかもバブルの真最中で官民、公私を問わず大挙して来タイした。農業関係の来訪者は目的によって日本大使館、JICA、JETRO、熱研が分担して対応した。来訪者名、便名などを青色、出国を赤色で記入していた事務所のホワイトボードは12月と2月、3月には紫に見えた。一時帰国者を除き、対応できる在タイ熱研研究者は5名ないし8名程度であった。代表は彼ら研究者を来訪者にほぼ機械的に割り当てるだけであった。割り当てられた研究者はより詳細な目的の確認、カウンターパートの選択と具体的な行動計画、予算措置、自動車及び運転手の配置、歓送別会、空港への送迎、ホテルの予約、トラブルの処理等膨大な仕事量になり、しかも幾組も対応しなければならない。これらのことをお互いに相談しながら一期一会の縁としてか誰一人不平、不満を言わず献身的に的確にやってのけたことは熱研研究者の人格と資質の高さを示すものである。1993年熱帯農業研究センターで定年退職し、国際協力事業団のフィリピン土壌研究開発プロジェクトの専門家としてフィリピンに赴任した。それから7年、国際農林水産業研究センター創立30周年にあたる2000年をフィリピンで迎えた。国際農林水産業研究センターの研究者は外国の研究者と共同研究をするために優れた研究能力と協調の精神が必要であるが、国際協力事業団の専門家は技術援助であるために途上国研究者に対する高い指導能力を必要とする。この違いは非常に大きいが、熱研時代の経験が精神的支えとなり、実務的に役立ったことは言うまでもない。国際化の時代において、国際農林水産業研究センターの研究活動と成果が重要であるということはいうまでもないが、国際的な視野と経験を持つ人材の養成に貢献していることも重要な点である。

五十の手習い

内山泰孝
在籍：1977年4月～1989年1月　企画調査部、研究第1部、基盤技術研究部

私は、熱研と20年余の関わりをもったが、二つの顔で関与した。技術会議事務局において、熱研の設立、組織拡大及び予算獲得の苦闘に明け暮れた前半約10年の行政官の顔。一方、ひっそりと五十の手習いに明け暮れた後半約10年の窓際族研究員の顔。前者については、創立10周年記念誌（熱帯農研集報第38号）に記述したので、今回は後半約10年の話に限定する。熱研設立秘話に興味をお持ちの方は、上記資料をご一読いただきたい。

「2日以内に、この町から退去しなければ殺すぞ！」という手紙を投げ込まれて、革命に揺れるイランから逃げ帰ったのは50歳の正月。突然の帰国のため「定員に空きがあるのはここしかないから・・・」と20余年ぶりに研究職となり研究第一部の窓際の席に座ることとなった。今さら研究員になってもまともな研究ができる訳がないというのが常識。「熱研の設立と拡大に貢献したから、研究成果は期待しないが、月給だけは払ってやる」というニュアンス（のようであった）。義務は全く要求されず、

悪いことさえしなければ何をやってもよい・・・。終電車帰宅を常とした技術会議時代に比べると、夢のような楽しい話であった。

そんな或日、山田登顧問（熱研初代所長）から「乾燥地には、多量の塩を吸収してもそれを吐き出してしまう耐塩性植物（飼料作物）があるらしい。その植物の耐塩性について研究するよう」勧められた。一方、鴻巣の独身寮時代の同僚は各分野の最先端を行く研究者になっており、“定員借りの窓際族”に同情して「俺が指導するから乾燥地農業の研究をしろ」との申し入れが相次いだ。このような周囲の温かい配慮と友情に抗しきれず、定年まで遊び暮らす計画（？）は、もろくも崩れ去ってしまった。

早速、オーストラリアからAtriplexの種子を入手したが、過去20年間の作物生理学及びその研究手法の進歩は著しく、手のつけようがなかった。そのため、植物の生育観察をして、一見浪費の2年余は、実は研究の基礎体力を養う重要な準備期間であった。後になって「急がば回れ」という言葉を身にしみて感じた。研究者の真似ごとができるようになった頃、農技研（現在の生物研）の稲田勝美（後、鳥取大教授）及び太田保夫（後、東京農大教授）氏等の指導により、約半年かけて研究計画を練り、実験の詳細な実行計画を作成した。両氏の口利きで、生物研、農環研、農研センターにまたがる7ないし8つの研究室に出入りし、農林団地内で選ばれた最も効率的な実験機器を借用するという贅沢な実験計画であった。これらの機器の操作も事前に習熟した。

周到な準備を経て、本番の実験を開始したのは昭和57年12月20日、土日も盆も正月も無く、昼夜兼行で実験を重ね、200余枚の研究論文を書き上げたのは昭和60年2月10日。この間多くの方々が協力し、知恵を貸してくれた。

非常に珍しい植物を実験材料にしたので学会でも注目をあび、実力とは無関係に評判が走り出し、とうとう学会賞をお土産にして退官となった。兜町界隈に「人の行く裏に道有り花の山」という諺があるが、稲を実験材料にしていたら、こうはならなかったであろう。とは云うものの“五十の手習い”は楽なものではない。日本海軍は「月月火水木金金」の猛訓練をしたというが、私の2年2ヶ月は「月月火火水水木木金金」、すなわち1週間に10日働き、しかも土日、盆、正月無しの夜討ち朝駆けの毎日であった。体感暦では7年くらいの実感が残る2年2ヶ月であった。今だから口に出せるが、途中で止めようかと思ったことも再三あった。最も苦しいときは、辛抱の代名詞として「おしん、家康、隆の里」が流行した頃であった。そのとき、ふと気づいたのは「おしん家ヤスタカの里」、日本中の皆さんが応援してくれているのでは止める訳にはいかない、ヤルッキャナイ！

某大先生の名刺に「農学研究者に必要なものは、一に体力、二に体力、三四がなくて五に知力」というのがある。五十の手習い数年間から得た私の教訓は「農学の研究には体力、気力、知力が必要である。ただし、知恵は借りられるが体力と気力は借りられない」。さらに、「知恵はただは借りられない。喜んで貸し借りできる人間関係が必要である」。

定年を待たずに企業からお呼びがかかり、70歳を越えるまで海外の仕事に従事できたのは、ご指導・御協力いただいた沢山の関係者は勿論、窓際族の特権を利用して自由気ままに蓄積した知識のお陰、自由を与えてくれた熱研のお陰、そのもとをたどれば、投げ込まれた手紙のお陰・・・。視点を変えれば、世の中、総て感謝の対象になる。皆さん、有り難う！我が心の故郷、熱研よ、有り難う！

JIRCASの皆さん、前向き思考で、独立行政法人のメリットを活かして研究成果をあげ、JIRCASをますます発展させて下さい。体力と気力は自前で養うことをお忘れなく！

退職後のタイ、カムチャツカ、ミャンマーへの調査旅行

梅村芳樹

タイへは民間企業の依頼でサツマイモや野菜の生産指導を兼ねた調査に出かけた。ラオス国境に近い山間部のサツマイモやジャガイモ、野菜畑を歩いた。十数年ぶりのタイ再訪であったが、訪問先が熱心な生産者だったためか、活気がありタイ経済の不振が嘘のような印象を

受けた。とくにチークの植林は目を見張るものがあり、4年目の間伐材の出荷、16年での皆伐でどんな作物より採算性が大きいとの説明には日本の中山間地と比べて羨ましくなるほどであった。

カムチャッカは初めての土地、国の崩壊後の農場や研究所の人たちの必死の取り組みに強いショックすら感じた。私の仕事はジャガイモや未利用資源の輸入可能性の調査、需要の見通しのないにもかかわらず、数百ヘクタールもの栽培を続けている農場の畑は北海道よりはるかに均質で正常な生育、品種はオランダからの直輸入種子イモ、研究所では独自の育種が進んでおり、関係者全員前向きの姿勢がくずれていない。地熱利用のハウスでトマト、キュウリ、メロンまで生産していた婦人はすすけたビニールや木枠の補修をしながら頑張っていた。病害や潅水、施肥方法についての私の説明（ほとんど忘れてしまっているロシア語と専門語を知らない通訳の）に質問を浴びせて、自慢の収穫物をご馳走してくれた。ハスカップの採集をしているコリヤーク族の村（生産物は需要のなくなったトナカイ）では私の持参したワレーニエ（粒の残っているジャム）を試食して「どうすればこんな美味しいワレーニエがつくれるのか」、「成功したら日本へ輸出できるのか」と訊く。小果樹の研究所でハスカップの育種をしている女性研究員も同様であった。2 ヘクタールもの試験圃場、世界各地の遺伝資源圃を案内して食べ続け、私の妻のワレーニエの原料を訊ねた。社会のシステムが崩壊したことを意に介さない仕事ぶりをどう理解したらいいのか。

昨年2月のミャンマー、イラワジデルタは乾期の最中、何年も続く停電の中でキャッサバのでんぷん工場が人力で働いており、水田はマングビーンの収穫中、手刈り・水牛脱穀。わずかに水のある低地は乾期作のイネとスイカや落花生の鮮やかな緑、山羊とアヒル。豚、鶏は集落に入ると目に付く程度の数であった。食堂での食事はもちろんビルマ米、山羊、アヒル、川魚（ウナギのぶつ切りは最高の味）、チンゲンサイに似た葉物野菜の油炒めカレー風味を載せて食べる。美味しくて飽きが来ない。お粥にシャンツァイやチャイプのトッピングもさわやかで美味しい。日給 50 円、私たちが泊まった宿賃が200円の経済的には貧しい社会であったが、人々の表情、動きは活気があった。

ナラティワットの思い出

江柄勝雄
在籍：1987 年 4 月～ 1989 年 9 月
現在：JICA Seed Bank Project, Yangon, MYANMAR

87年6月から2年間、タイ畜産局のナラティワット家畜栄養研究センターで牧草栽培技術の共同研究を行なった。研究サイトの設定では Chanchai Manidool 部長と相談し、酪農の振興が望まれているタイ最南部ということになった。タイ側では家畜と牧草の2つの共同研究を希望していたが、取り敢えず牧草だけで開始ということになり、私一人の派遣となった。

現地で仕事を始めて3か月程経った頃に、シリントーン王女が視察においでになり、私は TARC タイ事務所の渡部光昭代表と共に、試験設計や TARC 概要を献上する光栄に浴した。おまけに、このシーンは TV でも放映され PR 効果も大きいものであった。

水田裏作用ソルガムの試験では、地主の Krab Tongchinda さん一家に大変お世話になった。耕起には耕運機を使わせていただいたが、圃場員は誰もその使い方を知らず、まず手取り足取りで教えていただいた。こうして播種は順調にいったので、発芽はどうかと毎日行って見るのだが、雨が少ないために全然発芽してこない。少し離れた田圃には水があるのだが、どう考えてもこれを利用する方法はない。その日も重い足取りで田圃に行ってみた。そしたら息子さんが、試験区にホースで水をやってくれているではないか！水道の蛇口からホースを何本も継ぎ足し、その延長は 100m 以上もあった。潅水のおかげで成果をあげることができ、感謝の念でいっぱいであった。Krab さんは村長を務めたことのある篤農家で、この後も大変お世話になった。

私がナラティワットを去る1か月程前に、タ

イの各地から 4 名の若い研究員が研修という名目で集まり、1 週間、最後の調査とデータ取りまとめを手伝ってくれた。このうちの Mrs. Ganda Nakamanee は、生後 6 か月の娘さんとメイドさんを連れて東北タイから1700km を列車でやって来たもので、本当に驚かされた。毎日午前中はデータ取り、午後はパソコンによるデータ処理を主体とした。Alyce clover のエコタイプには、葉の大きさや花の数に変異があり、クラスター分析の格好の材料だった。キーをたたいて BASIC のプログラムを入れるところから始めたが、全員興味を持ってくれた。結果は SABRAO の大会で発表というところまでいき、皆さんに喜んでいただいた。報告書の作成はたいてい夜にやったが、多くの職員が自発的に手伝ってくれたのには感激したものだ。若い圃場員は集計、若い研究員は図表作成、女性の事務員はワープロという具合で、女性は夜10時まで、男性は夜12時までもやってくれた。そして、所長の奥さんには、お夜食まで作っていただいた。夜遅くまで仕事をするのがいいわけはなく、タイの皆さんには本当に申し訳なかったと思っている。

あれから 10 年以上の年月が経ち、最近ではナラティワットの酪農もかなり発展したと便りがある。なつかしいナラティワットを再訪してみたいと思う今日この頃です。

熱研、その思い出

大 池 榮 一

創立 30 年、おめでとうございます。昭和 61 年（1986）10 月から約 3 年間海外会計専門官として在職し、他では味わうことができない様々な経験をさせて貰った。楽しいことも多かったが苦労もあった。初の海外出張で外国の異文化に直接触れたときの新鮮な驚き・興奮は忘れられない。

マルコス大統領の失墜や湾岸戦争勃発、米国の株大暴落（ブラックマンデー）、天安門事件、そしてベルリンの壁崩壊など歴史的な出来事が発生し、国内ではバブル経済の最盛期、ODA 予算の急増を追い風に熱研は強化され在外研究活動地域も拡大しつつあった時代である。ドルは 150 円台から 120 円台に急騰した。「円高で　海外送金　辞退をし」。在外研究員の川柳である。着任後約 1ヶ月、「ペルーにおける公金亡失事件」が発生。調査のためペルーへ短期派遣された研究員が、携行した 50 万円の公金を亡失した。調査初日、リマの南方の砂漠地帯で警察を装った一味に車を止められ、CIP から借りた車ごと身ぐるみ強奪された。ピストルも 1 ～ 2 発撃たれたという。一報の電話を受けたときの衝撃はいまも生々しい。公金はおろか旅費、パスポートも亡くした調査団の善後策を連日協議、回線の悪い電話での現地連絡……、結果的には大使館の農務官から私金を借用して調査を続行する事になった。その後、公金亡失の責任の有無について会計検査院と約半年間熱い折衝を続けた。前例がなく苦労したが、翌年 5 月無事「無責」の判定を得た。その直後通達が出され、海外への現金携行は禁止、すべて TC によることとされた。亡失した公金の債権管理を後年に残し恐縮だったが、強盗団が捕まったら、海外で債権をどう回収するか、と心配になったことを覚えている。

タイは、熱研の在外活動の最大拠点国、常時 7 ～ 8 名の長期在外研究員が駐在していた。農業局の片隅に 58 ㎡の一室を借り拠点としていたが大変手狭だった。61 年、突如視察した加藤六月農水大臣の肝いりでタイ事務所経費が翌年度予算化された。おかげで事務所の実現のため足かけ 3 年間苦労する羽目になった。不動産賃貸額の相場を調べたり、ジェトロや三井不動産などの現地事務所から情報を収集したり、タイ農業局関係者ともたびたび折衝した。平成元年（1989）9 月にはタイにおける「共同研究20 周年記念」のセレモニーも予定されていた。農業局の好意で、倉庫 280 ㎡（元カセサート大の講義室）を事務所に改造することが許可された。英文の工事契約書がないため官房営繕の工事契約書のうち必要と思われる条項をバートマンに英訳して貰い、現地の建設業者と 1 条ごと確認しあったり、タイ人の現場監督に工程管理をさせたことなど、今思い出すと何とも懐かしい。在外研究員の全面的なご協力を得て、無事モダンな事務所が完成。9 月 8 日には落成祝

いも兼ねた式典が日・タイ両国の関係者を集めて盛大に挙行された。その模様を現地の映像業者に依頼してフィルム化したが、どうなっているだろうか。

海外発送機材がココム規制で通関できず研究員は2年の任期を終了して帰国したこと、内乱の戒厳令で研究員を首都のホテルに避難させ定時連絡したことなど思い出は尽きない。熱研は国際農研センターに衣替えしたが、国際化のなかで果たす役割の重要性はより増すものと思う。今後のご発展を心からお祈りいたします。

熱研／国際農研の思いで

大津善弘
在籍：1994年1月～1995年7月
現在：果樹試験場保護部病害研究室長

熱帯農業研究センター／国際農林水産業研究センターの創立30周年を心からお慶び申し上げます。

筆者は上記の期間に、タイ国農業局（DOA）植物病理・微生物学部ウイルス研究室に在外研究員として1年間滞在した。さらにこの前後に、短期在外研究員として30日づつ4回派遣された。この間に「カンキツグリーニング病の診断と防除に関する研究」を当研究室のマイトリー・プロミンタラ氏（現室長）と共同研究した。当時困難とされた「グリーニング病の抗血清診断法」を確立した達成感をマイトリー氏と共に喜んだことを始め、楽しかった思い出が次々と思い起こされる。

1）派遣された当初、私に与えられた車は中古の青いトヨタコロナであった。車は事務所前の空地に留めてあるとのことで外に出た。入口の左側に極めて古い青いコロナが前向きに留めてあったので、これに乗り研究室に行った。帰りに車の後ろのガラスに「チェンマイ大学」と書いてあるのには驚いた。運転して事務所にもどり、藤本代表等に確かめたところ、我々の車はもっと「キレイ」なブルーで同じ番号のコロナであり、別に駐車してあったのである。

2）1995年熱研・タイ共同研究の25周年行事がバンコクで開催された。準備中の心労で藤本代表が急性胃潰瘍で入院された。行事終了後他の長期在外研究員がすべて一時帰国であったため、私は来タイされていた貝沼所長から「臨時代表代理を一ヶ月努めるように」口頭辞令を受けた。秘書タサニーさんの的確な協力を得て、当時事務手続きの遅れが懸念された原素之さんの来タイについて、水産学部の女性部長に会い、必要書類を早く出してくれるように交渉し、当初の予定時期に原さんは来タイできた。私の依頼に心良く応じてくれたことが加わって、水産学部長が格別に魅力的な人として印象に残った。

3）「ドリアンを冷蔵庫に入れておくからな」と言って中北さんが事務所を出ていった。しばらくして来タイしていた福井さんが「ではドリアンをいただきましょう」とそれを冷蔵庫から取り出し、同席の皆で全部いただいた。その後中北さんが戻り、「ドリアンが無いぞ！」と叫んだ。談笑していた事務室がシーンとなった。

4）長期滞在研究員を中心に30数名の方々に御寄付いただき1997年10月、タイ事務所秘書ワチャリナさんを日本に招いた。鈴木（代表）樋田（つくば幹事）、大津（会計）で事務局を務め、多くの方に現地対応をお願いした。彼女が大満足したことは言うまでもない。

一匹狼の群れ

岡部四郎
在籍：元熱帯農業研究センター所長

私が熱研に勤務したのは創立十周年を迎える前後の6年間であった。その私にとって草創期から揺籃時代の熱研をふり返ったとき、まず頭に浮かんでくることがある。それは「一匹狼

の群れ」という言葉である。この表現は、普通あまり褒めた意味には使われないようだが、熱研を生み出し、揺籃期の熱研を育て、その活動の推進力となった人々の姿を描くのは、「一匹狼の群れ」という形容が一番当たっている気がする。その当時の先輩や仲間の方達に深甚の尊敬と感謝の思いを籠めて、私はここでこの言葉を使わせていただく。熱研設立後間もなく、「熱帯農業技術組立研究」という新しい任務を担った研究第二部が発足した。その部長としての赴任が、私の熱研とのかかわりの第一歩であった。ところが、その私を最初に待ち受けていたのが、部内の一部からの思いがけない猛烈な攻撃だった。その代表格は敬愛してやまない今は亡き杉本勝男さんであった。彼の主張は「個別技術もしっかりと確立されていない今、何が『組立』ですか。私は組立研究には絶対反対です、協力できません！」彼の大声は、まさに「一匹狼」の咆哮であった。その彼を説き伏せようと、開発途上国での学際研究着手の緊急性を訴えるのに私は必死だった。「研究第二部の人達が集まっている部屋の前を通ると喧嘩同然の大声がして、何事が起こったのかと心配だった」と後で他の部の人から聞かされ、大人気無さを恥じたことを思い出す。けれども、こうした激論を重ねる間に、お互い自己主張をしながらも、共通の考えと目標に目を開かれ、そのために力を頒ち合おうとする機運が「一匹狼」の群れの中にも自然にでき上がって行ったのだと思う。

「一匹狼」というのは、本来、仲間を求めず、自分自身の主義主張によって単独で行動する人のことだから、「一匹狼の群れ」という表現には少し矛盾を感じないでもない。しかし、熱研設立の前後から揺籃時代の関係者が遺した記録をみると、それぞれが自己主張してやまない「一匹狼」ではあったものの、国際研究協力の重要性の認識と、日本の農業研究者が今後担う役割について共通の考えをもっていたことがわかる。そのような共通の土台をもつことで、それが絆となって互いの繋がりできたのであろう。その意味では、熱研の当時に関係した人達は、単なる「一匹狼」の群れではなかった。少数ではあったが、それぞれの立場で自主的に開発途上国との国際農業研究協力の発展に寄与することに生き甲斐を覚えた「世界に目を向けた啓発的な一匹狼の群れ」(a knot of the enlightened lone wolves) であったと言いたい。数も少なく猪突ではあったが、この一群の方達の行動が無かったならば、熱研は、あの時点では設立されなかったし、また揺籃時代の海外活動も発展的な展開はできなっかたに違いない。

農水省の当事者の胸中では、定員削減の流れに対する対応策として熱研設立の案が浮上したと聞く。確かにそれも動機のひとつではあったろう。しかし、私の在勤時代をも含め、当時は現在とは較べられないくらい国内指向・国内第一主義という閉ざされた空気が支配していた。その中でどうして熱研という海外相手、しかも開発途上国相手の活動に情熱を燃やす人々が生まれたのだろうか。いまもって不思議にさえ思う。よく閉鎖的、島国的国民性を指摘されるわれわれ日本人ではあるが、同時に「他人を考える心」も潜在的にわれわれの血の中に潜んでいるのではなかろうか。

当時の農林省には、技術会議に会長の小倉武一さん、事務局には石倉秀次さん、星出暁さん、内山泰孝さん、八田貞夫さん、それに発足後は初代所長の山田登さん、第二代所長の村上寛一さん、芦澤賢一さん、沖縄支所長の児玉敏夫さんが居られた。加えて一人々々のお名前は省かせて頂くが、少数の海外農業研究の推進に全力を傾けて下さった研究者と業務担当者が居た。察するに、中核に居た方達の先見性と決断がまず在って事は始まったに相違ない。その勇気ある決断が、志ある研究者に新たなる進路を提供し、彼らに海外研究を展開する機会と場をもたらした。

海外研究の経験が殆ど無かった時代に、とにもかくにも海外活動を推進できたのは、啓発的で開かれた思考の持主である「一匹狼の群れ」が居て、その決断、自主的な連帯、そして強い実践力があったからだと、当時の先輩、仲間の方々への尊敬の思いを新たにしている

思い出すこと　－マレイシア／石垣島－

岡本正弘
在籍：1992年4月～1995年3月　研究第1部→生物資源部
1992年5月～1994年11月　マレイシア農業開発研究所
1995年4月～1998年9月　沖縄支所　世代促進研究室、作物育種世代促進研究室
現在：九州農業試験場・水田利用部・稲育種研究室

「マレイシア産米の食味改良」といったテーマでマレイシアに行くことになったのは今から8年前のことである。この前後からの我が家の移動（異動にあらず）を振り返ってみると、最初の勤務地であった福山→つくば→マレイシア（ペナン）→つくば→石垣島→筑後（現在）となるわけで、よく動いたものだと感心する。家族を同伴していたので、長男などはペナンの日本人学校入学に始まって今春の小学校卒業まで、学校を4つ変わった。家族は大変だったに違いない。前置きが長くなってしまったが「思い出すこと」を記したい。

［思い出す食べ物］最初から食べ物の話で記念誌に載せるには品位に欠けるが、海外生活での楽しみは土地々々の食べ物ではないか。最初に思いつくのはペナンの福建麺だ。チリベースの真っ赤なスープに干しエビの旨みがたっぷり溶け込んでいて、これにラーメンと春雨ほどの太麺や細麺を織り交ぜて食べる。最初はぎょっとするほど辛いが、すぐやみつきになった。スチームドフィッシュは、白身系の魚を香草などと蒸し上げたもので、食べ終えた後に皿に残ったスープまで格別である。妹が友人と訪ねてきた時、友人が「こんなうまい魚料理を食べたことない」と文字通り最後の一滴までナメつくしてしまった。この他、マレーのカレー、スチームドボート、カリカリに揚げた豚の内臓をトッピングした屋台のお粥、石垣の八重山そばなど忘れられない料理は数多い。

［思い出す風景］ベスト1は、映画「南太平洋」の舞台にもなった南シナ海に浮かぶチオマン島。とくに、沖合に浮かぶコーラルアイランドの白い砂浜にうち寄せるコバルトブルーの波は呆然とするほど美しかった。石垣島の平久保崎やバンナ公園の展望台から見る東シナ海の眺望も記憶に残る。別な意味で忘れがたい光景は沖縄支所で起きた大規模な圃場陥没だ。豪雨の後、田んぼの水がひけると前日にイネの刈り取りをした所がぽっかりと抜け落ちている。陥没の規模は深さ2m広さ10m^{2}もあった。しかも、降り止んだ大量の雨水がゴウゴウとその穴に吸い込まれて行くのである。（陥没の原因は、農工研による調査では鍾乳洞の天井部分の岩盤崩落によるものらしいとの事だった。）

［思い出す人々］日本とマレイシアとの稲育種に関する研究協力は1958年から始まり私が15代目だった。40年近くも日本人研究者を受け入れてくれたため、現地のスタッフの方が我々の扱いに慣れており、カウンターパートや同僚の研究員、研究補助者にいたるまで公私にわたりお世話いただいた。見方をかえると、アジアの国々とそこまでの人間関係を築きあげてきたことこそが熱研の最大の功績と思う。石垣島のイネの世代促進も1981年に始まって今も続く長期事業であり、ほぼ一年中、業務科職員と研究員が一体となって世代促進作業に汗を流している。世代促進に限らず、現在も石垣島で溌剌と活躍されている多くの若手研究員や業務科の皆様方たちにエールを送りたい。

Saya orang Jepun la!

押尾秀一
在籍：1987年4月～1990年3月　熱帯農業研究センター第1部
現在：北海道農業試験場畜産部

オイルパーム副産物利用のプロジェクトで1987年7月から2年8ヶ月、熱研からマレイシア農業開発研究所（MARDI）に派遣されました。最初、予備調査で1987年の2月にマレイ

シアに行った時の印象は強烈でした。当時熱研のクアラランプールの常宿は中華街の真中にあるホテルマラヤだったこともあり、英語も大してうまくない上に、宿周辺の屋台で話されている言葉は全くわからず、英語で質問したつもりでも、訳のわからない言葉で答えが返ってくるのには面食らいました。今となれば、あれは広東語で労働者階級では英語が通じない場合もあるとわかってしまえば、なんと言うことはないのですが、当時は訳がわからず、屋台で飯が食えるようになったのは、それから2-3週間経ってからでした。また、クアラルンプールに着いて間もない頃に炎天下の中、市内を2-3時間散歩した途端に、全身水ぶくれになり、何か悪い病気に罹ったのかと慌てて宿に戻り、クーラーの下でしばらく休んだら水ぶくれが退いて、これは単に寒い日本で汗腺が閉じていたところに急に汗をかいたため排出できずに皮下に汗が貯まっただけと気付きホッとしたことを記憶しています。1987年の4月に熱研に移り、7月からMADRIに派遣された訳ですが、当時の研究第一部長は高橋達児さんがやっておられ、派遣される前にマレイシアでの仕事は、無事問題なく帰って来れば合格点をくれると言うことでした。と言いますのも、当時、クアラルンプールには熱研駐在員は一人だけで、他研究部門も含めて連絡調整、案内をすると言った旅行代理店並の仕事が多く、旅行代理店の仕事の合間に本来の仕事をすると言った状況でした。旅行代理店としては先ず最初に覚えなければならなかったのはクアラルンプール周辺の地理、安くておいしい飲食店、観光コースでした。お陰で当時は、いつ旅行代理店に転職しても良い位にクアラルンプールの昼夜に精通したつもりになっていました。また、単身赴任であったこともあり、先ず仕事よりも快適に生活できる環境整備が重要と言う認識もあり、勤務時間後、休日は殆どテニス三昧で肌もマレー人以上に焼け、日本人と思ってもらえないこともしばしばでした。タイトルはそんな時に冷かしの気持ちを込めて、「私は日本人だよ」と現地の人に言った言葉です。仕事の方もお陰で順調に進み、その後、JICA未利用資源飼料化計画プロジェクトに引き継がれ、昨年3月まで2年間、再度マレイシアにご奉公する羽目になってしまいました。同じ場所で同様な内容で別の組織から派遣された経験から、JICAと当時の熱研を比較すると、JICAは組織が大き過ぎ、何事も新宿の本部にお伺いを立て、末端での裁量権が少なすぎる気がしました。それに対し、当時の熱研は殆ど現場に任されており、良いも悪いも本人次第と言う感覚で、管理者、総務関係も顔が見える対応をしてくれたような気がします。今後のJIRCASも現場研究者の立場に立った木目の細かい対応ができる体制を期待します。

研究課題と手紙

梶原敏宏
在籍：1977年4月~1981年10月　研究第1部長
1986年10月～1988年10月　所長
現在：日本植物防疫協会会長

退官してからもう10年以上経過するので、多くの事が脳裡から消えつつあるが、研究第一部長だった4年半は想い出の多い時代だった。20周年記念の際、岡部元所長が「国際化：三つの方向」と題して特別講演をされ（熱研集報No68：7～9、1990）、その中で所長室での山田行雄企連室長と私の深夜におよぶ議論が紹介されている。岡部さんはその後も何かにつけその話をされるので強く印象に残っていると思われるが、私にとっても忘れがたい想い出の一つである。

その議論は熱研の研究課題に関してであった。岡部さんによれば、私は「派遣されるのは研究者だから、研究者が、一番やりたい個別課題を選ばせる」という意見、山田室長は「熱研は全体を総合した一つの方針を持つべきであり、研究者はそれに従う」という意見であったと紹介している。

確かに論点を要約すればその通りで、山田室長の意見が正論で、私の意見は横車を押しているようなもので、最近の研究課題の設定や評価の傾向からすれば、私などさしづめ研究管理者

として失格であると烙印を押され、技術会議から睨まれるのが落ちであろう。私が強硬に主張した背景について、若干補足説明が必要と思われる。

当時、研究第1部では熱帯における作物の育種、栽培、生理、生態、作物保護、地力維持、畜産、家畜衛生、草地改良など水産を除く農業関係の全研究分野にわたって技術開発に必要な個別的、素材的な試験研究を実施することになっていた。研究員は35～38名で25名前後がタイその他で長期在外研究に当っていた。熱帯農業の研究が開始されて間もなくのことであり、派遣要員を確保し、如何に成果を挙げるかを最大の目標と考えていた。農業全体にまたがる広い分野の研究、限られた要員という条件下では総合的な課題の設定など程遠い状態であった。また、私自身インドネシアにおける2ケ年の研究協力の経験から、個別研究では現地の数多くの問題点の中から研究者の最もやりたい課題を選ぶのが効果的であると考えていたからであった。このためには先ず個々の研究者を信頼し、それぞれの能力の範囲で最善を尽くすように仕向けることであると信じていた。途上国での課題の設定に当たって、この考え方は間違いであるとは今でも思っていない。

一方、山田室長は海外派遣手続きについて技術会議の担当者との折衝の責任者でもあった。当時の海外派遣は現在と違って厳しい制約があり、最終的に技術会議が派遣理由を了承しない限り実現しなかった。関係者の見解によって派遣理由にクレームがつき、手直しすることも再三で、かなり頭に来ていたことも多く、その度毎に、全体を統合した一つの方針を持つべきであるという考えを持っておられた。山田氏はもともと研究管理には厳しい意見を持っておられたこともあり、当然の主張で私にも理解できた。しかし、当時の熱研自体およびそれぞれの専門分野の状況から、統合的な実施課題の設定はむづかしく、仮に無理に設定したとしても実現不可能と判断したので、強硬に反対して譲らなかったというのが真相である。

前にも述べたが、私が在籍した当時の研究第一部の守備範囲は、広汎・多岐にわたった。そして常時 20 名以上が海外に派遣されており、研究の進捗状況、研究費や物品購入に関連した問題点などが逐一報告されてきた。現在は E-mail、Fax で簡単に迅速に情報が伝えられ大変便利になっている。しかし当時は電話網も未発達で料金も高く、任地によっては時差の関係もあって、電話は余程緊急な用件以外は利用せず、専ら手紙による連絡が主体であった。当然のことながら手紙には必ず返答を求められている事項が含まれている。すぐ返答できる事はとも角、自分の専門以外のこととなると研究の進め方など判断のつきにくい事も多く、専門の人に意見を聞いた上で判断し、急ぐもの以外は土曜日にまとめて手紙で連絡した。

手紙は薄手の用紙にカーボン紙を入れ、下書きで複写し、一部は必ずファイルして保管しておいた。4年半の間には相当な量（ファイル2冊以上）になったが、これに要した時間は研究論文数篇を書くのに匹敵したと思っている。農技研に転出するとき、引継ぎの意味もありすべて後任者に渡した。その後組織の改変などもあったので処分されてしまったかも知れないが、もしどこかに保管してあれば、当時の想い出として、もう一度読み直して見たいと思っている。

初めての東北人

片岡健治
現在：宇都宮大学農学部

九州農試（熊本）に在籍していた1988年に熱帯マメ科牧草に関する流動研究員として熱研沖縄支所に2ケ月間滞在したことが、国際農研との因縁の始まりであったのかも知れない。九州農試での後半3年間は企画連絡室に在籍したが、発足したばかりの新官職になじまず、現場であれば何処でも良いと異動を申し入れ、図らずも熱研へということになった。国際農研に在籍したのは93年から熱研最後の半年を含め5年間であった。タイへの派遣が93年10月であったから、国際農研としての最初の海外派遣者であったかも知れない。国際農研の思い出といえば、最後の企画調整部海外研究交流科での1年間を除けば、ほとんど3年半にわたるタイ

での共同研究に関わると言ってよい。

タイ畜産局との家畜・牧草飼料作に関わる共同研究は92年12月までタイ南部のナラティワットで数年間行われていたが、治安に問題ありとして東北部のコンケンに拠点を移すことに決まっていて、ほぼ1年間の中断の後に再開された。タイ側はゴム園などのプランテーションと結びつけた牧草栽培・牛肉生産になお執着しており、家畜栄養研究センターやコンケン大学などである程度の研究実績のある東北部では、「牧草栽培面であなたに期待することはない、むしろ育種を含む牧草採種の研究をやってくれ」とあからさまに言われたものだ。その任ではないからと断ったが、それ以来の畜産局の執念が昨年のJICAプロジェクトの発足となっている。

農業局とは違って畜産局の研究員の陣容は少なく、カウンターパートの位置づけも希薄で、今は次長になっている中堅クラスで多忙な研究員が私にあてがわれた。その彼が私の試験現場に付き合ったのは、在任した3年半の間にわずかに数回であった。最初の大仕事であった事務所開設、物資調達、会計事務、試験現場でのワーカーとの折衝など、あらゆる場面で雇った運転手こそが無二のカウンターパートであった。彼とコンビを組むうえでも現地語は必須で、1年間で断念はしたが、小学1年用教科書での女房と一緒の”お勉強”はタイでの思い出の最たるものである。おかげで、95年10月から発足した「東北タイプロ」での現地試験では、ワーカーたちと冗談も言い合えるようになった。風邪をこじらせた中耳炎で、日本語が通じるバンコクの病院に1年以上通ったのは苦い思い出である。タイ事務所の秘書に電話をするとき、ハローに続けて「こちらはコンイサーン（東北人）」と言って笑わせたものだった。バンコクから見ると東北人は貧しい田舎っぺで蔑みの対象である。長期派遣では初めての東北人はいつの頃からかルンケン（ケンおじさん）と呼ばれるようになった。仕事のことよりも、そんなことばかりが走馬燈のように駆けめぐる。

シータエリヤ・考

勝部　利弘
在籍：1973年5月～1975年

1973年5月、大曲市（東北農試）から、スリランカ共和国（当時）の高地、ヌワラエリヤ市に引越し、近郊のシータエリヤ農研に勤務することになった。リトルイングランドと異称される霧の街ヌワラエリヤには二年余り暮らした。標高2,000m近い高地は、年間セーターを着用するほど冷涼で、寒冷期には作物の霜害が酷く、現地の研究者たちは下界への転勤を切望する者が多かった。さて、勤務地のシータエリヤ農研の名称に就いて、これはヒンズーの二大叙事詩の一つ、ラーマーヤナに由来する。ヌワラエリヤ市に隣接するシーターエリヤ村は、この物語のヒロイン、シータ姫がダンダカーの森（マイソール王国）から、ランカ国の大魔王、ラーワナに誘拐され、幽閉された、ランカ（アソカ）の森の城砦の址に擬せられ、農研の近くに、小さなヒンズーの祠（コビル）があった。ヒンズーのもう一つの叙事詩マハーバーラタは、ラーマーヤナよりも大分長い物語で、古代インドの多くの神話・説話・哲学・法典・政治・経済が語られている様だが、ラーマーヤナはラーマというインド古代の英雄（ビシュヌ神の化身といわれる王子）の物語である。共に本邦の記・紀に相当するものと言えようが、その成り立ちは遙かに古く、BC十世紀以上に遡るとされている。ラーマーヤナのヤナは鏡のことで、賢明で武勇に優れ慈悲深いラーマは、古代インドの理想の男性像、として描かれている。また、ジャナカ王の王女として育ったシータは、父王が耕す畑で犂の先から生まれたと言われ、農耕民族の原点を彷彿させる。名前は地味でも、絶世の美女に成長してラーマ王子の妃となり、大魔王ラーワナに捕らえられて、ランカの森に閉じ込められても、貞節を守り抜き、大魔王を倒したラーマに助け出されて、無事帰国する。美しくて貞操は堅く、謙虚で心根の優しいシータは、古代インドの理想の女性像として登場する。ラーマーヤナは遠い昔から、吟遊詩人によって広められ、文字に書かれる様になって、全六巻、四万八千行の長い抒事詩である。

インド国内に留まらず、東南アジア全域に広まり、それらの国々の芸術・文化の遺産と成っている。物語に登場するスーパーマンキー、ハヌマーンは西遊記の孫悟空の原型と言われ、ラーマがハヌマーンやガルーダを率いてランカの大魔王を征伐するのは、桃太郎の鬼退治の原型と考えられる。本邦へは、平安時代に、紹介された本が在ると言う学説もある。スリランカの高地には、シータエリヤやラーワナエッラーなど、ラーマーヤナに登場する地名が、現在も沢山残っており、この物語が、詩人バールミキのフィクションに過ぎないと、速断してはならないような気がする。ヒンズー世界の聖女の名を冠した研究所で、西ドイツ（当時）のJ. カールス君やG.クラウス君および現地のシンハリ、タミール族の研究者たちと苦楽を共にした日々が懐かしく思い起こさせる。17年後の1990年に再び滞在したシータエリヤ農研は、打ち続く内戦の影響でかなり疲弊していたが、旧知のタミール族職員と再会できた。近くの、シータ妃縁りの、ヒンズーの小祠（コビル）は、小奇麗に改修されており、心休まるものを感じた。

ペルー短期派遣の思いで

加藤眞次郎
在籍：沖縄支所　2.5年、基盤技術研究部、生物資源部4年

湾岸戦争の年度だった。日高部長よりペルー、ボリビア、コロンビアの短期派遣の話があり、3日以内に返事をくれとのことであった。四国農試の中西建夫室長がヤーコンの遺伝資源収集に行きたい旨を日高部長に話していた。特別用事もなかったので中西氏と行くと返事した。予防接種を受けに行ったら、医師が「テント担いで、ゲリラに会いに行くのか？」と変な質問をしてくる。バートマンさんは「コレラが発生して危ないぞ。」と脅かす。なにはさておき出発だ。深夜リマに到着。途中片手を無くした子供が金をせびりに来る。CIPでの生活は快適であった。部屋は広いし食事もデザート付きでボリュームもたっぷりで申し分ない。CIPに滞在中にJICAが支援している野菜生産技術センターに見学に行くことになった。北農試からCIPに派遣されていた佐藤章夫氏も同行した。砂漠のような所を1時間程行くとセンターがあった。地下水を汲み上げ、露地とハウスで野菜を栽培していた。JICAの日本人3人はリマにいって不在とのことだった。クスコに行った時、現地では2台の車に分乗し走った。所々土の山が進行を妨害していたが、ゲリラのしわざであるという。車にはピストルの名手が乗ってるから安心しろとCIPの渡邊和男氏に言われたが、バッグの中の抜き身のピストルを見るとあまり気持ちの良いものではない。周りの風景はのどかなのに、いつゲリラが襲ってくるかと心配してしまう。ペルーを出国した時には、思わず大過無くペルーの日程をこなした事を企画連絡室長に電話で連絡した。無事、我々は予定通り帰国したのであるが、帰国して数ヶ月後、夕方テレビのニュースを見ていたらどこかで見かけた光景が写っている。ハウスのガラスは破壊され、建物の床は血痕があった。ペルーの野菜生産技術センターである。3人の日本人はマシンガンを持ったゲリラに殺されたのだ。3人の冥福を祈りペンを置きたい。

思い出の熱研

川上潤一郎
在籍：1970年6月～1977年3月　企画調査室

熱研の発足と時を同じくして、農事試より企画調査室に赴任した。当時熱研は、上中里駅の近くにある、農総研の図書室の一画に仮住まいしていた。一匹狼的な研究員は多士済済。出入りも多く、話題は豊富。活気に満ちていた。

旧い組織体制の中に新設された、熱研の研究推進には多くの問題があったが、海外との交流が、現在ほど常識化していなかった当時として

は致し方なかったことだったかも知れない。

筑波移転の際には、熱研は先陣を承った。今でこそ筑波は立派に整備されているが、当時は、風が吹けば埃は舞い上がり、雨ならば道はぬかって長靴でなければ歩かれぬ状態であった。熱研の白い建物がぽつんと原野の中にあった。交通手段もなく、荒川沖駅までの朝夕の特別小型バスで通勤する人が多かった。私はしばらく独身宿舎から4キロ程自転車で通ったが、朝、通った道路が昼間の工事で掘り返され、夕方暗くなっての帰りに大きな穴に落ち込んだことがある。怪我は免れたが、買い物の卵はめちゃめちゃであった。

私は企画調整室の一員として、研究員の派遣・国際シンポジュウムの開催・関係各国の研究管理者の招聘などに関する調整・緒手続きを主たる仕事としていた。

初代所長は山田登氏であった。余人をもって替えがたしとの理由で定年を延長された。高名な稲の生理生態学者であり、勉強家であった。誰よりも早く出勤して読書しておられた。国際機関での経験も長く、英語の達人であった。提出した外国向けの手紙など散々手直しされた。出来あがったものは、英語公文の手本として、その後何回参照したことか。研究員の英語の研修にも熱心で、海外報告を英語で、という時があったが、報告者は所長の前で汗を流した。英語の上手な外人の文章の中で、論文発表によいと思われる、相当長いセンテンスを暗記しておられたのに驚いたことがあった。

マレーシアは、稲作分野で研究協力に力が入っていた国の一つである。共同研究によって日本の若手研究者が熱帯稲作を体験し、現地側は日本の技術を吸収した。育種は特に長期にわたった。私は昨年、現地を訪れる機会があった。丁度稲新品種が公表された後であった。それは、日本からの研究員のカウンターパートを長期間つとめた、ハジム氏によって育成されたものである。彼は、育種は日本の研究者に学んだと高く評価している。残念なことに、稲作機械化の共同研究の成果は、全く残っていなかった。いろいろ論はあろうが、稲作状況が全く変わっていた。

思い出はつきない。庶務・会計などの事務関係をはじめ、パートで協力願った方々や、多くの先輩友人に会えて学んだ機会を、貴重なものとして感謝している。創立三十周年の祝意を表すべく、発足当時のほんの一部を記した。

熱研／JIRCASでの10年間

川嶋浩二

私が食品総合研究所から熱研に異動したのは昭和61年12月で47歳だった。当時、熱研は今と異なり研究機関としては二級市民のような評価があり、尊敬する諸先輩からは熱研に移るのは思い止まるようにとアドバイスを頂いた。これは最近のJIRCASからは想像出来ないかもしれない。何故熱研を希望したか。私は24歳で公務員となったので定年までの36年間の内すでに2/3に近い23年間が過ぎていた。翻って見るとそれまで私のやってきたことは国としてカバーしておくべき仕事ではあったがそのままで良いのか自信が無かった。そんなわけで残された1/3の研究生活はもっと実際に人の役に立つ仕事をしたかった。

熱研では研修期間の後、タイに派遣されトウモロコシのカビ毒汚染問題に3年余り取り組むことになった。このカビ毒は主として*Aspergillus flavus*が生産するアフラトキシンで地上最強の発癌性物質である。アフラトキシン汚染を理由に日本は最盛時100万トン近くあったトウモロコシの輸入を禁止したためタイとの間で軋轢を生じ外交ルートを通じてタイはわが国に研究協力を求めてきた。私が赴任する以前は、バンコクに川杉正一さんが長期滞在し日本から短期出張してくるカビ毒専門家の世話をしていた。専門家はタイ各地の土壌から有害カビの分離検出を行ってこのカビの地域的、季節的な検出頻度や分布の調査を続けていた。しかし分布調査を繰り返してもタイトウモロコシがいつ、どこで、なぜ有害カビに汚染されるのかそのメカニズムを解明するのはなかなか難しかった。そこで着任するとタイ農業局の共同研究者と相談して農家、集荷業者、貯蔵倉庫、仲買い人、輸出業者、飼料ブローカーを尋ね、彼らの間を流通していく同一トウモロコシについて追跡し、有害カビの汚染が発生する段

階を明らかにすることとした、早速バンコクの北 100km 程のところにあるプラフタバーの農家3軒と契約し、収穫直前から1ヶ月以上現地に泊込みして農家とそれ以降のトウモロコシの流通を追跡調査した。当初われわれは天日乾燥が不十分なため有害カビの汚染が始まると考えたのだが実際に調査を始めて見ると予想外の結果となった。即ち、収穫後トウモロコシは乾燥場へ運ばれる前に脱粒機でバラバラにされるのだがこの脱粒過程で粒の先端にキズがつきそこからカビの汚染が始まるらしいことがわかった。つまり脱粒工程がカビの接種工程になっていたことになる。脱粒後ただちに乾燥しないとトウモロコシは高水分のため速やかにカビの増殖が始まり、2－3日ですっかりカビだらけになる。次に天日乾燥場で気を付けて見ていると何らかの理由でカビだらけになったトウモロコシが時々持ち込まれるがこれがトウモロコシ全体のカビ毒汚染レベルを上げる原因になっているらしい。その外、全く乾燥されないまま流通し大都市の飼料会社やトウモロコシ輸出業者に持ち込まれるものがかなりあるらしいことが判ってきた。更にタイで有害カビ汚染が減らない別の理由として価格の問題があった。トウモロコシの取引価格は水分含量でほぼ決まりカビやアフラトキシンによる汚染度合は分析が煩雑で費用もかかるため実際はほとんど考慮されていない。つまり「きれいな」トウモロコシも「汚れた」ものも水分含量だけが問題で業者にはカビ汚染を軽減するインセンティブが事実上存在しないのだ。案外これが最大の問題点かも知れないと感じた。

タイトウモロコシのカビ毒問題は要するに乾燥を十分におこなえば事たりるのだが脱粒後カビの増殖が始まるまでの間に素早く乾燥場に持ち込まねばならないこと、トウモロコシの収穫が一定時期に集中すること、天日乾燥場が十分には無いこと、乾燥中にしばしば降雨に見舞われること、機械的乾燥装置は装置そのものが高価な上に使用料、電力供給、メンテナンスなどで様々な難点のあることなどがわかった。現地で実行可能なカビ汚染防止法を種々検討した結果、意外なことに乾燥させることをせず高水分のまま脱粒トウモロコシを厚手のプラスチック袋に密封するのが最も良い方法であることがわかった。袋の中では Aspergillus flavus だけでなく全てのカビが自己呼吸による酸素不足で死滅しカビ汚染に関してはすっかりきれいになった。コロンブスの卵のようクリアカットな結果で我々自身もなかなか結果を信じることが出来なかった。

トウモロコシはタイ政府の重要な輸出農産物であるため熱研以外にも JICA では3つのプロジェクトの中で同時にこのカビ毒問題にとりくんでいた。中でも JICA の「タイトウモロコシ品質向上プロジェクト」では有害カビのトウモロコシ汚染防止を重要な課題としていたので仕事内容が我々とまともにぶつかっていた。しかもこのプロジェクトは我々熱研と同じくタイ農業局の Plant Pathology and Microbiology Division を共同研究相手としていたので互いに仕事が競合し軋轢を生じることが心配され当時の熱研小林仁企連室長から JICA チームとは行き違いのないよう繰返し注意を受けた。しかし実際のところ吉山武敏 JICA チームリーダーは農水省OBでもありお互いに研究状況を逐次報告しあうとかコンパを共にするなど日頃から連絡を密にしたせいか特にトラブルもなく協力しあえたのは幸運であった。我々熱研の方が先に研究を終了して帰国する際、熱研のカウンターパートが JICA に引き継がれ我々のそれまでの研究成果が彼女を通して JICA に継承されることになった。JIRCAS と JICA の連携を考える上でこのような協力も一つの可能性と思う。

途上国での共同研究では共同研究者つまりカウンターパートに恵まれるかどうかが大きな分かれ目となる。我々熱研チームのカウンターパートは Mrs. Prisnar Siriacha でご主人は地方政府の安全担当官。子供2人を抱えながら休日祭日出勤や地方出張にも頑張ってくれた。しかし共同研究を始めた当初は日本および日本人に対するわだかまりがあったようで我々にも手厳しい態度であった。タイでは女性研究者に優秀な人を見かけるが Mrs. Prisnar は後日熱研および JICA での共同研究成果を論文にまとめ東京農大から博士号を取得した。その際熱研と JICA がうまく連携し協力出来たのも一つの成果と言える。PhD. をとる過程で彼女は日本側の誠意を理解したように思う。同じカビ汚染問題を JICA と熱研は別々に取り組んだのだが、この時感じたのは熱研の小回りの良さである。例えば、研究者の判断次第で研究内容をそ

の時に最も必要な方向に舵取りすることが出来るがJICAは此の点が不得意だ。研究費についても総額ではJICAにはるかに及ばないが自由になる部分が大きいので研究者は必要な資材を早期に入手すことが出来た。また熱研ではJICAほどチームワークのために余計な神経をすり減らすこともなかった。

帰国後はプロジェクトに合わせて研究者を探しだし海外に派遣する業務に合計6年余り関与した。要するに「人買い業」ということ。プロジェクトの成否は担当する研究者に負うところが実に大きいから高いレベルの研究者を選択する必要がある。多様な研究分野に渡って有能適切な人材を探し出すのは容易な事ではないのだが、結果的には「案ずるより産むが易し」で結構何とかなるものだった。人探しの秘訣は時間をかけて諦めず気長に構えること。あるいはあるべきことを予測して早くから手を付けること。研究者にも研究機関にも事情があって熱研／JIRCASに異動し、さらに海外で研究をとなると簡単には行かないのだ。それでもしかるべき機関のしかるべき筋を通して早くから要望を出しておくと初めはとても難しかった人事が突然実現したりした。時に私の方が筋を通さずイレギュラーなアプローチをして後で捩じ込まれたこともある。逆に無理矢理人を押し込まれた場合もあった。熱研／JIRCASで海外研究に関わったかなりの研究者は、国内では実現出来ないスケールの大きな仕事に従事出来たのではないだろうか。途上国での経験が研究者のその後の活躍に有形・無形に活かされていると思う。つまり途上国での活動が日本国内の研究レベル向上に寄与していると考える。結局熱研／JIRCASには約10年間お世話になり定年2年前に退職した。

最後にエージェンシー化後のJIRCASに望みたいこと：①公務員以外にも民間人を含めた幅広い人材の活用。外国人を10%以上に。②先進的開発途上国は思い切って共同研究相手から外す。③逆にミャンマー、インドなど馴染みの薄かったアジア諸国との連携強化。④間口は狭くても長期間（5－10年）継続させる研究。継続は力なり。⑤若い研究者を順ぐりに国際機関に派遣して訓練。⑥JIRCASはまとめ役、途上国研究者だけで行うプロジェクト。⑦成果の普及まで視野に入れた共同研究。

TARC/JIRCASで過ごした私の青春時代

北村　義信
現在：鳥取大学乾燥地研究センター

国際農林水産業研究センター（JIRCAS）が、本年をもって創立30周年を迎えられることを、OBの1人として心よりお慶び申し上げます。

TARC/JIRCASには、3度にわたり延べ13年3カ月も在籍させて戴きましたが、得るところの多い充実した期間でした。最初にお世話になったのはTARCが創設されて間もない頃で、当時私はまだ20代でした。経験豊富なベテラン研究者が多い中で、私が最年少であったと思います。従いまして、TARCというと私の人生の中で、（オーバーかも知れませんが）青春時代を過ごしたところといった感があります。毎日15分程のお茶の時間に、家庭的な雰囲気の中で、諸先輩からうかがった貴重なお話の数々は、その後の私の人生において、大いに参考となりました。

また、2度にわたる長期在外研究員としての仕事では、大変刺激に富んだ貴重な経験を積ませて戴きました。これらは、私にとって何物にも替え難い財産となっています。スリランカでは、2年9カ月間「ドライゾーンにおける農業用水量に関する研究」を、マレーシアのムダ地区では4年間「水稲二期作のための広域水管理に関する研究」を行いました。両国で行った仕事は、「Management of irrigation systems for rice double cropping culture in the tropical monsoon area」として取りまとめ、京都大学より学位を得ることができました。

海外勤務では仕事を通してだけでなく、趣味を通した交流によっても多くの友人ができ、沢山のなつかしい思い出を作ることができました。スリランカでは、講道館から柔道の普及のために派遣されていた専門家を補佐し、同国の柔道の発展に少しは貢献できたと思います。日本国大使主催の全スリランカ柔道大会の主審を務めたりもしました。シンハリ人もタミール

人も、軍人も警官も、会社員も学生も、一緒に稽古に励んでいい汗流していた当時が懐かしく思い出されます。内戦を経て、彼らの消息が気になるところです。

マレーシアでは、余暇をアロスターのジョギングクラブの仲間と楽しみました。同国では市民を対象にした10kmレース、ハーフ・フルマラソンなどランニング大会が大変盛んで、随分とエントリーしたものです。南国ですので朝暗いうちにスタートし、日が昇る頃にゴールインしますが、なかなか爽やかで気持ちのいいものでした。これらの大会で得たトロフィー、賞状はいつまでも私の宝物です。いつの日かまたマレーシアを訪れ、当時の仲間と一緒にランニングを楽しみたいと思っています。

私はJIRCASを去ってはや5年目の春を迎えますが、大学へ移籍後もJIRCASには大変お世話になっております。1996年～98年には、JIRCASが実施された「中央アジア塩類土壌の回復技術の確立に関する研究」（研究代表：松井重雄国際研究情報官（当時））に参画させて戴きました。この研究を通して、お陰様で多くの成果を挙げることができました。

TARCからJIRCASへと組織が発展・拡大し、研究成果も着実に挙げられ、国際的評価も高めておられることに、つくづく感心しております。組織が大きくなっても、TARC創成期の頃のような和気藹々とした家庭的な雰囲気を、将来的にも保ち続けて戴きたいと思います。今後も益々JIRCASに対する内外の期待は高まっていくことでしょうが、JIRCASの持ち味を活かして、地に根ざした堅実な歩みを続けられることを期待します。

TARC/JIRCASは私にとって故郷のようなものであり、ときどきは里帰りさせて戴くつもりです。また、鳥取方面へお越しの際は、是非お立ち寄りください。今後も深いおつきあいをお願いしますとともに、益々発展されますことを心よりお祈りいたします。

熱研／国際農研の思い出

木俣　勲
在籍：1981年4月～1990年3月　研究第2部、企画連絡室

熱研所属期間は9年間で、決して短い年月ではありません。この間様々な事態に遭遇しました。まず、56年6月～57年3月まで、マレイシアムダ地区アロスターに滞在しました。当時のメンバーは野崎、八島、山崎のベテラン3氏及び一緒に赴任した田中、外山両氏の6名でした。他に同時にクアラルンプールに着任した今泉氏がおりました。田中氏と私は借家に同居して、通いの中国系マレー人のメイドを一人雇っておりました。、外国暮らしは私にとって初体験のことで毎日が物珍しいことばかりで夢のようでしたが、田中氏をはじめ皆様にとってはさぞご苦労なことであったに違いありません。1年足らずの滞在後ただちにJICA国際農業研修センター（つくば市）に転勤を命ぜられ、今度は、海外からの派遣研修員を受け入れる立場になりました。唯一の出向者ということで厳しさを覚悟しての赴任でしたが、案に反して周囲の目は温かく、ここでも多くの知己を得て楽しく仕事ができたことを感謝しております。ほぼ5年間の勤務の後、再度熱研に戻り、企連室で海外からの研修員の受け入れ、国際シンポジウムの開催等に関わって来ました。振り返って見ると、農工研から熱研に事実上在籍すること9年にもおよび、周囲から海外経験豊富だと思われた節もありますが、外国暮らしはマレイシア1国でそれも1年足らずです。しかし、様々な外国人及び研究者達とのお付き合いの機会は結構あったんだなあーと思うと感慨無量です。今後、我国はますます海外との付き合いが欠かせない情勢にあることを身をもって感じている次第です。したがって国際農林水産業研究センターの発展動向は各方面から注目されていると確信しております。在籍の皆様のご健闘、ご活躍をお祈り申し上げます。

小さな親切大きなお世話

桐生勝之
在籍：1991年4月～1996年3月　総務部

TARCからJIRCASへ組織が再編されたその日を挟んで、前後に各々丁度2年半づつ、TARCでは最後の海外会計専門官として、また、JIRCAS では初代の海外業務管理課長として、通算5年間に亘り一貫して在外共同研究活動の支援窓口業務を担当する部署に勤務させていただきました。

その間、海外会計の年度末事務処理や在外物品管理関係手続き事務等の用務で、在外共同研究現場へ出張する機会にも恵まれ、数人の研究者を訪れましたが、いずれの国に於いても諸環境や慣習の違い等から日本の常識の適用は困難と思われる場面が多数有ることを知り、そんな不自由な中で日夜孤軍奮闘し活躍している研究者の姿に敬意を表すると共に、何とか意向に添った支援をと関係者で知恵を出し合いながら、それなりに国内関係法や諸制度等の規制と在外研究員の要望との接点を近づける工夫をしてきました。

そんな或る年の初秋の頃、収穫感謝祭の話をしていた折に、ところで在外研究員は参加できないなと言う話に派生し、それならば海外で年を越す長期在外研究員にも、収穫感謝祭参加は出来ないまでも、収穫米で作った餅でも送って正月気分でも味わってもらうことにしようではないか、と言うことに話が落ち着きました。そして、私たちの部署が実行部隊の中心となって、業務職員のご尽力の下に、職場で収穫したモチ米でついた餅を1人分ずつ書籍の大きさにカットして、食総研のご指導ご協力の下に真空パック詰めにして、書籍用の包装で全員に送ったことがありました。

送る側としては、気の利いた良いアイデアであると胸を張らんばかりの自信でもって到着の報を待っていたところ、受け取った在外研究員からの反応は予想に反するものが多く、顕著な例としては、書籍扱いとして送ったことに対して、偽りの通関品として通関当局から怒られてしまったとか、到着までに長期間を費やし、カビの固まり状態となった餅を高い保管料を払わされた挙げ句に受け取らされた、などの話が次々と飛び込んで来てしまいました。

小さな親切大きなお世話とか下手な考え休むに似たりとかの諺？の見本のような、大迷惑の押し売り状態となってしまった結末に、大きなショックを受けたと共に、大いなる教訓材料として、未だに思い出す度に冷や汗が出てしまう程強く焼き付いて離れません。

何事も互いに相手の立場に立って考える努力が必要ですね。

蒸し暑さとそして人々のこと

桑原　雅彦
在籍：1991年4月～1995年3月　生産利用部

私は1991年8月から1994年9月までアブラナ科野菜の大害虫コナガの薬剤抵抗性をテーマに、タイ国農業局昆虫動物部に滞在しました。タイ国との関わりは食総研貯蔵害虫研究室に在籍中の1989年8月に、貯蔵害虫を見て歩く短期派遣の機会を与えられたのが最初でした。一般常識として、熱帯圏における貯蔵害虫の被害の大きさを予想して出かけたのでしたが、荷動きの激しい港湾や大規模な精米所の閉鎖的な貯蔵庫では害虫の発生が多いのに対し、疎放的で開放的な貯蔵方法を行っていた小規模な精米所や農家の貯蔵庫では、意外にも害虫の被害はほとんど認められない程度であったのは大きな驚きでした。そこにはクモやアリ、各種の寄生蜂類が豊富で、これらが害虫の発生を抑圧している一因ではと思われ、熱帯圏における生物相の豊かさとその多様性に強い印象をうけました。

野菜は単位面積当たりの収益性が極めて高く、米や一般作物では考えられないほどの化学肥料や農薬が大量に使用されています。とくに大消費地バンコクとその周辺には耐暑性の強

い軟弱野菜類を連作する極めて集約的な栽培地帯があり、そこで多発するコナガに薬剤抵抗性が顕在化し、栽培上の大きな阻害要因になっていました。滞在期間中に各地域における薬剤感受性の実態、とくに細菌製剤のBT剤の効果が安定していること、および発生生態をはじめ、熱帯特有の生態学的新知見を得ることができました。未だ興味の尽きない熱帯の害虫ですが、無事任期を全うして帰国した今、労苦を共にした共同研究者諸氏や快く調査の便宜を図って下さった現地農民への感謝の念と、彼等の更なる研究の発展ならびに安定した生産を祈らずにはおられません。

私のタイ滞在中は経済的にはバブルの崩壊で日系企業が次第に引き揚げ始めた頃で、景気後退が顕在化し通貨バーツが暴落してアジアの経済危機の先鞭をつけたこと、政治的には旧態依然とした軍事政権が、内部で相も変わらぬ利権争いを繰り広げ国民の信を全く失っていた反面、中産階級の台頭と彼等による民主化要求の大きなうねりが肌で感じられた頃でした。そんな折、1992年5月には国会外で軍部独裁政権に反対する民主化闘争が激化・騒乱状態になり、17日深夜には遂にデモ参加者に対し軍隊が無差別発砲し、多数の死傷者を出す最悪の事態に至りました。周囲の雰囲気から事態が次第に深刻化しつつあることは予感できました。数日前からマスコミは軍部の管制下に置かれ、カウンターパートが連日デモに参加していて詳しく情報が掴めない状況でした。翌日、車で出勤のため脇道から大通りにでたところ、いつもは車で大渋滞する通りがガラガラで何か変だなと思いましたが、交差点で数台の戦車とその陰に完全装備の兵隊がライフル銃を構えているのが目撃され、ようやく重大性が理解できたような次第でした。早々にUターンして帰宅したところ、非常事態が宣言され公務員は3日間の自宅待機が出たこと、夜間外出禁止令が出たので注意するようにとの連絡が入りました。長期化に備えて恐る恐る食料の買い溜めにでかけたところ、出動した戦車の陰で屋台が店開きしていて結構繁盛していたのには正直言ってズッコケました。いくら政変慣れした国民とはいえ、こうしたゴタゴタが庶民とは縁遠い世界で幾度となく繰り返えされてきたわけで、まさにここは”外国”であることを実感した次第でした。その後、国王が仲裁に入り、首相辞任と憲法改正案が国会を通過してようやく沈静化に向かいましたが、曲がりなりも民主化に向けて政治体制が大きく舵を切った歴史的な節目に、偶然にも居合わせたことになります。

1994年9月には国際農研センターとタイ側との共同研究開始25周年記念行事が、多数の関係者のもと、バンコクのセントラルホテルで開催されました。日・タイ両国関係者の絶大なるご支援をいただき、25年の総括と今後の更なる発展を期して、盛会裏に会を終了することができました。これもひとえに諸先輩方が幾多の困難を克服されつつ営々と築き上げてこられた研究実績がタイ側に高く評価されていること、そして何よりもお互いの強い信頼関係がそこに構築されていたからに他なりません。諸先輩方のこれまでの苦労に敬意と感謝の念を払いつつ、計画の段階から大会の終了まで奮闘された藤本代表はじめ、それぞれの持ち場で任務を全うされた当時の長期滞在研究員諸氏と共に、無事に会を乗り切った喜びを分かち合った次第です。

3年余りの短い滞在でしたがそこで実感したことは、「微々たる知識よりもまず現地の気候・風土や習慣に順応できる体力、そして異なった価値観や倫理観にも柔軟に対応できるタフな精神力が求められる」ということではないでしょうか。

マレーシアの想い出

小林　陽

私がマレーシアのMARDIボンボリマ稲作試験場へ派遣されたのは1980年7月～1982年7月で、年令は41才から43才の時であった。つくばの熱研へ転勤したのが4月で、その時はマレーシアへの派遣予定は10月ということであった。それが7月に早まってしまい、子供二人は3ケ月でまた転校となった。私もバートマンさんの英会話レッスンが30時間の助走だけ

となり、現地へ行ってから苦労した。ペナン国際空港に着いたときはもう暗かったが、空港の周りにあるヤシの木のシルエットを見て、異国の生活の始まりを実感した。着いた日から前任者の斉藤さんの借家に入れてもらい、2週間家族5人がお世話になった。

私は日本でツマグロヨコバイという虫が媒介するイネのウィルス病に対する萎縮病耐病性の研究をやっていたので、マレーシアではタイワンツマグロヨコバイが媒介するイネのツングロ（ウィルス）病耐病性を中心にイネの広域適応性の研究も行うという計画を出した。しかし、MARDIの方ではイネのトビイロウンカに対する耐虫性を中心とし、イネの天水田適応性の研究も要望された。天水田適応性の方は断ることが出来たが、トビイロウンカは断れず、ツングロ病と両方を行う覚悟をした。ところが、その直後にマレーシアにおけるツングロ病の大発生が伝わってきて、私にぜひツングロ病耐病性をやてくれと頼んできた。これは全くラッキーであった。

派遣期間の予定は2年であったので、年2作期のマレーシアでの4作期の研究計画を日本にいる時から考えてあった。しかし、日本を出発する前にマレーシアへの送付を頼んできた、ヨコバイ飼育器や穀粒粒数測定器が手元に届かず、最初の帰国までの 5 ケ月間は気持が大変焦っていた。しかし、その後の研究は順調に進めることが出来た。

MARDIでは、日本から派遣された歴代の研究者の信頼が高く、助手1人と雇用労働者4人の配置を含め、仕事の条件は大変恵まれていた。ツングロ病耐病性の研究が順調に進みだした頃、農業省の偉い人がボンボリマに立ち寄られ、「ツングロ病の大発生が穀倉地帯であるムダ灌漑地域のそばまできており、マレーシアのコメは危機に直面している。あなたの研究に大いに期待している」と握手をしながら言われたときは、背中に電流が走ったように感じ、これは頑張らなければと思った。

マレーシアでは思ったよりも研究が進み、耐病性関係では、耐虫性および耐病性の検定法の改良、耐虫・耐病性の遺伝様式の解明、虫の新バイオタイプの選出、耐病性中間母本系統の育成等を行うことが出来た。適応性関係では、シーズンにより品種の多収性の制限要因が異なり、メインでは籾容量の大きい品種、オフでは登熟能力の高い品種が多収になることを明らかにすることが出来た。これらはMARDIへの報告書に書いたが、耐病虫性の遺伝様式および新バイオタイプの選出についてはJARQに投稿した。また、1981 年にマレーシアのクアラルンプールで開かれた国際学会SABRADには金田さんの命令により日本での研究を発表した。

日本からの来客の案内は大変であった。派遣25ケ月のうち、33回の来客案内を行った。ホテル等の予約、ペナン空港への迎え、MARDIボンボリマへの案内（またはアロースターまで）、観光地ペナンの案内、空港への送り等であった。アロースターには熱研の人が4～5人おられ、交代で案内されているのがうらやましかった。

私の派遣期間中にマレーシアに長期派遣された熱研のメンバーはクアラルンプールMARDI本部の小坂・今泉、ケダ州ムダ農業開発公団の八島・執行・野崎・山崎・外山・木俣・田中、ボルネオ島サバ州の和田・藤村氏であり、いろいろお世話になった。私の後任には滝田氏が翌年の3月に派遣された。

失敗や困ったことも沢山あった。ビザの期限・更新を忘れたり、停電の修理にきた役人とけんかしたり、家の鍵を忘れて入れなくなったり、予定の客が来ず連絡も取れなくなったり、強盗に入られたり、あるいは、フィリピンでは危ないところへ連れて行かれそうになったりした。

楽しいことも沢山あった。マレーシアは3民族からなる国家で、マレー系、中国系、インド系で宗教や生活習慣が異なっており、祭り等を見るのが大変面白かった。また、樹木、魚つり、昆虫等熱帯の珍しいものが多く、見てあるくのが大変楽しかった。

私は、その後 1994 年 4 月～ 1996 年 2 月の間、国際研究情報官として国際農研に再び勤務し、主として国際農研・ベトナム間のプロジェクト研究の企画・管理を担当し、3回ベトナムを訪問した。ベトナムでもいろいろ思い出があるが、今回はマレーシアの思い出だけにとどめた。

熱研の思い出あれこれ

小林　仁
在籍：1988年5月～1990年3月　企画連絡室長
1992年8月～1993年7月　所長
現在：日植調

熱帯原産のサツマイモを研究していたこともあって熱研主催の国際集会に参加したり、海外出張のスポンサーを引き受けてもらったりしていたので、熱研には正規の職員になる前からよく出入りさせていただいた。熱研独特の家族的な雰囲気がとくに気に入って、まだ観音台に研究所があった頃にはよくテイータイムを目がけて出かけて行った。帰国したばかりの研究者から生々しい海外体験談を聞けるのが新鮮で楽しかった。その頃の懐かしい思い出も多々あるが、ここでは企連室長時代と所長在任中の思い出の中からいくつかを拾い出してみた。

研究レビュー

そろそろ霞ヶ関勤務を卒業させていただいて研究の現場に戻りたいと念じていたので熱研勤務を命じられたときには正直言って大変うれしかった。同僚からは研究部長ならいざしらず企連室長は雑用係のようなポストだからうれしそうな顔は理解できないとからかい半分に忠告された。しかし、何と言われてもそれまでに感じていた雰囲気や海外農業への興味から熱研は勤務してみたい場所の筆頭にインプットされていた。それに、3年余に及んだ一日4時間余りの通勤地獄から解放されるのも有り難たかった。熱研に赴任してみると2ヶ月後に迫った研究レビューにむけての準備が山場を迎えていた。梶原所長からは当面このレビューの成功に向けて全力投球をするように命じられ、来る日も来る日も資料作りに研究部長、研究情報官、企画科長等の諸氏とともに没頭した。作業自体はかなりハードであったが、すでに所長の強力なリーダーシップの下で強力なタスクフォースが編成されており、きついというよりも充実感の方がはるかに大きかった。短期間のうちに熱研の歴史、実績、位置づけ、展望などを調べたり、議論したりするのに絶好の機会になり、このレビューを通じてすっかり熱研マン精神がたたきこまれた。研究レビューの準備と並行して、仲谷研究企画科長をはじめとする献身的な熱研マン/ウーマン諸氏に支えられて情熱を注いだ調査情報部や基盤技術研究部の施設拡充や環境資源利用部の新設にまつわる思い出も多い。情報発信の充実にとくに力を注がれた金田所長、海外研究の拡張に東奔西走された都留所長に仕え、多忙ではあったが実に気持ちのいい日々を過ごさせていただいた。

顔写真

熱研は水研以外の国研の研究者が集合し離散していくいわば中心的なところなので名称に「センター」が付くのだとよく言われていた。当否は別として、たしかに海外勤務が終わってしばらくすると出身の場所に帰る研究員がかなりいたし、すぐに戻れるようにとはじめから併任の研究者もいた。一時帰国の折に挨拶を交わしても、海外に出かけたり出身場所に転勤されると再び顔を合わせる機会がほとんどなくなってしまう。また、沖縄支所の人たちにも同じ熱研の職員でありながら知らない顔が多かった。このようなことから、できれば名前と顔を一致させたいし、所員としての一体感の向上にも寄与できるようなアイデアがないものかと思っていた。ある日、数年前に中南米を出張した折に見かけた研究所の玄関脇に掲示されていた全職員の顔写真のことを思い出し、熱研でもぜひ試みたいと提案してみた。さいわい、この思いつきは企画科長の肝いりでさっそく実行することになった。ただでさえ多忙な科長がカメラマンをかって出てくれたりしてなんとか写真の掲示板が完成した。人気のあった（？）写真が消えていたり、逆に気に入らないので取り替えてほしいといったクレームがついて一応の形に落ち着くまでに紆余曲折のあったことを懐かしく思い出す。あれから10年以上経過するが、このアイデアは新研究所にも受け継がれているのはうれしい限りである。

バートマンさん

熱研では毎日数回顔を合わせ、いろいろお世

話になった個性派のバートマンさんにまつわる思い出は山ほどある。ご存じのように服装や食べ物から週末の過ごし方に至るまで女史のライフスタイルは極めてユニークかつパターン化している。日本食やプレペイドカードの類が大嫌いなのもよく知られており、容赦のない人物評価や日本文化批判も相当辛辣なものであった。とき折、私にも鉾先が向けられて「とにかく白黒をはっきりと！ 言い訳はノー!! 仕方がないなんて言葉も2度と聞きたくない…」と言った具合で強力なパンチを再三喰わされた。こちらとしては英語でわめき散らされてばかりなのも癪なので、たまにはやり返さなければと張り切りすぎてタイミングを失してしまい、涙ポロポロの女史を前に進退窮まったこともままあった。私が察するに、女史の日本と日本人嫌厭は相当なものであるが、心とは裏腹にあれほど罵詈雑言を浴びせる人もまれである。各種の英語文案や国際集会のプロシーディング作りあるいは英文校正など、どの仕事に対しても完璧を期す姿勢にはいつも敬服していたし正直いって大いに助けられたのは事実である。バートマンさんはあれほど記憶力がいいのに日本語会話はからきしダメで、「かもしれない、わたくし…」などと言い始めてもすぐに英語になってまくしたてるのであった。忘年会にみんなでアンコウ鍋を食べにいくことになり彼女を誘ったことがある。「あんなまずいものなんて…」と拒絶の即答が返ってきた。実は、アンパンのあんこと取り違えていたのであるが、返す刀で伝統食材の悪口がタラタラと続いたのは言うまでもない。

熱研ソング

椰子の樹をモデイフアイした熱研マークは今でも瞼に焼き付いている。それとともにこれを合唱しなければパーテイがお開きにならなかった熱研ソング「椰子の実」も忘れ難い。センチメンタルな歌詞と懐かしいメロデイの響きが海外で奮闘する熱研マンの姿と重なり、みんなで肩を組み合って蛮声をはりあげたことがいまも鮮明によみがえってくる。「椰子の実」の唱歌とともに思い出すのは「昴（すばる）」である。この歌も海外赴任者の心情に一脈通じるところがあって、かなり難しい曲ではあるがのめば必ず誰かが熱唱した。どちらの歌にも私は熱研の庁舎内でしか接するチャンスはなかったが、故国を遠く離れた異国で聞いたり歌ったりしたらもっともっと深い感動を覚えたに相違ない熱研ソングであった。

JICA プロジェクトの支援

昭和30年代には10件に満たなかったJICAの農業研究プロジェクト数はその後のODA予算の拡大に伴って急増し、私が熱研に赴任した頃には60課題を越えるようになっていた。プロジェクトの専門家だけでなく個別派遣の研究者数も激増していた。プロジェクトの課題化や専門家の人選などの支援活動は、当初、熱研はじめ場所の研究部長に属人的にお願いしていた経緯がある。しかし、このような支援体制はもはやパンク状態に陥っており、場所の窓口であった熱研企連室長のところには内外からいろいろな依頼やクレームが来ていた。専門家派遣については絶対数の急増に加えて、年々深刻になる場所の定員削減のあおりもまともに受けて、先方が希望するような若手研究員の派遣などはもはや絶望的になっていた。専門家の派遣については法律も整備されており、案件は個別に技会と協議するこになっていたが打率の低い調整作業に費やす時間とエネルギーは相当なものになっていた。JICA の職員でもないのに…と再三嘆きながら、構造的な問題解決の突破口を求めてむなしい努力を重ねたことも今は懐かしい。この問題はその後各場所も巻き込んで組織的に対応することになった。国内支援委員会のフレームはできたがその運営は必ずしも軌道に乗るところまではいかなかった。

JICA の専門家派遣の下準備を一つとってみても、国際貢献にかかわる内外の激変ぶりと難しさを肌で感じさせられた思い出である。

新研究所誕生にむけて

北海道農試で大幅な定員削減や移転を伴う気の重い新体勢作りの業務に明け暮れしていたある日、今度は逆転して定員がかなり増えそうな熱研へ転勤することとになった。気ままなサッチョン生活にもそれなりの未練はあったが、古巣へ戻る気安さとともに数年ぶりに味わう自宅通勤の安堵感も加わってとても有り難いように感じられた。しかし、札幌で過ごした2年半の間に起きた冷戦の終焉や東西障壁の解消は熱研にも重大な影響を与えていた。赴任したときにはすでに水産部門も加えた新研究所への移行がほぼ固まっており数年前の熱研の空気とは一変していた。心理的には明るかった

ものの一息つく間もなくいきなり激流に投げ込まれた心境であった。当時の技会松本会長からは所長は命をかける位の覚悟で先頭に立って頑張るようにとハッパをかけられ、調子に乗りすぎて新研究所設立に向けた予算や人事関係で物議をかもした場面もあった。技会、関係場所関係者の適切な指導・支援や熱研職員の献身的な協力のおかげで設立準備は着々と進められていった。そして、新研究所の本館用地が確保され、建物のイメージもようやく描けるようになった頃、急遽うしろ髪ひかれる想いで熱研を去ることになった。あっと言う間の短い一年であったが、この間に熱研の海外拠点の一つであるタイの熱研オフイスを訪ねたり、ＣＧ会合でワシントンやプエルトリコにも出張する機会を得た。また、所長在任中に海外の研究者を沖縄支所に招く海外招へい共同研究もスタートして石垣島へも数回出張した。二度目の熱研はあわただしい日々ではあったが、文字通り先行きの明るいやり甲斐のあるセンターであった。

パーンの思い出

小林正弘
在籍：1972年12月～1978年2月
元中国農業試験場

タイにおける研究は、稲の害虫イネノシントメタマバエの発生生態を解明するとともに主要寄生蜂の天敵としての役割を評価することでした。研究の拠点は、この害虫の常発地帯であるタイ北部チェンライ県のパーン稲作試験場としました。ここはバンコクから北へ800kmのところにあります。試験場が提供してくれた場内水田では、この害虫も天敵もよく発生したので研究材料を得るには最適の環境にあったといえます。住まいはジャムノン場長の好意により、場内の宿舎を利用できました。ここで、親子４人で過ごしました。

ここでは、研究上も生活する上でも不便なことも多かったように思います。当時この地域では停電が多く、当初は顕微鏡を使用中に停電すると、電気が来るまで待たねばならないという状態になりましたが、携帯用発電機を導入してからは、この問題はいくらか改善されました。といっても、夜はローソクの生活になるし、冷蔵庫も使えないということになりました。ここで生活する上で最も困ったのは飲料水でした。雨季は家の外側に設置した大きなブリキ製の水槽に雨どいを通してためた雨水を飲料水としましたが、乾季の半年は雨水の補給がないので、濁った井戸水を濾過器で濾過し、さらに煮沸して使いました。毎日の食事用食材は、パーンの町の市場でほとんど間に合いましたが、牛肉は売ってなく、魚は淡水産のものしか手に入らなかったので、週末にはパーンから北へ45kmのところにあるチェンライの町の市場に出かけました。この市場では時折マナガツオなど海の魚を売っていることがあり、その夜のごちそうになりました。

３歳から６歳ぐらいをここで過ごした長男は場内に住む職員の子供達とよく遊び、あっという間にタイ語が上手になりました。ある日、親子3人で試験用の素焼きのポットを注文していた農家に立ち寄ったとき、子供のタイ語の実力が発揮されました。まず、私と家内がポット作成者に話しかけましたが、その人はその地域の方言を使っているらしく、何を言ってるか全く理解できませんでした。そこで試しに子供に話させて見ましたところ、その人の言葉を理解し、みごとに通訳の役割を演じてくれたのです。北タイでは、公私ともに多くの人たちにお世話になりました。0.5歳から４歳をここで過ごした次男は、我が家の掃除、洗濯をしてくれた女性とその娘さんらに可愛がられ、おむつなしで、お尻は水で洗うなどタイ式育児法で育てられました。

当時チェンライは、水牛がのんびりと草をはむ田舎でしたが、今では新空港も整備され、ゴールデントライアングルで有名な、ミャンマーと国境を接するメーサイを中心に、一大観光スポットになっているようです。

ボンボンリマ、フェリー、ペナンヒル、・・・・

斎藤 滋
在籍：1978年8月～1980年7月 研究第1部

78年11月最後の日曜の夕方、クアラルンプールに着いた私をMARDIの小坂さんが迎えてくれた。その夜彼からもらってホテルで初めて食べたスターフルーツの甘酸っぱい味を今も忘れない。それから数日、多忙な中をMARDIや大使館、市内の案内所で私がマレーシアの空気に馴染むまで面倒を見てくれた。

12月1日夕方にペナン空港に着くと今度はアロースターの山下さんが待っていた。翌朝フェリーで対岸に渡り、私の派遣先ボンボンリマのMARDIに連れていってくれた。その後3日にわたり領事館、銀行、イミグレーション、車の名義変更を行う所、物品の購入先等を回りながらペナンの道路を教えてくれた。

3日目の午後は私に車が渡され路上訓練を受けた。次の週に熱研の客を迎える予定の私も真剣だったが、西も東も分からぬ私が何とか街を走れるまで特訓してくれた山下さんの苦労も大変だったと思う。両氏には本当にお世話になった。

着任後暫くバタワースのホテルに滞在したが上の階がディスコで睡眠不足になり、年明け早々にブキメタジャムのレストハウスに移った。そこは静かだったが設備が古く、断水したシャワーが何日経っても出ないので困り果てた。結局2カ月で元のホテルに戻り、その後家族を迎えるためペナンに家を借りた。

ペナンからフェリーを使い車でボンボンリマに通うのに片道1時間余りかかった。ところがケダー州が休日となる金曜日の夕方は毎週フェリーに長い行列ができ、暑い中で1～2時間待たされた。始めのうちはジッと我慢して待ったが、途中でペナンから相乗りでMARDIに通うグループに加えてもらい、当番の日以外は楽になった。80年代に橋が出来てすっかり様子が変わったそうだが、毎日朝晩フェリーの上でぼんやり過ごした時間も今思えば非常に懐かしい。

MARDIでは多くの人と付き合ったが、直接仕事を手伝ってくれたハシム氏とペナンに住むアドナン氏には特に助けられた。育種家のチェン氏とはよく行き来し、現地試験にも度々誘ってもらい大変楽しかった。80年夏に帰国し、その後従事した超多収育種ではMARDIでのインディカの経験が役立った。

ペナンには来客が多く、お決まりの所を案内するのが普通だったが、時間があれば標高800米のペナンヒルに登った。ケーブルカーから食虫植物ウツボカズラの自生が見られ、頂上は眺めがよい上に涼しくて生き返る思いがした。庭園に咲く珍しいヒスイカズラやバラ・百日草等温帯の花を見に家族でもよく行った。

ボンボンリマ派遣は2年足らずだったが周囲の人達のおかげで楽しく過ごせたため、ペナンの体験全てが懐かしい。いつの日か必ず家内と共に訪ねてみたい。

研究情報部草分け期の記憶

笹野伸治
在籍：1985年4月～1989年11月　研究技術情報官、主任研究官
元岐阜大学農学部

昭和60年当時、私が農業土木試験場から配置替えになった頃には、熱帯農業研究センターは蚕糸試験場本館の5・6階に仮住まいをしていた。設立から既に15年が経っていたにもかかわらず、当時の熱研センターは設立後間もない組織によく見られるような朗らかな熱気に満ちていた。当時の私にはこの職場のそのような若々しい緊張感が快く感じられたことを、今も鮮明に記憶している。

熱研センターに研究情報部が設置されたのは、その昭和60年度であった。その頃には、初代部長をカシラにして専門分野毎に何れ劣らず’個性豊かな’情報官達が机を並べていた。かくいう私もその中の1人であった。相当

な変わり者である自分を棚にあげて、他人様を指して'個性豊かな'とはよく云うよ！と当時のメンバーから叱られそうであるが、快い緊張感と使命感をもって初代部長・情報官達と過ごしたこの愉快な時期のことは、何故か私にとって忘れ難い思い出となっている。

発足直後のこの時期には、研究情報部や研究技術情報官の職務のありかたにはまだ多少の裁量余地があった。情報官各自がそれぞれの工夫を競わせて活発に仕事をしていた。私自身は、「担当区域である南西アジア・西アフリカ等の諸国を訪問して研究に関わる資料・情報を収集すると共に、これらの国々の研究機関や国際研究機関と熱研センターとの共同研究プロジェクト実施の可能性を模索する」という業務に加えて、研究論文誌JARQの編集担当・外部からの研究技術情報照会への窓口担当・研究論文データベース立ち上げ担当といった多様な業務に取り組んでいた。多くの国々を訪ね、多くの国々の多様な人々と親しく交流する機会に恵まれ、多忙ではあったが充実した日々であった。

以来長い年月が流れた。今では研究情報部の名称も職務内容も当時のものとは大幅に異なっている。私自身も、その後熱研センター・ムダ研究プロジェクト、農業工学研究所、国際協力事業団、大学を含めた多様な任務を経験し、多様な変身と成長を重ねた。そして、毎日眼を輝かせながらムキになって仕事に没頭し午後3時になると全員がしばらく仕事の手を休めて一つのテーブルを囲んで多彩な話題について議論を交わしたこの頃の記憶が、その後の自分を秘かに励ましてくれていたことに最近になって気がついた次第である。

今春定年退官してつくば市に戻るこの身には、この当時のことがとりわけ懐かしく思い出される。当時のメンバー全員に再会することは容易ではなかろうが、晴れた日には遠く富士山が見え今でも懐かしい知己が仕事を続けているJARQ編集室には時折訪れて見たいと願う次第である。

心系老区　情深意長

佐藤忠一
在籍：1996年4月～1999年3月　企画調整部情報資料課

わたしたちの仕事は①図書館の管理・運営②研究成果のとりまとめ、刊行③広報。この3本柱に加えて、最近は、ツールとしての電子計算機を利用した情報収集、ネットワークの管理、運営が加わりつつある。

これら業務をこなすベースとして、海外の研究拠点やプロジェクトの実施状況を一度は見てみたいものと念願していたところ、1999年3月、「研究成果の流通および広報状況調査のため」関係研究者と一緒に中国へ行く機会にめぐまれた。僥倖と言うほかない。JIRCAS北京事務所（池上彰英所長）のお世話で、中国農業科学院科学技術文献情報センターを中心に農業大学図書館、北京図書館、作物研究所員平試験地を、南では福田裕、寒川一成、國廣泰史さんらの導きをうけて、上海水産大学、中国水稲研究所（杭州）などを実地に訪ねて、手持ちのデジタルビデオで、研究現場やワークショップの様子を撮影、収録した。これらはJIRCAS紹介用ビデオ「人と自然を支えるために」の改訂に備えての素材収録を兼ねていた。

一歩街に出ると改革開放経済に移って久しい中国では都市開発・改造のまっただ中で、あっちこっちで破壊と建設が同時にすすんでいる。時あたかも、建国50周年。祝賀会場となる天安門広場では建物の塗り直しがおこなわれていた。

仕事がら各所の図書館もみてまわった。このうち、北京図書館（中国を代表する図書館で、我が国の国立国会図書館に相当）では、入館利用手続き費10元（1元：15円）、保証金が100元入用とのこと。独立行政法人化しているのか？

今回の受け入れもと農業科学院構内では、商売ＰＲ用の看板が立ち並び、廊下には南京袋入りの種子が山積みされて、出荷を待っている。「産学」連携は中国の伝統らしい。

ここ、農業科学院では、各種の農業雑誌の出版、CD-ROM（例えば、野菜の新品種、来歴、適応地、栽培のポイント、販売種子会社入り）

を製作、販売しているほか、多彩な活動を展開している。

農村向けTV番組も制作しており、わたしが訪問したときは、ちょうど農業書の新刊紹介番組を収録中。

製作スタッフの話では、雑誌や図書は単体では、流通・普及に限りがあるので、電波の力をかりて、より広範な普及・広報を図る。河を挟んだ人をつなぐのは橋、人と情報をつなぐのは図書（第1橋）、TVを通じて、新刊紹介（第2橋）。このような情報アクセス活動をかれらは、橋を架ける「橋の橋」活動と称している。

職場のスローガン「心系老区、情深意長」（農村の想いを、わが胸に重ねて、こころを込めて、息永く仕事に励みましょう）。文字の国らしく、言いえて妙、拳拳服膺すべき銘句として、手帳に書き付けた次第である。

熱帯農研そして国際農研への胎動

清水三男

私が熱帯農業研究センターを知ったのは、昭和43年7月東京都西ケ原にあった農業技術研究所へ北海道函館営林局管内、ニセコの麓の倶知安営林署から転入し、筑波移転の話題が西ケ原界隈で盛んになった頃である。現農業総合研究所の図書室の一部を間借りして、10人足らずで沖縄県は石垣方面の農業部門を担っている程度の知識でありました。

そして、熱研トップは英語が堪能でペラペラだよとか、メモを執るのも横文字だよとか、私どもの同職である事務部門の方々が得意げに喋っていたのが妙に思い出されます。

北海道立八雲高校時代（昭和27年代）野球部員として正選手ポストを確保するため、猛練習の夏、英語が赤点のためキャプテンの佐藤と函館地区大会への出場を止められたことが頭にあり熱研だけは勤められないと思っていました。

ところが、昭和55年に、海外会計専門官の組織要求が行われ、技術会議整備課に在籍していたものですから、初代専門官はあの人が適任だとか、いやそうではないとか熱研をよく知っている先輩各位の私設人事担当官が、口角泡をとばしておりました。

昭和59年4月突然2代目海外会計専門官に中国農試庶務課長補佐から配置換され、会計課長補佐的役割もあるので、頑張って欲しいと、技会総務課管理官から指名され、為替レートとはなんぞや、ドルもペソもバーツも無知な者が、そして前述のとおり語学力では勤まるのかなと思いながら、厚かましくも着任しました。着任早々だったと思いますが、海外の研究者から国際電話が入り、その場合は海外会計専門官が受けるのですよと、どこの職場にもいる意地悪い小舅がおりました。

まもなく、バートマン先生による語学研修が始まり、約1年間に70時間ばかり勉強させられ、通勤列車の中では、高校生から、このおじさん今日も頑張っているよと囁かれ、車の中も英会話のテープをながし、日夜、英語英語の期間でした。しかし前述のごとき基礎素養ですので誠にお粗末な次第でした。しかし、受講態度、たち向かう姿勢などはバートマン先生から誉められたような気がしています。

語学研修も終わり、事務部門だけで海外出張せよといわれ技会の任用係長、熱研庶務課長補佐と私の3人でスリランカ、フィリピンに海外出張を命じられ、そのときの所長林健一氏から、今まで迷って帰ってこなかった所員は一人もおりませんよと言われ出かけました。スリランカからフィリピンに入国の際、紅茶を少々多めに持ち込んだことから、不適切物と勘違いされたのか再点検のため引き戻されたことや、フィリピンからの帰国の機上での食事のとき、私が［delicious］と言ったつもりが［dangerous］と聞こえたらしく、相当慌ただしく、「何かご不審なことが」と日本人スチュワーデスさんが来たことは今でも笑いの種にされています。

英語力は、いつも汗顔の至りの者が熱研の総務部長を拝命され、熱研の最高顧問である小倉武一氏の事務所にご挨拶に伺ったところ「えっ、熱研に総務部長を創った。」と言われ、差し出した名刺をしばし受け取っていただけなっかた時間の長かったことは、場違いの感がありました。氏から着席を促され、今の国際農林水産業研究構想の一端を聞かされました。そ

れを都留所長に報告、技会総務課長等に伝え、まもなく堀越総務課長が熱研に来所され平成5年度組織要求になり、熱研を新組織の財源にして、一気に上昇気流に乗れたことは所員一同が、鎖国的見識でなく、開けた海外知識の旺盛な方ばかりで、小さい組織からいつかは脱皮しようとしていた姿勢が、独自の城を持とうと皆が心底に持っていたからこそ、大きな混乱もなく新組織に発展したものと推察しております。

確かに農業部門への国際的協力援助は赤道を挟んで云々という時代ではなくなっていたことだろうと思いますが、偉大な先輩は熱研創設時頃から「水産業」も含めて全地球を対象としていたことと推量すれば、男のロマンの現実が国際農研として具現したものと思います。

以上

熱帯稲作の重要害虫タイワンクモヘリカメムシのこと

杉本　渥

私にとって一ばん忘れ難いのは定年退官直前の1987年と89年、各3か月間のスリランカでの短期在外研究で扱ったタイワンヘリカメムシのことです。

1985年1月から同国で水稲栽培技術に関する長期在外研究に従事された森田弘彦さんは同年12月一時帰国の際、現地で不稔といわれる、稲穂が登熟期に直立のままとなる現象は受精後の米粒の発育停止によるもので、その主原因の一つはタイワンクモヘリカメムシの吸汁害と推定されると報告されました。日本では稲穂を吸汁するカメムシ類は斑点米を生成させるが、それがひどい稔実不良をひき起こすことは全く意外な話でした。熱研ではこの問題の実態究明のため直ちに虫害研究員の短期派遣が計画され、1986年にカメムシ研究のベテラン小林尚さんが派遣されましたが、翌87年には3月に小林さんが退官されたためズブの素人の私にお鉢が回って来ました。

小林さんが実験的な研究をされたのに対して、私は農家水田でのタイワンクモヘリカメムシの生息状況と米粒の被害の調査を行いました。被害調査にあたっては籾を分解後、被害粒に貫入しているこのカメムシの口針鞘を赤く染色し、口鉢鞘の存在の有無を検べることによって、被害粒がカメムシによるものか否かを確かめました。その結果、穂が直立のままとなる程の稔実不良を、このカメムシが引き起こすことが確認されました。しかし、そういう激しい被害は成虫の加害が集中する、他の水田より早く（または遅く）出穂した小面積の水田に限られることと、被害粒率が50%程度以下の穂は垂れてよく稔ったように見え、何の被害徴候も現さないことが判りました。

文献を調べて見ると、このカメムシは熱帯アジアにおける稲作害虫として古くから重要視されていながら、米粒の被害に関する報告は少なく、特に粒の被害の症状を明確に示した報告は森田さんのそれ（カウンターパートとの共著、1990）が最初でした。IRRIの資料を見ると被害症状が長い間確認されなかったのは従来、多くの労力を要する籾を分解しての被害調査が敬遠されたためと思われます。

以上のことから、このカメムシは、米粒の被害はよほど激しい場合以外は目立たぬため、おそらくスリランカに限らず熱帯アジア各地でかなりの被害が気付かれずに見逃され、害虫であることさえ忘れられているのが実状と思われます。ですから被害実態の把握と防除法の開発が今後の課題ですが、私は熱帯アジア各地で稲作に関する研究にたずさわる方々はどなたも、このカメムシのことを気にかけて下さるよう期待します。

おわりに、私にこのカメムシの研究の機会を与えて下さった、当時の熱研上層部の方々、現地での活動をご支援下さった長期在外研究員の方々ならびに退官後に論文をJIRCAS Journalに載せて頂いた際にご指導下さった方々に心からお礼申し上げます。

中国雲南の思い出

春原嘉弘
在籍：1991年4月～1994年3月
現在：青森県農業試験場藤坂支場

9. 雲南の稲と合系品種の普及

夏の平均気温が20℃に達しない常春の町、雲南省昆明での日中共同研究に平成3年から2年半参加した。稲遺伝資源の宝庫と言われ、以前に派遣された方からの情報で大まかに理解していたつもりであったが、実際に行ってみると稲の多様性が予想以上で大変魅力を感じた。共同研究で育成した合系4号、合系24号、合系2号等が作付けを伸ばしている時期であり、品種改良による増収が雲南省に顕著な経済効果をもたらしていた。もちろん、それまでに派遣された方々による功績が大きかったわけであるが、作付けが拡大しているこの時期に参加できたことにより、育種家として大きな喜びを味わうことができた。中国側の普及にかける努力も成果を挙げた大きな要因であり、特に中国側リーダーの蒋氏の品種改良及び品種の普及にかける熱意には敬服する。

10. 雲南の美味、煙草、白酒

雲南での懇親の席に欠かせぬ物、辛味の中華料理、アルコール度の高い中国酒、煙草。当時喫煙していた私だが、煙草は中国の方とのコミュニケーションをとるのに何かと役立った。世代促進での選抜作業のために海南島へ出張した際に、蝋燭を灯して夜中まで中国側スタッフと煙草を賞品に麻雀をしたのも良い思い出となっている。雲南の美味で思い出すのは宜良のアヒルの丸焼きとキノコ料理である。雲南はキノコの宝庫でもあり、日本では見られない様々な種類が食されているが、いずれも実においしかった。雲南では松茸も採れて、ホテルの外で炭火での松茸焼きパーティーを何度か楽しんだ。日本と比べると価格が格段に安いので食べ過ぎて腹をこわしたこともあったが、今後二度とない経験であろう。しかし、中国酒と辛味の中華料理には何度となく泣かされた。

11. 雲南での生活ともうひとつの成果

一緒に長期で派遣されたメンバーは、前半が病理の藤田さんと福井農試の冨田さん、後半が上川農試の丹野さんであった。比較的行動派のメンバーで、私もつられて片言の中国語は話せる程度になり、単身赴任ではあったものの海外生活を楽しむことができた。

冨田さんが楊さんとめでたく結婚したのも日中共同研究のもうひとつの大きな成果と言えよう。正に雲南における遺伝資源の評価と利用を実践された。僅かな滞在期間のうちに中国語で恋愛できたことはすごいと思う。

雲南省昆明も国際博覧会で街並みが変わったことと思う。いつか、また雲南省を訪れてみたいと思うが、その頃はもう合系系統はほとんど作付けされていないかもしれない。一緒に仕事をしていた中国の老朋友が新しい歴史を作ってくれることを期待したい。

熱研・国際農研への熱き・厚き思い

仙北俊弘
現在：中国農業試験場

＜まえがき＞

「発足30周年、何か思い出を」という依頼状を2月中旬いただいたが、「12,000字、3月中旬〆切」。会議シーズン、機構の組織検討等々繁忙な時期、まして遅筆（単に怠け者）の小生。「これは無理、お断りしよう」と連絡したところ、「字数は1,200字の誤り、〆切も3月末」、それなら何とか対応可。そんな次第で、小生の熱研及び国際農研との関わりと思い出を書き連ねさせていただく。

＜関わり、その1・2・3＞

(1) 熱研の研究第一部に選考採用されたのが昭和56年4月1日。熱研とタイ農業局との共同研究プロジェクト「東南アジアにおける稲及び豆類のウイルス病に関する研究」に2年間参画すべく、同年11月からバンコクへ。プロ研終了

後も個別研究で3年3ケ月、タイへの5年と3ケ月の長期出張、計6年間の熱研在籍（Ⅰ期）。(2)平成3年10月から熱研沖縄支所国際共同研究科初代科長として平成8年2月まで、4年5ケ月間の在籍（平成5年国際農研に改称）（Ⅱ期）。(3)間接的ではあるが、平成8年3月から10年3月までの技術会議事務局研究開発官の任、担当場所の一つが国際農研、この間の2年と1ケ月の関わり（Ⅲ期）。

農水省歴18年のうち12年半、約2/3が熱研・国際農研との関わり。字数の制限もあり、この中のⅡ期での思い出を述べる。

＜Ⅱ期：平成3年10月～8年2月沖縄支所国際共同研究科について、We are the world＞

タイから戻り農研センター病害虫防除部主研の当時、熱研の都留所長から「沖縄支所をベースに、10名の外国人研究者と年契約で共同研究を展開する」という国際共同研究科設置の予算要求の話を聞き、「面白そうですね。しかし‥‥」と生意気な口をたたいたのが縁？で初代科長になってしまったような気がする。平成3年10月石垣に着任した時は科長1人、施設も基礎工事中。支所の一室を間借りし机と椅子、電話一台とできぶつのパートさん一人とのスタート。完成予想図をみながら居室や実験室の玉ごめ。厳しい状況ではあったがやりがいは充分。翌年7月に共同研究棟落成記念式典。技術会議から当時の斉藤会長、貝沼事務局長、三輪首席研究管理官、藤田国研課長、池田整備課長はじめ多くの方々の出席を賜り、一つの科のオープニングセレモニーとしては前代未聞の盛大な会。3年がかりで共同研究棟、温室、作業棟等完成、科員も6名体制をなんとか確保。150名近くの応募者の中から選ばれた外国人研究者10名との共同研究は初めて。日常生活のサポートも試行錯誤の連続。家族同伴者もおり、実に賑やかな毎日。不平不満、苦情相談は日常茶飯事、24時間勤務体制といっても過言ではなかった。小生在任中、35名の外国人研究者との仲間づくりができ（4年間延べ40名、うち延長者が5名）、今でも新年のカードのやりとりをしている。皆さんそれぞれの国で中堅研究者、研究管理者として活躍している。宗教も国籍も異なり、（中国、タイ、フィリピン、マレーシア、ベトナム、インドネシア、インド、バングラデシュ、ナイジェリア、ガーナ、ブルキナ・ファソ、エジプト、ブラジルと13ケ国）、女性研究者も7名。4人のパートさんも含め20名の科が一体感をもって何とかやってこれた。これも地元石垣市の市長はじめ皆さんの暖かい励まし、御支援の賜物。共同研究者の帰国の際は小生も成田まで同行、一人一人と言葉を交わし握手し時に涙も流して見送った。（そのうち彼らとの様々な触れ合いを回顧録にと思っている。それぐらい色々なことがあった）。heart to heart, まさに「We are the world」の世界。JIRCAS親派が毎年10名づつ各国に増えていく、このネットワークはJIRCASにとって極めて貴重な財産（これまでの共同研究者に対するフォローアップがどうなっているか気になるところである）。4年5ケ月、国際共同研究科の立ちあげ期、私自身、実に素晴らしい体験をさせていただいた。

＜あとがき＞

九州農試畑地利用部に着任し早や2年。JIRCASとの接点も段々少なくなり、2001年4月からは別法人。ますます関わりが希薄になる感ゆがめないが、今後のJIRCASの新たな展開に心からエールを送りたい。熱研への、国際農研への熱き・厚き思いをこめて・‥‥。

NHKのど自慢のことなど

高田寛之
在籍：1974年4月～1985年3月　沖縄支所　研究第1部

今ふり返ってみると、熱研の職員として駐在、併任の期間を含めると北農試草地開発第二部に9ヶ月、沖縄支所に5年6ヶ月、本所研究第一部に4年、農事試畑作研究センターに2年いたことになるが、その中でも沖縄支所がなつかしい。

環境庁の同僚にあきれられたこと

わたしは新卒としてはじめて沖縄支所に赴任した。新卒としてははじめてであり、その後もないという。環境庁の同僚にいわせると「農水もキビシイ人事をするなあ。我々の所では新卒をいきなり石垣や小笠原にはやらんぞ。」と

いうことである。そんなもんかなあと思いつつ、小笠原なんかよりはるかに都会だと思い赴任したのだが、道産子の私にとっては見るもの聞くものがすべてが驚きだった。もっとも最初の年の暑さにはいささかマイッタが。

NHKのど自慢のこと

あれは1年目の12月だったと思う。アパートの3階で1日遅れのNHKをみていたところ、2月に宮古島でNHKのど自慢が行われるとの事。早速歌手前津有邦、曲名はいさいおじさんと書いてNHKに葉書を出した。有ちゃんには知らせず、事後承諾であった。それまで何回か宴席があったので歌手と曲名はあっさり決まった。それからカンパを募り、有ちゃんと北陸農試から来ていた業務科の田中東一氏と私が宮古島へ行った。結果は熱涙賞。賞品の楯は今も沖縄支所の業務科にあるという。ちなみにゲスト歌手はにしきのあきらと南沙織であった。

亜熱帯・温帯・亜寒帯

今からかぞえてみると、石垣という亜熱帯で5年半、筑波という温帯で6年。札幌という亜寒帯で15年いたことになる。このように広く歩けたことは本当に幸運だったと今では感謝している。若手の人に言いたいのだが、若いうちに広く歩いた方が勝ちだと思う。特に、バイテクはともかく、フィールドで試験研究をしようと志す人には石垣で3、4年住むことをおすすめしたい。体力、精神力のある人にとって石垣は天国である。

サービスセンターとして

今考えてみると甚だ生意気であったが、私は筑波でのお別れ会で故岡彦一博士の「高田君、熱研はとてもサービスの良い所だと所長、部長に云っておいて下さい。」という言をひき、熱研のサービスセンターとしての役割を強調した。時あたかも来年には北農試は「農業技術研究機構北海道農業研究センター」になるという。北農試も熱研のシステムを大いに見習って、サービスセンターとしての機能を充実してゆきたいものだと思う。

おわりに

最後に小生、沖縄で事故に会い、1年半休職したが、その時多くの人にお世話になった。この稿を借りて感謝申し上げる。すっかり元気になりました。

テラ・インコグニタ

高橋達児

89年8月に熱研第1部を最後に36年余の農水技官生活を終了した。この年は騒乱の年で6月に天安門事件、退職後赴任したマニラではベルリンの壁崩壊を聞いた。6年余の熱研在職中は庁舎移転、情報部新設、研究部の改組拡充と決して平穏な時代ではなかった。残念ながら、かつ申し訳ないことながら研究のすべてに専門的に関われたわけではない。しかし拝見・拝聴して、いくつかの仕事は世界的にも第1級と確信した。小生のみならず多くの人の長年の疑問を氷解した仕事があり、永遠の問題かと言われていたことに結着をつけた研究もあった。また従来のペシミスティックな考え方を否定する仕事もあった。周辺でこれ程の成果が連続したのは初めてだった。自分で仕事ができる立場ではなかったが、いちばん良い観覧席にいたわけで、失敗や考え違いを克服、成功に至る経過を見たことは楽しく、今でも懐かしい。研究は時に、まことにドラマティックだと思った。

他方で、仕事が思うようにいかなかった人もいた。そう言って離任した人も一・二に止まらない。謙遜の行き過ぎかとも思えたが、そういう方には「一生よい仕事を続けるなど不可能。いちばん有能な人でも半分はつまらぬ仕事をしている。僕などもっとです。ただその在外経験が将来役に立てば」と申し上げた。これは本当の気持で今も変わらない。

しかしそれにしても熱研在外の成功率は高かった。それは多分、研究的には熱帯が我々にとって未だにテラ・インコグニタ、未知の大地であるためであろう。研究・生活条件からして仕事はエクステンシブになりやすいが、研究人生のある時期に、環境の異なる熱帯の仕事が入ることには意味があると思う。その後を知る人には、明らかにそのエクシテンシヴな経験が、国内でのインテンシヴな仕事に生きたと思える例がある。由来、日本での評価は、インテンシヴな国内研究に片寄りすぎと思うが、それで

もこれらの在外研究は国内で学会賞を得たり、国際学会で評価されたり、欧米の教科書的な本に大きく引用されたりした。当時の小生の評価は正しかったはずである。

離任以降の10年間、熱研はさらに変わったようである。独立行政法人化を含め、変動はまだ続くのであろう。しかし研究の主体は変動する外枠にはなく、内側の個人にある。今の人達、それから将来の人達も、かつてのやはり大変だった変動期によい仕事をされた人達がいたことを思い起こして頑張られるようにと願っています。結局、残るのは研究業績、そして将来を開くのは、十分条件ではないにしても必須条件としての新しい知見なのだから。正確な知見なくしていわゆる技術援助など上手く行くはずはないし、その知見はまだまだ足りないのだから。

アドバルーンは揚がったが

高畑　滋

1990-1992年に「乾燥草地の資源変動と保全技術」いうテーマで、シリアにある国際乾燥地農業研究センター（ICARDA）に赴任しました。砂漠化防止に妙案があるわけでもなく、前から手掛けていたリモートセンシングと地理情報システム（GIS）によって、砂漠化が心配される所で過放牧にならないように牧野計画を立てることが基本であるという研究方針を作りました。

当時シリアでのリモートセンシング技術の利用状況は全くわからず、国際写真測量学会の出席者名簿からシリアのアドレスを見つけて連絡してみましたが返事はありませんでした。後で聞いたら軍の機密関係の人だと云うことでした。

ICARDAは国際研究機関なので自由な雰囲気があり、「リモートセンシングはこれからの研究にとって重要なので大いに期待している」と励まされましたが、データなし、解析システムなしの状況では何から手を着けたらよいかわかりませんでした。

ダマスカス郊外ベイルート街道17kmkmの所にリモートセンシング公社があって、24万m^2の敷地に巨大な建物が建っていました。しかし、設備は不十分でデータもKATE-200という旧ソ連時代の衛星データを使っていました。アメリカのランドサットやフランスのスポットに比べて遜色無く、広い範囲を高い解像度で60% オーバーラップで撮っているので利用価値が高いものでした。しかし、そのデータも入って来なくなっていました。

広大な牧野の植生解析には航空機のリモートセンシングデータが有効ですが、イスラエルとの軍事的な緊張関係にあるシリアで空中写真はもちろん地形図も自由に入手することは出来ませんでした。ユーフラテス川をせき止めたアサドダムでダムサイトの写真を撮ったのを見とがめられ警察に通報されて尋問された苦い経験もあります。気球を使って自分で空中写真を撮るしかないと思い、日本から装置一式を取り寄せましたが、無線発信機だけは許可されませんでした。いろいろな書類を提出して最終的に認められたのは、撮影する時だけ係官立ち会いの上で使用させるというものでした。研究室で予備的にテストするから事前に使わせてほしいと云う申し出も却下されました。その結果気球にガスを詰めてカメラを装着した状態で待っている所に、軍隊に付き添われた係官が発信機を持ってあらわれるということになりました。こんな大騒動になったものですから、研究所の職員だけでなく近所の人達まで野次馬が集まりました。まさにアドバルーンです。宣伝効果は抜群でお祭り騒ぎのような雰囲気の中で試験地の気球写真を撮りました。気球の横腹に大きくICARDAと描いてありますから、イスラエルのスパイ行為でないことは明らかです。空中写真は植生調査のような平和目的で使うものだと云うことを身を以て示したことになります。ICARDAでは撮影した気球写真を掲示板に張り出したり、その年の研究所年報の表紙にICARDAの名前入りの気球が浮いている写真を使ったりして成功を喜んでくれました。それにしても軍の勢力の強いことに驚きましたが、「平和目的の空中写真にまで軍が干渉するのは困ったものだ」と嘆く私に、シリア人スタッフは「あなたはこの国がどんな軍事

的危機にさらされてきたのかご存じ無いから、軍のとった処置に不満があるのでしょうが、私たちにはスパイ行為につながるようなことを許さない軍の態度は十分理解できます」と諭されました。その国が置かれている状況をわきまえず軍の悪口を云ったことを恥じましたが、遠慮会釈無く軍の悪口を言える日本の状況を喜ぶべきなのか複雑な感想を持ちました。私の任期中に湾岸戦争が起こりました。クエートに侵入したイラクに多国籍軍が交戦しましたが、イラクからスカッドミサイルがイスラエルにむけて飛んでいくのがシリアで見えたそうです。気球が浮かんだ青い空にミサイルが飛び交うなんてー、やっぱり牧野の植生調査はのんびり平和な空に似合うもの、シリアには少し早すぎたのかなと思いました。

タイ・マフィアの一員だった頃

高屋　茂雄

「熱研勤務」の経歴を密かに誇りとしながら田舎で暮らす初老の男にとって、本誌の貴重なスペースを与えていただいたことはたいへんうれしく厚くお礼を申し上げます。私が熱研勤務を仰せつかったのは42歳になったばかりの時、派遣先はタイでした。タイ・マフィアとバートマン女史のネーミングです。この言葉が当時熱研中で通用したのかどうかは私にはわかりません。時にタイ語の片言など交えながら私たちが談笑しているのを見ると、女史は決まって「オータイ・マフィア」とつぶやき、顔をしかめるのでした。ついつい話に身が入ってしまい声高になることはあっても、女史の仕事の邪魔になるようなことをした覚えはないのですが、なぜか女史の気に障る様子でした。タイ・マフィアの中には、彼女のお気に入りだっていっぱいいるのです。タイの関係者がタイの話をしている時だけ、マフィアになるもののようでした。

さてそのタイでの研究生活ですが、幸いなことに当初抱いていた数々の不安は数ヶ月で吹っ飛びました。タイは当時の熱研の最大の海外拠点であり、この国に関しては活動は完全に軌道に乗っていました。先人が苦労して切り開かれた軌道の上を進めば良いわけで、「タイで勤まらなければどこもだめ」と言われていたのもむべなるかなと肯定せざるをえません。

もちろん、私には初めての外国でした。特に赴任当初の半年間は、公私共に見るもの聞くものの全てが珍しく、毎日が驚異の連続でした。私にも「なんでもみてやろう」の精神があったようです。小田実氏には20年ほど遅れてはいますが。そして、やはり「眼からウロコが落ちた」ように思います。手短に言えば、それまで40年余にわたり日本で培ってきて疑問にも思わなかった「ものの見方、考え方、身の処し方」といったことがここでは必ずしも当てはまるとは限らない、われわれが固定観念としてもっているものは、多様なもののなかの一部に過ぎぬということでした。「ところ変われば品な変わる」だけでなく人々の生き様も多いに変わることを、理屈ではなく体験として肌身で感じたことは説得力がありました。以後、私は国際派に変身しました。その後国内勤務についても、時に若い人達には海外勤務の経験をするように勧めました。

筑波に帰っても、タイは最大派閥、ついつい仲間うちの話にうちとけてしまい、バートマン女史だけでなく、はるかに遠い国で、一人で苦労されていたような方には目障り、耳障りなこともあったことでしょう。ここに深くお詫び申しあげます。

熱研・国際農研の思い出

都留信也
在籍：1989年10月～1992年8月　所長
現在：日本大学生物資源科学部総合研究所教授（国際地域研究所）
横浜国立大学環境科学研究センター客員教授

昭和45年、熱帯・亜熱帯地域における農林業技術開発の中核的組織として、「熱帯農業研究センター」が設立された。

まず熱研との出会いについて述べる。昭和52年、当時私は農業技術研究所（当時の呼称）において土壌微生物研究室長を拝命、国内各地における地力維持に関する微生物特性を調査する研究に従事していた。詳細な経緯はよく知らされなかったが、突然のように中央アメリカはコスタリカ・トリアルバなるところに所在するCATIEはじめ、その他ニカラグア、ホンジュラス、グアテマラに散在するCATIEの調査研究機関についての調査出張を命ぜられたのであった。同行者は近藤熙研究官であったと記憶している。

1970年代後半は、中央アメリカの各国では軍事政権樹立（グアテマラ）、隣国との国境紛争（ホンジュラス対エルサルバドル）、国内紛争（ニカラグア）など騒然とした状況にあったのである。CATIEのキャンパスは国際研究機関として第二次世界大戦中に発足し、着々と実績を挙げてきたところとして知られており、とくに世界中のコーヒー各種品種をin situで生物遺伝資源を集中保有していたことが思い出されるのである。現在、コスタリカのCATIEを中心として国連大学の林学研究センター、ひいては国全体が環境保全の国際研究センターともなっているということである。当時のコスタリカをとりまく諸般の情勢にもとづき、残念ではあったがCATIEとTARCとのMOUは実を結ぶことはなかったことを、ときどき思い出すのである。

その後、年月が経過して、思いがけずに熱研の所長を拝命することとなった。丁度、熱研創立20周年の1年前のことであった。職員定数も設立時よりみれば倍増していたのではなかろうか。研究部門の整備も重要であったかと思うが、さしあたって熱研の事務部門の強化を念願し、いろいろの人々の知恵をいただいて総務部の確立及び沖縄・石垣支所の拡充を実現させていただいたのであった。農林水産技術会議の沖縄現地視察会議はじめ沖縄本土復帰20周年記念事業、さらに熱研沖縄支所、国際研究科併設及び外国人研究者招聘など思い出はつきないものがある。ここで、改めて当時の関係各位のご指導、ご配慮並びにご協力に対して感謝の意を捧げたい。

最後になるが、大わしの研究所へ、タイ王国シリントーン王女が来所され、親しく日本とタイ王国の農林業研究協力に両国の研究者、技術者が共同して事に対処し、歴史的に評価される実績を挙げたことについて、お言葉を賜ったことは、熱研に勤務させていただいた者として、忘れられない思い出として残っている。JAPAN, IRRI, DAY（東京）にて同王女に再会、熱研訪問も話題となったのである。

未知との出会い－熱研での13年

樋田幸夫
在籍：1983年12月～1997年3月　研究第1部、基盤技術研究部、生産利用部

1983年12月、蚕糸試験場（現蚕昆研）の機構縮小に伴い、200名ほどの職員が配転させられ、そのうち10名が熱帯農業研究センター（TARC、現JIRCAS）へ配転してきた。ほとんどが蚕試当局に強く説得されて、あまり気乗りしないまま移ってきたのであった。私もその一人で、新しい職場の業務内容や人間関係がよくわからず、不安感を拭いきれなかった。熱研へ移る直前、私たちは当時の林健一企連室長、昆野昭晨研1部長、高橋達児研2部長のお三方から面接を受けた。私たちの熱研での仕事や所属を判断するためのものであった。当時の所長は

中川昭一郎さんであったが、配転者の受け入れに当たっては熱研としても苦慮と戸惑いがあったと思う。そんな事情から、私はいわば「招かれざる客」の心境で、恐る恐る熱研に入ってきた。当時の熱研は規模も小さく、研究者が海外に出るまでの待機の様はまさに「置屋」的とも見えた。また、全農林筑波地本傘下で唯一分会組織がなく、地本直轄班として、有田裕さんたちが頑張っていた。

1984年、私はタイへ1か月短期出張することになった。これが初めての海外であった。タイ農業局滞在中、すでにここのウイルス病研究室におられた仙北俊弘さん（現九州農試）になにからなにまでお世話になった。他にTARC代表の仲谷紀男さん（現農研センター）、岡三徳さん、椛木信幸さん、上原洋二さん（現野菜試）他そうそうたるメンバーがおられて、バンコクでの生活について親切にご教示いただいた。その2年後、タイ農業局線虫研究室で4年間共同研究を行うことになったが、決断させたのは、最初の短期出張での「若い先輩たち」の優しい心遣いであった。タイでは、良いカウンターパート（Mr. Somkuan と Ms. Nuchanart）に恵まれ、気持ちよく仕事が出来た。「野良的な」犬たちとも仲良しになった。長期在外研究が終わった後も、タイへ短期出張の機会が数回与えられ、その都度何らかの発見があってうれしかった。

インドネシア、スリランカへも短期出張させて頂いたが、特にスリランカの中央農研（CARI、現園芸作物調査開発研 HORDI）では卓抜したカウンターパート（Dr. Ekanayake）のお陰で、3回の出張で得た成果を学会誌などに発表することができた。この国ではキャンディーの古色蒼然としたクイーンズホテルと、高地ヌワラエリヤの茶畑が特に印象に残っている。マレイシアにちょっとお寄りした時、骨折で松葉杖姿だった諸岡慶昇さん（現東北農試）にして頂いたご親切も忘れられない。

私は当初、あまり気乗りのしないまま当時の熱研に移ってきたが、ここでの13年間は多くの知己を得ることができたし、さまざまの新しい体験をする機会をもつことができた。充実した「こく」のある時間を生きたと思う。今では「思いやりがあり、かつ恬淡とした」雰囲気の職場、熱研へくることができて、たいへんラッキーだったと思っている。

熱研についての印象的な思い出

中川昭一郎
在籍：第5代所長
現在：山崎農業研究所　代表

熱研／国際農研が創立30周年を迎えたとのこと、その歴史の一時に在籍した者の一人として、まず心からの祝意を表したいと思います。

私が初めて熱研との係わりを持ち、また最初の海外経験となったのが、マレーシアのムダ地区でした。昭和43年3月の1ヶ月間、熱研設立の事前調査として、熱帯水稲二期作のための灌漑水管理の研究をするとともに、農業土木関係の長期在外研究員の派遣の可能性を探るのが目的でした。これが、それまで海外研究に余り関心の無かった私にとって、国際農業研究に係わる最初のきっかけとなり、またその調査研究が、熱研設立後20年余にわたり続けられた熱帯水稲二期作研究プロジェクトに繋がったことは、今にして思えば大変懐かしくかつ嬉しい思い出となっています。そしてその後、一度海外経験をしたということで（当時は経験者が少なかった）、熱研のほかOTCA、JICAなどの仕事でもインドネシア、タイなどに度々出かけることになり、いつの間にか当時云われていた海外族の一員に加えて戴けるようになってしまった訳です。

そんな背景もあってか、私は熱帯農業研究センターの第5代目の所長を務めることとなり、創立から11年目に当たる昭和56年12月から60年3月までの3年4ヶ月間その任に当たりました。この間の思い出の中からとくに印象に残っているいくつかを列記してみると次のようなことが挙げられます。

その一つは、私の在任中に熱研の総定員数は初めて100名を越えたことです。昭和45年に発足以来、農業関係研究機関の中で最小規模で

あった熱研にとって、組織定員の拡大によるより活発な海外研究展開は、歴代の所長始め関係者の悲願ともいえるものでした。国際協力重視の背景の下に昭和57年度の予算で100名を越えることが決まった時、初代所長の山田登先生に大変喜んで頂けたことを今でも忘れることができません。そして現在160余名に成長された国際農研にまさに今昔の感を禁じ得ないところです。

第二は、昭和58年にあの円形温室に象徴されていた7号団地の熱研が、筑波場所の機構改革に伴って、急遽6号団地蚕試地区に移転することになったことです。熱研にとっては降って湧いたような話であり、その対処に当たっては厳しい議論と苦汁に満ちた決断が必要でしたが、所員各位の大所高所に立った理解と協力を得て、何とかその実現に漕ぎ着けることができました。このことは現在の国際農研拡大整備の基礎を造った大きな出来事として、いつまでも記憶に留めておきたいことの一つです。

そして第三には、所長在任中に在外研究員の所在する多くの国や研究機関を訪問することができたことです。丁度昭和57～59年頃は、熱研創立後に結ばれた各国機関との研究協力協定が書き替えの時期に当たっていたことや、乾燥地農業研究など新たな課題・地域への研究員派遣の条件整備が必要になっていたことが背景にあり、それまで長期在外研究員を送っていたタイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ケニア、コロンビア、ブラジル、パラグアイの他、ブルネイ、インド、エジプト、オランダなどをも訪問し、熱研方式による研究員の派遣と共同研究の優れた点を確認するとともに、多くの知見や知己を知ることができました。ヤシの木陰で研究員諸氏と酌み交わした酒の味は、今でも忘れ得ぬ思い出となっております。

まだまだ、書き残したいことは沢山ありますが、この程度に留め、創立30周年に当たっての思い出の記とさせて頂きます。独立行政法人化という大きな節目を前にして、国際農林水産業研究センターのますますのご発展を祈念いたします。

熱研沖縄支所の思いで

中川　仁
在籍：1988年4月～1991年3月　沖縄支所作物導入じゅん化研究室
現在：草地試験場育種部育種資源研究室室長

私は石垣島にある沖縄支所の作物導入じゅん化研究室で丸4年間、熱帯牧草の導入と育種の研究をしました。亡くなった北村征生氏から是非自分の後に来てほしいと誘われていましたが、諸般の事情で北村氏の転勤1年後に後を継ぎました。北村氏が残してくれた畑と労務は十分過ぎるほどあり、おかげで思う存分研究に打ち込めました。

桃木徳博室長からハブが出ることがあるので気をつけるようにと脅かされながら、熱帯果樹遺伝資源圃場でグアバ、アセローラ、レンブなどの下草刈りや、大半がマメ科であった熱帯牧草見本園にネピアグラスの裁断茎葉をマルチする作業を共にしました。後に室長が中野寛氏に代わり、研究室合併もあり杉本明、松岡誠、寺内方克両氏が加わりました。

すぐに、温帯での仕事は短距離走で亜熱帯での仕事はマラソンであることに気づきました。文化の面でもヤマトはぱっと咲いてぱっと散る桜文化、ウチナーはいつ咲いたか散ったかわからないデイゴ文化と例えられますが、そのとおりで、ナイチャーが温帯と同じペースで仕事をしていると石垣では1年でくたばってしまいます。

その後、私のギニアグラス畑が1ヘクタール以上になり、登野城、島尻、前津盛祥、田村氏らに収量調査のために、年に2、3回、800個体以上あった育種材料を、1週間近くかけて刈り払い機で一株ずつ刈ってもらいました。炎天下でのこの作業はサトウキビ収穫調査と並んで重労働で、業務科からは「地獄の・・」といわれていたと聞きましたが、長く研究室のお守をしていただいた金城（幸）さんをはじめ、誰も嫌な顔をするわけではなく、本当に頭が下がりました。余談になりますが、これらの仕事がギニアグラス中間母本「農1号（別名熱研1号）」の成果となり、自分自身の研究の礎ともなりました。また、数系統が沖縄畜試の指定試

験地で高い評価を受けていますし、現在私自身が取り組んでいるアポミクシス遺伝子の単離に向けたゲノム研究で最も重要な素材となっています。

思い出深いものは、大浜の豊年祭です。毎年、新しい踊りを前石垣さんから教えてもらい、2、3 週間かけて、昼休みなどに練習しました。手のひらをマメだらけにして引っ張った大綱引きや、鎌と刀の戦いを演じるその板を支えて、号令と共に一心に走ったことも昨日のように思い出します。毎年行った伊原間での浜下りや冬のイザリと釣りも楽しい思い出です。与えられた字数になり、お世話になった方々すべてを書ききれないのは残念ですが、いずれ、石垣での私のもう一つの成果となった「サンシン(三線)」をぶらさげて再訪し、八重山古典民謡を謡いながらシマーを酌み交わしたいものだと思っています。

それが原点だった

仲谷紀男

先進国での経験があって、途上国との比較をかねがねしたいと思っていた関係で、当時の熱研から長期在外研究の話があったときは、これは良いチャンスと考え、「はい、行きます。」と答えた。さて、実際に滞在し始めて、具体的に何をしようかと、彼の国の研究者に尋ねると、研究問題はいくらでも転がっていて、その数の多さには圧倒されるばかりであった。そうなると、もう先進国と途上国との比較どころではなく、研究課題のいずれもが、大袈裟に言えば、その国の農業政策に沿うもので、研究論文を書くときに悩むことの多いその種の“研究の背景”などは初めから書けたも同然であった。

そのような状況から、彼の地では幅広く研究をさせていただいた。また、随分多くのデータを得ることができた。もちろん良いカウンターパートや関係者に恵まれ、さらにつくばからの暖かい支援があったことは申すまでもない。しかし、不精者の小生を途上国の農業研究にかくも駆り立てたものは何であったかを帰国後に考えてみたことがある。小生なりに一つの結論に至った。それはその国の内に偏在する極端な貧困であった。それが、小生を駆り立てた原点のように思えてしようがない。

滞在早々に、彼の国の人から誘われて、畑作地帯の土壌調査をすることになった。それは常々見たいと思っていた熱帯土壌の実物を見ることができ、さらに現実の農業も見れる良い機会と単純に考え、早速調査を開始した。土を食べていると当時は新聞報道があった地帯のど真ん中で、小生には或る事が強い印象として残った。

日本に比較して農家がまばらで、調査地点を設定したときは、近くに人家がないものと思いながら、調査道具の関係で大きな金属音をさせていると、どこからともなく、子供が現れ、しかも最初に小さい子供が、時間の経過とともに大きな子供が現れ、それが、不思議に年の順に整列し、ついで母親が必ず乳児を抱えて現れ、最後に父親が現れる、というのが通例であった。いずれも貧しい身なりであることは言うまでもなく、帰国後にその種の写真が一枚もないことに気がついたが、とてもそのときはレンズを向ける気持ちになれなかったということを思い出している。

南米サバンナの草地改良

名田陽一
在籍：1988 年 6 月～ 1991 年 7 月 CIAT
現在：九州大学大学院農学研究科

CIAT における研究：

CIAT はコロンビアにある国際研究機関であり、本部はアンデス山中、標高 1,000m の都市カリにあり、年中初夏の気候の、良い所である。私がサバンナ草地の改良に従事したカリマグア試験地はカリから東へ約 400km の低標高

のサバンナにあり、2万haの広大な面積を持つ。試験地にはCIAT所有の飛行機で行く（写真）。私は一回4～5日、月に2～3回でかけ、研究者仲間からはカリマグア好きと呼ばれていた。研究費で購入した125ccの日本製バイクで試験地の内外を飛ばしてサバンナの生活を楽しんでいたが、コロラディートとよぶダニには悩まされた。これに咬まれると2週間ほどはれて、かゆい。最初に咬まれたときは、1カ月はれて、1年間痕が残った。この試験地が現在は廃止されたと聞きさびしく思っている。

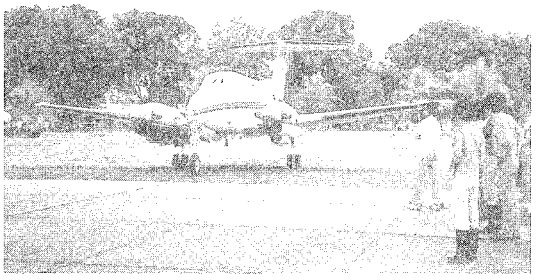
研究の変遷：

国際研究機関はCGIARとよぶ組織に監督を受けており、私の在任中にもいくつかの指摘を受けた。1つが、Internationalizationであり、当時南米中心であった熱帯牧草部の活動を全世界の途上国に広げる必要にせまられた。これを受けて、アフリカネットワークとアジアネットワークが作られた。またUp ward trendとDownward trendのキーワードでバイテク等基礎的な研究の充実と、現場に直接役に立つ成果の両立が求められた。さらに、Sustainable agricultureの推進も必要であった。Sustainableってなんだい、とオーストラリアの研究者が大きな英・英辞典（彼にとっては国語辞典）を引いているのが印象的であった。いずれにしても、これらの問題に対処するスタッフのエネルギーと能力には感心した。

ライスパスチャー：

我々農耕民族と牧畜民族の違いを感じさせられた話である。広大なサバンナをより生産力の高い牧草地に変えていく過程で、まず耕起、施肥してイネを栽培する。この耕地らしくなった土地に牧草を播種し、放牧する。イネの販売によって得た収入で牧草の種子代や耕起の費用をまかなう。要するに、最もほしいのは、草地から得る肉でありイネは捨て作である。稲作民族の持ち得ない考え方である。

写真説明：カリマグア試験地についたCIAT所有機



自由闊達な「所議」

西山明彦

JIRCASに勤務していたときの思い出と言えば、まず、自由闊達で、いつ終わるともしれない「所議」があげられます。

司会は、大賀企画調整部長。所の運営に新風を吹き込むべく、ラッパを高らかに鳴らします。部長が事前にご覧になっていない企画調整部の議題があったりするのも驚きでした。

迎え撃つのは、坪田海外情報部長。舌弁さわやかに正論を唱え、時として「私は反対です。」などと、はっきり意見を述べられます。

次いで、陽環境資源部長。ユーモアたっぷりに貴重な御提言を出されます。さらに、川嶋生産利用部長。これこそ試験研究機関のオーソドックスな意見ではないかと思われるような意見を述べられます。

こうしたやり取りを楽しそうに見守る前野所長。最後は、いつも妥当な結論にまとめていかれます。

事前に根回しをし、ほとんど意見もなく短時間で終了する本省の局議になれていた私にとって、このような「所議」はなんと新鮮に感じられたことでしょう。

また、ひときわお世話になったのが、所議では理路整然と意見を述べられる石毛生物資源部長。私は、所議でもたびたび話題になる「南米大豆プロジェクト」の現場を是非とも見たいと考え、中南米に出張させていただくことになりましたが、石毛部長が御自身の予定を変更し同行してくださることになりました。この出張では、メキシコのCIMMYT（国際小麦トウモロコシ改良センター）を訪れたことが印象に残っています。国際研究機関の管理者が各国からの拠出を得るために、研究成果をアピールすることに、どのように心を砕いているかを垣間

見ることができましたし、石毛部長とご一緒だったおかげで、バイテクに関するお話もたっぷり聞くことができ、ずいぶん勉強になりました。

こうした所議メンバーの方々に囲まれ、また、試験研究とはあまり関わりがなかった私のために、いろいろとご配慮をいただき、とても楽しい充実した刺激的な1年を過ごすことができました。冒頭の所議の様子については、表現が不隠当なところもあるかも知れませんが、私は、この尊敬すべき方々から学んだことも多く、たいへん感謝しているところであり、失礼な表現は、どうかお許しいただきたいと思います。

私は、JIRCASに勤務していたときは、昼休みに蚕昆研の池のほとりの森を散策するのを日課にしていましたが、是非また、このような思い出を胸に、あの森を歩いてみたいと思っています。

破壊を免れたスーツケース

西山岩男
在籍：1978年7月～1980年4月、1987年5月～1989年9月
現在：東北大学農学研究科

私は熱帯農業研究センターに2回勤務している。1回目はフィリピンにある国際稲研究所（IRRI）の客員研究員で、2回目は新設の基盤技術研究部の部長をつとめた。それほど長い期間ではなかったが、国内にいては考えられない多くの経験を味わうことができた。以下に記すエピソードは、基盤技術研究部長時代のものである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

それは、1987年12月のことであった。私は南国のナイジェリア、セネガルを旅行して真冬のパリに戻ってきた。さて日本に帰るというその朝、空色のスーツケースを持ってエールフランスの市内ターミナルに着くと、周囲の人々の様子がなんとなくおかしい。聞き耳を立てていると、空港からの連絡バスが来ないということらしかった。次第に待っている人の数が多くなり、とてもらちが明きそうにないので、タクシーで空港に向かう。シャルルドゴール空港について、出発便の案内板を見ると、乗るべきエールフランスの便がないではないか。ストライキで欠航だという。ここで初めてエールフランスのストライキを知った。幸い、2時間ほど後の日本航空のチケットが入手できた。

この空港は、CDG（シャルルドゴール）1と2に分かれている。エールフランスは2であるが、日本航空は1の方で、専用バスで連絡している。どちらもユニークな形をしたビルディングで、たいへん機能的にできている。

CDG1に到着し、チェックインの前にトイレに行こうと、スーツケースを腰掛けの横に置いて階下に降りた。パリは盗難が多いと聞いていたが、仕事は終わったので気分が楽になっていた。

数分後、階上に戻ろうとすると、銃を持った警察官が立っていて通してくれない。向こうに行けというので、別のエスカレーターで階上に上がり、スーツケースの方に行こうとすると、再び銃を持った2人の警察官に遮られた。ここは通れないという。理由はよく分からないが、その位置からは私のスーツケースが見えたので、あれは自分のものでありそれを取りに行きたい、と言った。すると、彼らはなにやら相談していたが、いま1度私のものであることを確認した上で、スーツケースを銃で撃つ仕草をして、「われわれはあれをまさに破壊するところであった。」といった。そして、これが見えないかとすぐ横の壁を指すので、見上げると、「1分以上放置された荷物は破壊（destroy）する。」と大きな字で書かれていた。見回すと、その掲示はあちらこちらにあった。さらに見ると、私のスーツケースの回り10mほどが人払いされているではないか。

不穏分子が空港を破壊しようとしているという情報が入り、警戒中だったのである。爆弾は手荷物に見せかけて置かれる可能性が高いので、手荷物を放置することを禁止していたのである。そう言えば、到着した時から銃を持った警察官が多いことには気がついていた。私は、スーツケースが盗まれることを気にしてい

たが、実際はたくさんの警察官によって厳重に守られていたのであった。そして、破壊を免れたことも、ともかく幸いであった。

研二部の技術体系研究に思う

野崎倫夫
在籍：研究部、研究2部、研究技術情報官

私は1973年5月から1984年10月までの11年5ヶ月をマレーシアのムダ農業開発公団（MADA）で過ごした。赴任当初の2年間は稲作栽培の個別派遣研究員であったが、1975年の7月に研究第二部（研2部）が誕生してからは、研2部の研究員として“ムダ灌漑地域の水稲二期作技術体系の研究”をテーマに、栽培、農業土木、機械化農作業、農業経営の4分野によるチーム研究となった。実用技術の組み立てを目標とした研2部期待の研究であったが、初めての経験と力不足で十分な成果を挙げられぬままに終わったことをチームリーダー（81年9月設置）として申し訳なく思っている。この研究の思い出と、国際農業開発協力に果たした研二部の技術体系研究の重要性を述べさせて頂きたい。

ムダ地域（9.6万ha、5.9万農家）の二期作は1975年には同地域のほぼ全域に普及したが、用水が計画通りに流れず作期が混乱し、さらに機械化による田面均平の破壊と、雑草とツングロ病が発生して二期作が著しく不安定であった。そこでわれわれ研究チームは灌・排水施設及び農道の整備と農作業の機械化を柱とした同地域の二期作技術体系の確立を目指した。

当時の圃場整備レベルは第2次灌・排水路までで、1耕区の大きさは平均800haもあり、この中は田越し灌漑で、耕区内に灌漑水が行き渡るのに1.5ヶ月を要した。土木分野では試験耕区の中の一部に第3、4次の灌・排水路と農道を設置して、その効果を検討することにした。しかし、用地の買収で思わぬ難問が発生した。農家の土地所有は法律により1ha以下に細分化することが禁止されていたが、実態は回教法による均分相続が行われており、実質的な土地所有は1ha以下で、登記簿と実態が一致せず、また土地台帳の不整備もあり、地権の交換分合が難航して基盤整備を計画どおり進めることができなかった。また難航の末ようやく完成した第3、4次の灌・排水路も、第2次灌漑水路に水が来ないので、灌・排水試験を進めることができないなどの深刻なトラブルが続いた。

農作業については、当時すでに95HP前後の大型トラクタによる賃耕と、ヨーロッパ製の普通型コンバインによる賃刈りが普及していたが、大型トラクタによる深耕が水田の地耐力を低下して、トラクタ自身の圃場内走行を困難にしていた。コンバインによる収穫は、機械の走行跡によって田面の均平が著しく破壊され、また畦畔乗り越え時に畦畔を破壊した。そこで機械化農業分野では、日本の作業機による水田整地、移植、収穫作業の一貫した機械化体系を目指し、日本国内の研究機関や機械メーカーの協力を得て改善を進めた。しかし、余りにも日本と異なる圃場環境から、個々の作業機の改善に時間が費やされ、機械化作業技術体系を組み立てて実証する時間がないまま研究を終えた。とくに気になったのは改良した自脱型コンバインの耐久性であった。当時普及していた普通型コンバインは、1シーズンに250haを刈り取り、5シーズンで減価償却を行い、6シーズン目からはコントラクターの儲けと云われ、その価格は1台が1,600万円前後であったが、日本の改良自脱型コンバインは、1シーズンに50ha前後を収穫し、耐久性は200～300haが限界とみられた（耐久試験にまで至らなかった）。その価格はメーカーによれば、同地域で必要とされる数量を量産したとしても600万円前後と試算された。日本の改良自脱型コンバインは、経済性において、普通型コンバインに太刀打ちできないと思われた。

栽培技術についてみると、農家の移植密度は10株/m^2前後で、これを20株/m^2植えにすると10%近い増収が見込まれたが、この程度の増収では田植労力に対する代価としては魅力に乏しいので、導入を奨励しなかった。圃場内水管理については、3～4インチの深水栽培を奨励した（たとえ圃場が整備されても日本の浅水栽培や間断灌漑などのきめ細かな水管理は

奨励しなかった)。なぜならば、この程度の深水なら5t/haの籾収量は確保できたし、そのうえ雑草の発生を抑制し、旱魃に備えての用水の備蓄となったからである。

われわれは日本の稲作技術は世界に冠たる技術であると自負して来たが、その技術は高収量一筋に築き上げられた技術であり、高い圃場整備水準と国際価格の5～8倍の高米価と兼業という特殊な社会条件下では成立しても、国際的な営農技術として通用しなかった。私は熱研退職後の10年間を民間の農業開発コンサルタンツに勤務し、多数の途上国の農業開発調査(主にJICAのF/S調査)に参加したが、とかく先進国技術の一方的な押し付け的開発に終わりがちな農業開発協力に、研2部の現地適応技術体系の研究が大きく役立ったことを申し上げたい。

忘れがたきこと

八田貞夫

熱帯農業研究センターが、国際農林水産業研究センターに拡充されたことは、私達熱研OBにとってにこんなに嬉しいことはない。私は、農林水産技術会事務局に置かれた熱帯農業研究業務室(後に同管理室となる)の時代(1969年以降)から、この新しい組織造りに参画する機会を与えられ、石倉秀次さん(上記の業務または管理室長)、山田登さんらの優れたリーダーにも恵まれて、どうにか熱研初代の企画調査室長としての責任を全うすることが出来た。

石倉秀次さんは、私がカンボジアのバッタンバン州にあった、日本政府の供与による「日本・カンボジア友好農業技術センター」へ1966年5月頃、小倉武一、技術会議会長と一緒に来られたことがある。帰りにはアンコールワットに寄られ、同地で一泊、翌日の便で次の目的地へと出発という日程だったので、私は佐藤徹さん(北海道農試・病理)と一緒に車でご案内した。当時はカンボジア国内が極めて平穏で、遺跡もよく保存されており、お二人とも、壁面の彫刻など熱心にご覧になって、インドやセイロンなどとの比較についてご講釈を頂いた。私は同年10月に帰国することになっていたので、石倉さんに上記の業務室への復帰を希望する旨申し上げ、帰国後その希望が叶えられたのを知って嬉しかった。

石倉さんのお仕事振りは実に精力的で、机の上には何時も学会誌などが置いてあり、英文の手紙などはご自分でタイプされた。ご専門は昆虫学であるが、他の分野でも問題の本質をきちんと把握し、理路整然と話されるところは見事であった。1968年から始まった熱研管理室主催の国際シンポジウムでも率先して会場の準備に奔走されるなど、我々後輩を振るい立たせるものがあった。

初代熱帯農業研究センター所長
・山田登さん:

山田登さんほど、身体強健で研究能力と語学力に秀いで、いつも新鮮な感覚で若い人達を引きつけるような魅力のある性格を持った人はめったにおられない。開発途上国の人達と接する時も、終始、謙虚な態度で接しておられるので、この人達も忽ち山田さんのファンになるようであった。私は初代の企画調査室長として、山田さんの身近にお仕えしていたが、山田さんが持てる力をフルに発揮できるよう、私の段階で処理できると考えられる雑用はすべて私が処理することにしていた。その方が私自身もより多くの行動の自由を確保できたように思われる。

在外研究員として任国へ駐在している人達からよくお手紙を頂いたが、私は幸いにして、カンボジアの僻地に2年間住んだ経験があったので、在外研究員が現在何に困っているのか、何を欲しているのか、などについて大まかながら推察できたことである。

マレーシア、石垣で楽しかった熱研時代

花田俊雄

熱帯農業研究センターでお世話になった9年近くの年月は、楽しく、充実した時代でした。昭和57年6月に、「熱帯・亜熱帯における野菜の安定生産」のプロジェクト要員として、野菜試験場から熱帯農業研究センターに転勤。亜熱帯の野菜研究拠点は沖縄支所でしたが、熱帯の拠点をどこにするかと、タイ、フィリピン、マレーシアの3カ国を廻りました。受入条件が良かったマレーシア農業開発研究所（MARDI）が研究拠点になり、昭和58年2月にマレーシアへ出発しました。その間国内待機9ケ月。何もすることがなく悶々としていると、当時の研究第一部長の昆野昭晨さんは大好きな酒で慰めてくれました。マレーシアでは、最初の2年間は、熱帯高地の避暑地、茶・野菜産地として有名なカメロハイランドに勤務しました。ここは、平均気温が17℃、日中は25℃、夜間は13℃くらいになりますが、このような気温が1年中変わらず、常春の地でした。朝7時にはきっちりと太陽が昇り、夕方7時にはきっちりと太陽が沈む所です。季節感を喪失し、世界にはこんな桃源郷のような土地があるんだな、と驚きました。山の生活で仙人っぽくなると、人里の刺激を求めて、同期の柴田正貴氏がいる常夏のクアラルンプールに出かけました。飲んで騒いで、二人で明け方までカラオケを歌いまくったことも何度かありました。カメロンハイランドに2年間居りましたが、息子と娘を現地の学校に入れたため、二人は家でもマレー語で会話し、折角日本から取り寄せた海外子女教育の日本語をちっとも勉強しないのに危機感を覚えました。マレーシアには、クアラルンプールとペナンに日本人学校があります。そこで、ペナンの近くのベルタム試験場に移り、熱帯低地での野菜研究に従事しました。隣のボンボンリマの試験場には、滝田正氏がおり、氏に碁の指導を受けましたが、毎回敗退で悔し涙を流しました。マレーシアに4年いて、後半さすがに疲労感が重なったのは、この勝てない碁のせいだったかも知れません。

昭和63年3月、マレーシアを離れ、4月から石垣島にある熱研沖縄支所に勤務しました。石垣島では、夏の強い日射しと台風に悩まされました。毎日畑に出て、キャベツのべたがけ栽培やシカクマメ、ウリズン、の調査をしてましたが、そのうち泡盛の美味しさに虜になってしまいました。泡盛をポカリスエットで割る方法です。これで、その日の体調に合わせいくらでも飲めるのです。一緒に野菜を作っていた沖村誠氏や業務科の大和浩二氏、パートの前石垣さんには、午前中は随分臭い息をかけていたと思います。それでも、大体昼飯を食べると普通になり、何となく避けてるなーという感触が消えて安心したものです。沖縄は、歌と踊りと、そして何故だか訳のわからないランナーズの世界でした。いま、こうして昔を振り返ると、懐かしい想いが湧き出てきます。このような思いでの場をセットしてくれた当時の熱帯農業研究センター幹部の深慮遠謀に感謝します。

スファンブリ稲作試験場での水田高度利用研究

原城　隆

昭和51年10月、東北農業試験場農業技術部から研究第一部への配置換えとなり、初めての海外勤務を命じられた。タイ国スファンブリ稲作試験場での日タイ両国の水田高度利用の共同研究（Land and water utilization on paddy field in Tailand）が3年ほど前から始まっており、そのプロジェクト研究実施のため、準備不十分のまま、八田貞夫チームリーダーや高橋均氏らのいる現地に飛び立つことになった。

私に与えられた試験課題は、雨期に水稲を作付けした場合の乾期に導入する畑作物の選定・栽培法・水稲三期作等の試験であった。このうち最も力を入れた水稲三期作の試験では、年間籾収量最高で15.87t/haをあげ、必要とするかんがい水量を提示した。これと似た研究は当時、IRRIで行われ、年間4作で25.65tの高収

量を上げていた。タイ国では三期作試験は初めてとのことで試験そのものはそれなりの意義をもつと思っているが、現実にそれを導入するには、地力維持や病害虫等幾つかの問題が指摘されている。国際農林業協力協会から発行している現地有用技術集における評価でも本技術の導入には多くの課題をもっているとなっている。

スファンブリ稲作試験場での共同研究は私が最後であると思っていたが、その後も残された問題解決のため研究が延長され、渡辺泰氏に引き継ぐことになった。私の2年間の研究実施に際して、五十嵐孝典氏はじめ多くの熱研センターバンコク駐在員のご指導とご協力、ブンラート場長、カウンターパートのヴィチエン氏らタイ側関係者の絶大なご協力とご支援があったことに深く感謝している。

スファンブリでの生活は、赴任後初めの半年くらいは言葉や気候の問題、対人関係で神経を使ったが、その後の1年半は充実した楽しい生活となった。スファンブリに駐在していたベテランの高橋均氏の公私にわたる気配りがあったことが極めて大きかった。その高橋氏が私の着任数ヶ月後に人事異動で突如帰国することになり大変困惑した。高橋氏に替わって農事試験場から1年間勤務という条件で若い山田盾氏がきて手伝ってくれることになり、少しは肩の荷がおりた。

2年間の勤務中、試験場職員はいうに及ばず、農家、商店、寺院など、極力タイ人に溶け込むように努めた。親切にして頂いたそれらの人達は今、どうしているかと時々思い出す。特に、帰国時にスファンブリ試験場の近くの寺院の住職さんが持ち出し許可証を添えて仏像を私にプレゼントしてくれたのには感激した。その仏像は今も我家の仏間に安置してある。

2年間の海外生活で得たものは多く、ここでは書きつくせない。敢えて一つだけ書かせて頂くならば、現地の人達の生活水準は私達と格段の差があるが、それが幸か不幸かということとは別の問題であるということを、実際にこの目で見ることが出来たことである。これが研究成果以上に大きな収穫であったと思っている。

あれもこれも

早川博文
在籍：元畜産草地部長

国際農林水産業研究センター（JIRCAS）での4年間は、私には農水省36年間の最後の花道で、「終わり良ければ」であった。この言葉は、1年早めの退職時に自費出版した「虻が飛んだ」の巻頭言に用いた。地域農試での勤務が長かった私には、国際舞台はまるで「井の中の蛙」で、しかも「蛙の面」でなんとか乗り切ることができた。

熱帯農業研究センター（TARC）からJIRCASへの組織改変は平成5年10月で、畜産草地部の創設のための研究基本計画の作成、関係場所との協議・調整など、私は夢中で走り続け、風邪など引く暇はなかった。我が国で初めて畜産・草地・家畜衛生の3分野を統合した専門部ができた喜びと期待、そして責任感がそうさせた。

発足時の部の定員は10名。各分野のバランス、国内と国外の研究体制など、将来の発展を思えばやり甲斐のある仕事だった。無知な私に、多くの方々から暖かいご支援・ご協力を頂き、そして有能な部員に恵まれて本当に幸せだった。「遊牧」という部内誌を作って海外に派遣されている部員とのコミュニケーションを図った。世界の国々を訪ねてみて、我が国との畜産分野の共同研究が強く求められていることを肌で感じた。将来的にJIRCASも、この分野の研究を国内も含めてもっと強化したいと努力したが、儚い夢になった。

新生JIRCASの紹介ビデオでは、石井資料課長をはじめとする制作委員会で、ストリーの構成、現地での撮影など出来るだけ手作りを旨とした。コロンビアのCIATで前野所長が登場するシーンの撮影、東京六本木のスタジオでのナレーションの吹き込みなど、このビデオには私の思い出が一杯詰まっている。ラスト・シーンはマレー女性による豊作の喜びと踊りで決めたが、指を丸める仕草は別な意味があると後で聞かされ、赤面した。

現在、私はJICA技術協力の「未利用資源飼料化計画」の仕事でマレイシアに来ている。基幹産業として発展している油ヤシで、廃棄される茎葉を流通可能な家畜飼料（ペレット、キューブ）に製造する技術とその飼料を用いた乳・肉牛の飼養技術の開発が主な目的である。これはJIRCASがTARCの時代から、マレイシア農業開発研究所（MARDI）と10年以上にわたって行った共同研究「農業副産物の家畜飼料利用」の成果を、JICA技術協力へ連携、発展させたものである。JIRCASの成果をさらに大きく開花・結実させる絶好の機会と捉えている。

プラント建物はマレイシア側が建設し、機材は日本側で供与する。技術協力の枠組みでは思わぬ困難にも遭遇した。しかし、JIRCASとの共同研究で培われた人間関係が貴重な財産となり、プロジェクトの活動に活かされている。「始めよければ全てよし」である。

現在、世界には8億の人々が飢餓に苦しんでいる。昨年10月には世界の人口が60億を突破した。21世紀は人類にとって「増え続ける人口と食糧の確保」が最大の課題であろう。人が食べられない未利用資源を家畜を通じて食糧に変換するプロジェクト、これも良しである。人々が満腹すれば、平和な世界はきっと来る。

短期決戦

林　健一
在籍：第4代所長

部長以上の管理職人事の4月・10月に画一化が大略定着し、還暦の誕生月を過ぎた昭和55年4月1日、北陸場長から熱研所長へ配置換、しかも、早期着任が要請され、任期は農研センター設置等の新研究体制発足の12月1日迄の八カ月間が予期され、異例づくめである。加之、発令と同日、全農林・筑波地本直属の熱研班が誕生した。

ともあれ、守備を固め、繁ぎに徹し、得点機を窺えば最良である。海外での研究経験は戦時中の華北産業科学研究所の5年、2ケ月の南米移住地調査、米コーネル大での客員研究員の1年である。熱研には技会管理官時代に推進構想の扱い・研究2部の設置問題、更MUDAの研2部事業の視察、北陸時代に経営経済研究視点での研究方策に関し比・馬・泰の三国訪問（昭54）で対応した。

執務開始と同時に昇格問題や次年度予算の処理、この為、沖縄支所出張・組合交渉等で状況把握、研究職の昇格は候補1名入替で割当消化を目指し、定員は支所行Ⅱ職2名増、多分総務部長も要求した。前者は後に実現したが技会土屋総務部長から今時非常識な要求と評された。小生と同時着任の総研からの菊地庶務係長が活躍した。

こうした合間を縫って、JICAやその他の在京関係機関への挨拶、また、海外からの来客の応対をこなし、4月中旬にはIRRIのブラディ所長の辞任の挨拶と今後の協力の強化の提案を受けたが、在任中の9月末、2日間に亘りIRRI側はベガ所長代理等7名、農水省側は稲作関係13場所の部長クラス約30名でワークショップを開催、7項目の協力分野と2項目の実行分野を定めた。

その際、机上の「日本の稲作研究の現状」の鉛筆の走り書を見付け出し、素早く22頁の英文に仕上げた調査資料室要員のバートマン女史の超能力には驚かされた。

6月14～26日にマレーシア（サバと半島）とタイに調査行、勤評を控え庶務課長は賛意を表しない。幸い地本の理解でドジを踏まずに済んだ。その後に再度の支所行き、時の亀岡農相の好意の支所石碑建立や県農試表敬、ウリミバエ駆除状況視察。9月4～16日は中国政府招聘の中国出張（主に海南島での熱帯作物研究視察）、熱心な研究意欲と実績に感服した。知的・人的協力は不要、ハード（機器）の協力で十分だとの印象であった。

熱研は政府職員なので駐在は出来ず、長期や短期の6ケ月を限度とする出張で業務を継続している。その為、毎月の様に帰国報告会が開催され、8ケ月の間に少なくとも一度は顔を合わせていると思うが、全職員98名の顔と名が一体として思い出せないのが残念である。また、ここには人事の都合上、色々な研究者が配置されているが、岩崎穂氏の南米での活躍振りを報

告会で聞くにつけ、これで良かったのだな、と思った。

それでも、気になっていたのは、かつて技会での「推進について」の仕上げの段階で創立早々の熱研に長期計画の策定を求めなかった。最後に、それが可能かどうかに挑戦してみたが、これは草稿を残して後代所長に引き継ぐしかなかった。このため、実際の研究は断続的・重点的となり、熱帯を中心とする途上国に伝えるべき日本の主要な農業技術研究成果は、初代の山田所長が週一回の勤務でリライトしてJARQに編集し、4回出版している有様、未だ劣勢なままの研究体制では海外の科学情報の収集はおろか、国内研究成果の集成すらも覚束ない、これが熱研を辞する時の実感であった。

Enablingから Partnershipへ

林 健一
在籍：所長
現在：STAFF顧問

国際的な農業研究協力ーそれは息の長い仕事である。私自身にとっても、FAO 3年、CGIAR20年余、その間に熱研7年余の四半世紀に及ぶ。農業研究協力を巡る世界の情勢も、序々にしかし確実に大きなうねりとなって変化した。私の思い出もこの大きなうねりの中でのささやかな回想である。

大きなうねりの解釈は人により多岐、多様である。私に最も大きなインパクトを与えたのは、表題の「Enablingから Partnershipへ」である。これは現役時代にはほとんど気がつかず、今になってやっと見極めたうねりである。

「Enabling] とは、「---- する力（権能・手段）を与えること」である。1970～80年代においては、すべての労力は「途上国に役立つ技術を開発すること」に集約された。私個人のレベルから、研究部、熱研、さらにはCGIARのレベルにいたるまで、「Enabling 研究」の推進に努力した。この共通意識はもちろん間違いではなく、是非とも「必要」なものであった。しかし「十分」なものではなかった。その理由は、すべての発想、計画、行動、評価の基準を、自己の足下あるいは自己の安全範囲に置いていた誤りにある。

六年間のTAC委員を通じて、この「Enabling] すなわち「---- をしてあげる」という mentalityを私はとくに旧宗主国からの同僚委員に強く感じた。CGIAR センターも「開発した技術のメニューから、好きなものを途上国が選んで使いなさい」との立場が底流にあった。いずれも善意と意欲は十分にあったが、自己の基盤に対する誤った優越感や自信が基調にあったことは否めない。

協力の提供者と受益者との格差が大きい初期の段階では、「Enabling」は十分に機能した。しかし、途上国が実力を増し。なおかつ技術一辺倒では解決できない諸問題が顕在化するにつれて、相互の信頼・尊重・理解に基づく「Partnership」が必須なものとなった。

基軸を自己と相手の両者に配する新しい取り組みである。CGIARは90年代半ばに、その目標達成の手段として、従来の「研究」に新たに「Partnership] を加えている。

数多くの中から一つを選ぶことを許していただければ、思い出は海南島の水田へ飛ぶ。そこでは日中共同研究の一環として、有望系統の世代促進が実施されていた。強い日射しとぬかるむ畦畔にへとへとになってたどり着いた水田に、立派な稲が育っていた。多くの方々の思いとご苦労に、我々は胸が一杯になった。汗まみれでお互いに交した笑顔を私は忘れることができない。

国際協力に特効薬はない。それは地味なしかし誠実な日常的なお付き合いの積み重ねである。これは思い出とともに、私の自戒の言葉でもある。最後に、お世話になった皆様へ心からの御礼を申し上げるとともに、JIRCASのますますのご発展をお祈り申し上げて筆をおかせていただく。

日中共同研究開始前夜

東　正昭
在籍：1982年11月～1985年3月
現在：中国農業試験場

日中国交回復後10年目の昭和57年から、熱研と雲南省農業科学院の間で、イネ育種共同研究が実施され、私は、57年12月から日本側の組長として2年間お世話になりました。初めての海外赴任に加え、あの文革の余韻が残っている中国、栽培イネの起源地と目されながら、実状はほとんどわからない雲南、行く前から緊張やら興奮やらを覚えました。

11月初めに、熱研の林健一研究第二部長（後に所長）、九州農試の菊池文雄作物第一部長とともに、事前調査と覚書きの詰めに雲南を訪問しました。これも当初、5月の予定だったのが、中国側の受け入れの都合で10月になり、直前になってさらに延びたものです。待たされ、もうこの話は無くなるのではと不安になりました。初めての訪中の帰路、上海空港目前でタクシーがトラックと接触事故、荷物が出せなくなって、予定の便に間にあわず帰国が1日遅れました。帰国後すぐ11月16日付けで東北農試（大曲）から熱研に異動し、12月10日の出発までの間、機材の選定など出発準備に忙殺されました。

雲南プロジェクトは中国との政府間の初めての共同研究で、各方面から注目され、テレビや新聞でも報道されました。また、出発の前日、一緒に行く北陸農試の内山田博士さん（1カ月）、青森農試藤坂支場の小山田善三さん（半年）、宮崎農試の轟篤さん（半年）とともに、衆議院議員の亀岡高夫先生（故人）に招かれていました。亀岡先生は昭和55年の第1回日中閣僚会議の農相会談で共同研究の実施を決められ、雲南プロジェクトに強い関心を寄せておられました。熱研で挨拶回りをした後、4人で宿舎の上野法華クラブに荷物を置き、地下鉄の駅が見つからず、時間がなくなり、タクシーで農水省へ向かいました。これが田舎者達の浅はかさ、道路が渋滞して大幅に遅れてしまいました。技会では清田安孝国際研究協力官と熱研の林部長が、やきもきしながら私たちの到着を待っておられました。亀岡先生と約束時間に間に合わなくなっていたようです。

ともかく清田氏の案内で、林部長も同行され6人で急いで議員会館に亀岡先生を訪ねました。約束より20分位遅れてしまったようでしょうか。しかし、先生は私たちの遅刻を気になさらず、気さくに共同研究への期待や励ましを述べられ、それに餞別（10万円）までいただきました（亀岡先生の名誉のために、これは当時の公職選挙法には抵触しない）。農水省に戻り、関係の方々に挨拶回りをしました。夕刻、日中農業技術交流グループの団長を務められ、共同研究の具体化を図られた官房の山極栄司技術総括審議官が、特大盆の寿司で励ましてくださいました。さらに夜になって林部長が西池袋の自宅に4人をお招きくださり、奥様とお嬢様の手料理をごちそうになりました。

渡航事務を担当された技会の草野和子さん（故人）によれば、局内で偉い方たちが何回も会議を開き、国の海外プロジェクトに県（指定試験）の職員に参会していただく道を開いたそうです。この頃、振興課長（後に局長）を努められた櫛渕欽也氏（故人）は、佐藤尚雄氏らとともに、昭和54年に雲南を訪問され、その後ずっと雲南に関心を持ち続けられ、雲南プロジェクトの応援団長的役割を果たされました。

日中イネ共同研究グループは「日中共同研究；遺伝資源利用による水稲の耐冷・耐病・多収品種の育成」で平成11年度の日本育種学会賞を受賞をしました。多くの方々のご支援あってのこと、関係の皆様に深く感謝いたします。

熱研創めの頃

日高輝展

熱研・国際農研創立 30 周年を祝い、記念誌刊行を心からお慶び申し上げます。

熱研との出会いは、1967 年タイ、マレイシアでの熱研による稲害虫調査チームに参加できたことである。それ以前の 1956 年夏、初めてパスポートを携帯して、亜熱帯の琉球列島（沖縄県）での昆虫調査を行った体験はあったが。これらは熱帯への入口に来た程度に過ぎなかった。

1968 年 1 月、技術会議 5 階に設置された熱研準備室に配置換となった。宿舎は農事試験場北本の宿舎で庭付きであった。そのころ、熱研には研究棟、宿舎等はなかった。

国内では熱研発足に向けて関係者の尽力は多大なものがあった。中でも、熱研は我が国益にどう繋がるのかであった。当時、我国の熱帯農業に関する情報は、遺憾ながら、極めて少なく、熱帯農業技術とは程遠いものであった。しかし、将来、熱帯諸国は世界の食糧生産基地の役割を担う可能性大であり、我国への食糧資材輸入のためにも、熱帯農業把握が肝要であるとされた。

準備室から熱研設立後、しばらくの年月は熱帯農業に係わる研究成果業績がなく、問題とされた時期もあったが、成果が比較的早く挙がる旧環境部に所属する虫害、病害、土壌、雑草、気象等の分野の在外研究員が、1967 年より東南アジア諸国に出張して、共同研究を開始した。準備室では、私の研究分野イネノシントメタマバエ（以下タマバエと略称）に関する世界の文献資料を収集、解読しながら、翻訳も合わせて行った。

熱帯諸国の研究機関での在外研究員の受入れと研究協力体制は良好であった。タイ国では農業技術研究所の先輩である JICA 専門家の協力は絶大であった。当時、日本では、JICA が主流であり、熱研の進出に対する理解は今一つであり、批判的であった。JICA と熱研との区別が論議された。熱研はあくまでも基礎的研究協力を主唱した。その後、熱研の研究成果が確実に挙がるようになって、熱研に対する理解と協力が国内外で得られた。ここに至るまでには長年月が経過していた。

TARC Technical Bulletin, 熱研集報等相次いで出版されて、熱研の研究活動が国内外で評価された。国際会議に出席して、熱研の存在を示した。各試験場、研究所、大学へ出かけては熱帯農業研究活動とその重要性について説明したりした。ある国々では、熱研との協力を希望し、熱研は日本の優れた研究所であると言われた。

インドで JICA 日本型稲作計画で、タマバエの甚大な被害が発生した。その生態と防除策定のため、日本に生息しない、本害虫をタイ国で研究開始したのが 1968 年であった。

マレーシアで 3 年

平尾重太郎
在籍：1985 年 4 月～ 1988 年 12 月 研究第 1 部

1985 年 4 月九州農試から熱研へ転入し、8 月マレーシア・ケダ州の州都アロスターの、マレーシア農業研究開発研究所（MARDI）アロスター試験場へ赴任し、新規のプロジェクト（1985 ～ 1989）がスタートした。聞くところによれば、複数のスタッフによる病害虫のプロジェクトは、熱研ではこれが初めてとのことであった。当初は 2 名のスタッフで、1 年後には 3 名になり、マレーシア側の 1 名とともに研究期間の前半を担当した。

本プロジェクトの研究課題は、「熱帯における水稲二期作化に伴う病害虫対策」で、実施課題は「二期作水稲における主要病害虫の発生生態の解明」であった。主要病害虫とは、全土で重要になったウンカ・ヨコバイ類で、ヨコバイ類が媒介するツングロ病（ウィルス病）も含まれた（詳細は熱帯農研集報 73:131pp, 1993）。

アロスターにはムダ農業開発公団（MADA）があり、ここで熱研は創立以来公団とタイアップして、広く水稲栽培の技術協力を行って、多

大な成果をあげていた。ムダ地区（約 10 万 ha）では、1981 年ツマグロヨコバイ類が媒介するツングロ病が突如として大発生し、それ以降も多発状態が続き被害激甚を極めた。その対策として、毎年オフ作（第 1 期作）前の乾期（2 ～ 3 月）に少なくとも 1ヶ月の休閑期を一斉に設けて田面を耕起し、これにより病原（罹病稲株）を根絶し、病原の周年環を遮断することを MADA の熱研が提案し、1984 年から実施された。これが見事に功を奏し、ツングロ病は 1984 年に激減し、翌 1985 年以降は皆無となった。こんなわけでツングロ病は本プロジェクトから除くこととなり、研究手法上難題と予想していただけに、正直なところ肩の荷が半分下りてホッとした。

滞在中に直播栽培が急速に普及した。これは 1987 年のオフ作（3 ～ 8 月）で降水量が少なく、用水が不足し、やむなくほぼ全域で直播きとなった。これが契機となり、それ以降図らずも直播きが定着した。こんなわけで後任者による研究期間の後半は、直播田で試験研究を行うことになり、また MADA の熱研でも 1990 年から直播栽培の試験研究が開始された。直播きの急速な普及は、経済発展に伴う農村青年の都市への流入、農業就労者の高齢化など、社会情勢の変化が要因といわれている。この時期他の東南アジア諸国でも同様であったようである。

従来、マレーシアは他の東南アジアの諸国に比べ、貧富の差が少なく、生活レベルが高く、外国人にとって生活しやすい国であると聞いていた。実際生活してみて、全くそのとおりであった。中国系人が多いので、食材も日本的なものが容易に手に入り、家内がいっしょだったこともあって、食生活に違和感は全くなかった。

1980 年代東南アジア諸国では経済成長が著しく、マレーシアも例外ではなかった。住まいは新興住宅地の長屋（二階建）で、若いマレー人に囲まれて生活した。驚いたことにどの家庭も自家用車をもっており、共稼ぎ家庭では 2 台のところも珍しくなかった。もちろん MARDI の職員はほとんどが車で通勤し、当時はまだ外車（ほとんど日本車）が多かった。赴任した 1985 年に初の国産車 “proton SAGA” － 1300cc セダンーが登場し、記念切手が発行された。政府は国産車の販売促進のため、公務員には低利で融資し、とくに若い人の間では国産車の話題が多かった。ちなみに、この国産車は当時のレート換算で 100 万円、日本車（輸入完成車）は関税が高く、日本国内での値段の約 2 倍であったが、それでも自家用車（外車）を持っていたのには驚いた。

日常生活にはほとんど不自由はなかったが、風呂だけには困った。マレー人は通常お祈りの前には冷水をかぶり、それが風呂代わりになる。私ばかりでなく多分日本人は、外気が暑くても水浴はいやで、熱い風呂に入りたい。そこで一工夫し、黒いプラスチック製の盥に水を入れて透明ビニールでカバーし、これを天日に置くと温湯になり、それを部屋へ運んでかけ湯として使った。マレー人が盥を見てこれは何だと聞くので説明すると、こんなに暑いのになぜ冷水を使わないのかと、不思議がっていた。ところが当然、曇天や雨天の日にはお手上げであった。

滞在中に円高が進み、US$ は ¥230 → ¥190、マレーシア 1M$ は ¥100 → ¥80 となった。当時銀行の定期預金は年利 8% で、試みに 1 年預けてみたが、結果は散々で円高で稼ぐほうがよかった。

マレーシアでの 3 年間は、私の唯一の長期海外生活で、日常多くのマレー人家庭との交流もあって、思い出になることが多く、貴重な経験をした。

マレイシアでの４年半

藤井秀人
在籍：1987 年度～ 1993 年度
現在：農業工学研究所水工部河海工水理研究室長

マレイシアの MADA（ムダ農業開発公社）に平成元年 6 月～平成 5 年 12 月まで 4 年 6ヶ月間を「直播プロジェクト」の長期在外研究員として滞在した。MADA は研究機関ではなく行政機関である。当時 MADA には、栽培、雑草、農業経営、農業機械、農業土木と 5 人の長

期在外研究員が派遣されていた。私の専門は水管理（農業土木）であったが、他分野の研究者と共同研究をするのは始めてであった。共同研究はなかなか研究者同士の連携が難しく、うまく成果があがらない場合が多いが、我々は同じ圃場を使い、それぞれの立場から試験結果を分析できるよう計画し、取得したデータは独占しないで相互に利用しあうようにしながら、得られた成果をそれぞれの属する学会等に公表することができた。これは、諸岡チームリーダや、平岡さん、伊藤さん、金谷さんら長期在外研究員の明るい人柄のお陰であると感謝している。

研究成果は帰国後学会誌に発表すればそれでよいかもしれないが、プロジェクトの成果は現地で活用されてこそ意義がある。このため、最終的な成果を、我々は勿論、カウンターパートや MARDI の在外研究員にも執筆してもらい、直播に関する総合報告書を現地の出版物として残そうという計画が諸岡リーダから提案された。色々な事情があり遅れはしたものの、最終的にりっぱな総合報告書ができあがったことは当時のメンバーとして光栄である。その後、総合報告書を日本語にしようという話が諸岡さんからあったが、その後残念ながら断ち切れになっている。

我々日本人は同じ居室にいたので互いに密なコミュニケーションがとれたが、MADA のカウンターパートとは部屋が違っていたことや私の怠慢のためにコミュニケーションがおろそかになりがちで、これは反省している。MADA とは半年に 1 度 quarterly meeting を開催し、我々の研究成果を MADA と MARDI のメンバーに発表し、議論する場があった。このような場は相互の信頼関係の構築に重要な場になっていたと思う。ダムの水を放流できないような水不足が続き、水を放流すべきかどうかその対応策を MADA が検討するため会議（アドホックミーティング）に、我々熱研チーム 5 名も是非来てくれと要請され、3 日間ホテルに缶詰になり意見の交換会を行ったことが今も強い印象として残っている。

最近の JIRCAS は個別派遣はまれで、ほとんどがプロジェクトチームによると聞いている。当時からも問題になっていたが、プロジェクトの人員配置の遅れを何とか改善できないのだろうか。人選の遅れが原因でプロジェクト後半にしわ寄せが行くのは、現地で先に研究を進めている研究者や遅れて派遣された研究者にも迷惑をかけ、相手先に対する信用問題になると同時に、研究計画が達成できないことにもなる問題である。最近、研究評価が厳しく問われる時代であり、研究計画についても過去に遡って追求される状況であり、人員配置の遅れの改善策を検討していただきたいものである。

最後に、これから長期に出かけられる人に対して、私の少ない経験から感じたところを述べさせてもらうと、カウンターパートとアシスタントの力をいかに有効に発揮させるかで、研究成果に随分差が出ると思う。問題に対する改善策（リコメンデーション）も研究成果の最後に出るのでなく、短期で調査してきた印象をもとに、最初にリコメンデーションを提案し、それを現地で実証するぐらいの目標で取り組んで欲しい。

ニイ・ハオ・ユーと挨拶し

藤田嘉幸

1970 年 5 月 25 日夕方 6 時頃、宗像秀雄人事班長が私の連絡調整課に来られ、例のニコニコ顔で「元気か、ちょっと会長応接室に来てほしい」との呼び出しがあった。「実は人事だ、沖縄石垣島にいってくれ、熱帯農研が出来る。すぐ返事がほしい」。ハテ！石垣島とはどの辺かな？炊事洗濯が苦手の私には妻の同行が必要だが？などなどを考え回答を明日まで延ばしてもらい数人の先輩同僚と相談した。「一番茶だ。いくことに賛成だ」と励まされて遅く帰宅した。事情を聞いて愛妻いわく「子供たちの意見も聞いたら？」長女と次女長男達である。翌朝食時に「皆に相談がある」と言いかけたら長男坊主が「転勤だろう。どこか知らないが、お父さん行け。僕も行く」この一言で私の石垣赴きが決まった。

「かばん持ち」と人に仕えるやさしい言葉がある。私の場合はチト違う「看板持ち」であ

る。倉石忠雄農林大臣が墨痕鮮やかな達筆で「熱帯農業研究センター沖縄支所」と揮毫された幅約 30cm 長 120cm 厚さ 5cm ほどの桧の表札である。横尾技術会議事務局長は「大事に持っていきなさい。島の人たちとなかよくするのが君の仕事だ」との言葉もあり、飛行中も荷物室でなく私の隣座席まで運びこみ、6 月 10 日の開所式に臨んだ。そのとき撮った八重山の海がひときわすばらしかった。が、長男は「写真を修正しては駄目。海がこんな色に映る筈がない」とガンとして納得しない。

1971 年 8 月 11 日今日は長男の誕生日。海星学園に転校して初めての夏休み。名勝川平湾での水中メガネの海水浴や、美しい輝きの貝殻集め、坊主はすっかり八重山のトリコになっていた。「お父さんの写真はヘタだ、この海を見たらあの写真は比べ物にならない」と。羽田から来沖した機内窓ガラス越しの海辺、内地のより数倍も塩っぱく口のヒン曲がりそうな海水の味、背泳ぎのようにお臍を空に見せていても体が沈まない浮力の不思議さ。だが電気クラゲが多くて「痛てて！」と悲鳴をあげる。「危険だから気をつけろ」の警鐘も諭す海水でもある。石垣港のリーフで釣りを楽しんだ。坊主の竿に 42cm 程の黒鯛が釣れた。魚拓に写した後魚身は、熱研の職員や長期間下宿代わりに投宿した崎山旅館におすそ分けする。若主人の崎山寛宗さんの忠告「干潮の時間を見て行きなさい」。

児玉敏夫支所長、松井良祐庶務係長と私の 3 人は毎朝八重山支庁の上原農務課長に「ニイ・ハオ・ユー（沖縄弁こんにちわ）と挨拶し経過と予定等の情報連絡をし、八重山農試に向かう。農試では新垣信行支場長が場長室を熱研に提供されたが床と窓だけ、机もなければ椅子もない。お茶でも飲もうとするがヤカンもなければ茶碗もない。第一水道がない。飲料水は屋根に降る雨水だ。貯水は砂などでろ過し、煮沸して飲む。ボウフラも泳いでいたが気にしない共存共栄だ。農試の職員は親切で協力的だ。圃場で獲った毒蛇ハブの電気コンロ焼きの珍味。農家が収穫物をパイン工場へ運搬するが道路に凸凹があり、トラックから完熟パインが落ちて割れる。いくつも拾うことが出来るが一個食べると甘味で舌が痛くなる。道路事情の楽しい副産物だ。

熱研圃場のかん水貯水プールの施設計画があり、熱研坂下の宮良川から取水するので川底砂層の厚さを調べよ、と大蔵省から要請があった。関係データもなければ計量道具もない。建築資材の直径 2cm 長さ 3m 程の鉄棒を押し込むことにし、支所長ら 3 人が膝まで水につかり「ヨイショ、ヨイショ」と、手のかわをむきながら 10cm も押し込んだのが限度。事情を知らせ作業中止。だが後がいけない。砂礫がガッチリ鉄棒を押さえ抜くに抜けず、あの鉄棒はどうなったのかなァ。

1971 年 9 月 21 日台風 28 号ベスが来襲。風速 42m、瞬間最高 60m とか。熱研宿舎はベスくらいには耐えうる設計だが、ベスの物凄い猛威には野菜市場の漆喰の大屋根を隣2軒越えバス通りまで仰向けに飛ばしたり、児玉支所長宿舎の雨戸収納袋は、斧で打ちあけられたような傷跡等々その強さを例記したらきりがない。だが忘れられない出来事がある。4 日前に引っ越してきたばかりの宿舎向かいの島の住人、底原英智、野原秀信両家の家族 6 人が私の宿舎に避難してきた。愛妻の暴風恐怖の様を見て、話題はもっぱら島の行事と風俗習慣、愛妻は怖さのため腰を抜かしてワナワナ、トイレにもハイハイ状態。島の両家のやさしい気配りは私どもを力強く支えてくれた。どちらが避難し慰められたのやら。これが機縁で文通は勿論、人の往来が現在も続いている。美しい八重山の海と空、まん丸の大きな月と降るほどにおおい被さる多数の星、加えてやさしい人情味豊かな歌と踊りの島、八重山の発展を心から祈願して、アワモリで乾杯？

2・1／2回の奉職

古川　義己

創立30周年おめでとうございます。私にとって「熱帯農業研究センター」は、出身の九州農業試験場と共に、特に愛着のある機関となっております。私が熱研センターに奉職させて頂いたのは、1 回目は 46 ～ 47 年度に沖縄支所建設部隊の一員としての会計係長、2 回目は 61 年

度に庶務課海外服務専門官、そして1/2回とは40～41年度の技会事務局総務課総括班国際協力係（新設→現国際研究課の前身、初代係員）であります。今回は、熱研センターの胎動期からの思い出を書ける数少ない1人としてペンを執らせて頂きます。

40年4月1日に国際協力係が新設されるにあたり、私事ながらその頃勉学中であり、又、4月25日に結婚式も控えており、職業の少ないであろう国際協力係を希望して配置換して頂いたのですが、あにはからんや、5月頃からその後の「熱研センター」を新設しようとの案が出て、更には、41年度予算に要求することとなり、それからが公務員生活で最も多忙な体験を味わうこととなりました。

国内に本所（出来得れば無霜地帯に）、海外に5カ所の支所（記憶では、タイ・マレイシア・フィリピン・インド・当時のセイロン）を置き、定員は数百名という構想で、支所を含めた施設の要求まで、当時としては「億」単位で大蔵省に要求しました。要求にあたっては、まず、局内の段階から日に日に構想が変わりその度に積算し直しながら、片や本務である国際協力係の仕事（当時、年間30名強の個別受入、30名強の海外派遣、稲作コースの受入れ、日ソ農業技術交流等）をし、特に、海外出張は現在の専決処理がなく、従って原則大臣決裁であり、殆どが少なくとも事務次官まで持ち回り決裁でした。「芸は身を助く」ではありませんが、農林省合唱団に入っていたお陰で、大臣官房の要職「付き」の女性の方殆どが合唱団のメンバーで、本来ならば待機して決裁を受けなければいけないのを、効率良く決裁を受けることが出来、その間、他の仕事が出来たことでした。このような状況下で、当然のことながら、星出さんから『新婚さん、最終電車に間に合わなくなるぞ』と言われるまで、それは息をつく間もない程の忙しさで、勿論、毎日が残業でした。新婚生活は北本の2軒長屋の9坪官舎で、北本駅から途中しばらくは舗装されていましたが、その先から北本官舎までの道には砂利ではなくまさしくこぶし程の「石ころ」が敷いてあり、通常の自転車では青年の私でさえ踏めるものではなく、今では余り見かけなくなった荷乗せ用の大きなタイヤの自転車で約6キロの道程を踏み毎朝毎晩通勤し、足腰は至って強くもなり、お陰様で直に長女に恵まれました。

話がそれましたが、大蔵省との折衝の段階では「大東亜共栄圏」の話も出るなど、海外に国の研究機関を新設するのは時期尚早であり、又、海外技術協力事業団との調整も図る必要がある等の理由から「新設」は認められなかったものの、その当時としては破格の「調査費3,800万円」の予算化が図られました。当時の久宗局長が、机で仮眠していた私を『3,800万円もらってきたぞ』と喜んで起こして頂いたのを今でも思い出します。翌年になり、「熱帯農業管理室（準備室？）」が発足し熱研センター新設への準備体制が整備されることとなります。

国際農林水産業研究センターの益々の発展を祈念しながら、取り留めのない思い出話のペンを置かせて頂きます。

熱帯農業研究センター最後の5年間

真木太一
在籍：1988年10月～1993年9月　環境資源利用部
現在：愛媛大学農学部

熱研を離れて7年になります。私は現在、愛媛大学農学部で新設の大気環境学研究室に所属して研究・教育に携わっています。実は、熱研には当時新設された環境資源利用部へ昭和63年10月に四国農試から異動しました。その新設部は農環研の環境資源部と区別するため「利用」が付いたそうですが、現在は同じ名称の環境資源部となっているとおりです。昭和63年10月に赴任しますとNo.11研究室（6階中央部北側の端、後で部屋換え）は机と椅子のみでした。その椅子が極めて堅く、私はその椅子で昼食後に休息をとる習慣でしたので、お陰様で腰を痛めてしまい苦労しました。当初は原因が不明でしたが、椅子が原因であることが分かりました。それで居室の椅子は堅いので当時の部長に少しソフトな椅子を買ってもらおうとしましたが、駄目だというので、実験室のなんと普通の椅子がソフトであるため、それと交

換して使っていると、やがて良くなりました。

さて、「乾燥地の水動態・土壌特性の解明」の研究を行うことで、まずエジプトに北村さん（現：鳥取大）と調査に行き、研究対象場所としては不適当との報告をしました。一方、他の人達の中国での2回の調査によって、最終的に中国の新疆生物土壌沙漠研究所になりました。ところが、都留所長が調印に出かける直前になって、例の天安門事件が6月4日に発生して、延期になり、翌平成2年の年度末ぎりぎりに調印されスタートしました。

第1期は「環境保全」（平成5年3月までの3年1ヶ月間）、第2期が「環境資源」（平成10年3月までの5年間）を実施しました。その間12回（14～54日間毎）出かけて、乾燥地トルファンの沙漠気候（10気象要素）の特性解明、防風林・防風ネットによる気象改良・緩和効果の評価、砂丘の移動調査、沙漠化状況の調査、風食状況と草方格による防止法などの研究を行い、原著論文20余編、その他100余編の雑文を書きました。また、著書としては、砂漠の中のシルクロード（新日本出版、1992）、砂漠緑化の最前線（新日本出版、1993）、中国の砂漠化・緑化と食料危機（信山社、1996）、緑の沙漠を夢見て（メディアファクトリー、1998）などを出版しました。

熱研から農研センターに異動したのは、丁度、熱研から国際農研に変わる日であったため、表題の熱研最後の5年間と言うことです。熱研に5年とはかなり長いようですが、不満は色々あった割に研究面では有意義であったと思っています。と言うのも、第11次南極観測越冬隊（昭和44～46年）で南極で研究した時に、次は沙漠と思っていたので、それが実現したことが一つの理由だと思います。最後に南極と沙漠の共通点は何でしょうか？それは降水量が少ないことです。

追加として、平成12年度より科学技術庁「風送ダスト」プロジェクトの「地表面条件と風送ダストの関係解明に関する研究」を杜さん（現：農環研）との共同研究で中国の敦煌で始めます。従って、中国沙漠との関連は続きます。

熱研に3度勤務して

松　本　省　平

在籍：1967年3月～　熱帯農業技術研究業務室
1968年4月～熱帯農業研究管理室
1970年6月～1972年3月熱帯農業研究センター　研究部
1974年10月～1975年9月熱帯農業研究センター　研究部（九州農試より併任）
1985年5月～1988年3月熱帯農業研究センター　企画連絡室長

最初は熱帯農業研究の長期在外研究員の第1陣として、当時のセイロン国（後にスリランカ）のペラデニアにあった中央農業研究所へ昭和42年3月から2年間の予定（後に1年延長）で今井隆典氏と同時に赴任した。それまで研究していたアジア各国の稲作地域における稲のいもち病の菌系のセイロンにおける研究を実施することが目的であった。判別品種として、国際判別品種、日本判別品種と後に選択したセイロン判別品種を用いて、全国から採集した300余の菌系を供使して20数種の菌系を類別した。当時はあの有名な高収量品種のIR-8が導入された直後でこの品種を侵す菌系がすでに出現していた。中央農業研究所に蒐集されていた500種余のセイロンの在来品種のコレクションにこれらの菌型を接種して抵抗性により品種を分類し、これからセイロン判別品種を選抜して提案した。この在来品種のコレクションは玄米にして持ち帰り、農業技術研究所遺伝科のコレクションに加えられた。当時の熱研の長期在外研究員は受け入れ国によってその受け入れ条件がいろいろと異なっていたが、セイロンでは当時中央農業研究所に日本から派遣されていたコロンボプラン専門家と全く同様な外交官特権として、派遣全期間に有効な複数入国可能な査証、研究器材の無税輸入、個人用自動車や食料品の無税輸入等が認められ、大変に恵まれた条件を与えられたが、これらは当時の大使館及びコロンボプラン専門家のご支援の賜であった。私事にわたって恐縮であるが、

最初から新婚の妻と同行し、長男がセイロンで誕生し、これは熱研での海外の誕生第 1 子となった。昭和 45 年 3 月に帰国し、農業総合研究所の図書室を借りて、長期在外研究員の後方支援と筑波移転のため建物の設計案の作成に従事し、昭和 45 年 6 月には熱帯農業研究センターの設置に伴い所属換えとなった。

第2回目はフィリピンの国際稲作研究所の植物病理部長 S. H. Ou 氏のサバティカルリーブの間の留守役として赴任し、イネいもち病菌々型の検定を行った。当時国際稲作研所の報告では稲もち病菌の菌型は不安定で種々と変化し1病斑から沢山の菌系が出現するとされていた。この追試を行い、1 つの病斑から 10 以上の菌株を分離して菌系の検定を行い、これを数十病斑で実施したが、2 種の菌系が分離された 1 例を除いて他は全く同じ菌系と同定され、菌系の不安定さは認められなかった。滞在期間中には、現地の研究者に試験設計を渡し自らはほとんど手を下さず結果のみを得る研究者もいるという国際研究機関の実態や年に1回関係各国から研究者を招いて行う成績検討会等を経験した。

3 度目の勤務は企画連絡室長として、熱帯農業研究センターの運営を所長を補佐して行った。当時の熱研センターは熱帯農業プロジェクト研究、技術体系組立研究、アフリカ緊急海外研究調査の実施や基盤技術研究部の設置や環境資源利用部の要求等予算も定員も増加の一途をたどり、要求資料の作成などアイデアを求められうれしい悲鳴をあげていたというのが実状であった。また、それまでの海外研究の重視に加えて国内での研究を強化し、実験温室の建設や実験等の強化を図るなど成長の一途をたどった時期であり充実した体験を味わった。

思いつくままに

御子柴春夫

筆者は 1963 年から 5 年間、農事試験場で、OTCAの海外研究員の集団研修稲作研究コース及び農機具研究コースの2コースの研修を担当していた。その頃、講師を担当した研究室長の内、何人かは海外を経験していたが、多くの講師は海外の農業を書物以外に知るすべもなく、そんな状況の中で、日本の稲作研究及び農業機械研究の理論と実際を指導しており、筆者は海外研修員の持参した資料を基に、彼らから色々聞きだし、当時の熱帯圏の農業の現状をさぐりながら、彼らに理解してもらうための研修に努めた。こんな状況の中で、多くの講師は熱帯圏の農業振興の為には現地の現状を知ることが大切だという考えが一般的であった。

他方、OTCA は当時、日本の農業技術者を海外へ送りだし、技術協力を始めていたが、現地の農業を知らないまま、日本の農業技術をそのまま現地へ移転する協力が多くなったきらいがあると言われたものである。

丁度その頃、技会内に熱研準備室が出来、筆者は農事試験場在職のまま、インド中央農業研究所へ派遣された。当時のインドでは既に、USA からの研究協力を受け、トウモロコシ育種は組織的に大々的に進められ、ハイブリッド種は勿論、インド独特のコンポジット種も育成されていたことは帰国後報告したところである。

そんなインドで感銘を受けたことの一つは、乾季の最中、連日 40 ℃を越えるような暑さの中、ニューデリーの研究圃場ではトウモロコシが灌漑栽培されていた時のことである。そんな気候の時にデカン高原の中にある研究圃場へ出かけた。インド国内で飛行機に乗るのは初めての経験で、ニューデリーから、南下した。空からの眺めは乾季のことで赤茶色の台地が続いていた。ハイデラバードへ近づいてから、川の無い、干し上がった赤茶色の大地の所々に緑の円が見えてきたので、同行のブリーダーに聞いたところ、それでは地上で案内しようと言ってくれ、翌日その現場へ行ってみた。途中、畑という畑は総て枯れあがり、赤茶色の土壌が続いたが、突然トウモロコシが青々と育つ農場へ着いた。トウモロコシは充分に育ち、大きな雌穂を付けていた。その畑の中央には住家があり、そのすぐ脇に岩を裂いた石が盛り上げられてあり、その石の真ん中には一辺 30m もあろうかと思われる正方形の、深さ 15m 位掘り下げられた岩穴があった。その一方の壁には階段

づたいにパイプが下がり、その先にはジーゼルエンジンで動く揚水ポンプが備わっていた。ボーリングで掘った穴では水は出ないが、この様に大きく岩盤を掘り下げると岩の裂け目から水が出るのだと言う。それでも、隣の家で、深く掘り下げるとこちらが出なくなるので、また掘り下げると言うようなことを毎年続けていると言う。その井戸を中心にかん水の届く範囲だけ、円形にトウモロコシが育ち、上からみると緑の円が見えることが良く理解できた。ここで水の重要性を思い知らされた。

熱研在職時の思い出

三原武吉

私の熱研在職期間は2年2ヶ月、(昭和57年1月、中国農試から配置換えとなって59年4月1日付け退職まで)ここで有終の美を飾らなくてはと、至極格好のいい気持ちであったが・・・。さて、実務に入って見ると「熱研」は国内同一他研究機関とは違った海外熱(亜)帯地域へ派遣する研究員に関わる業務が集中的に行われている現況から、これが知見に乏しい私は戸惑いを感じつつ早急に事項別経過内容・問題点の摘出等爾後の対応に支障なきようその把握に努めた。以下印象に残る具体的事項をご紹介させていただきます。

私が着任した1月半ばの筑波地方は、春先とはいえ俗に「つくばおろし」と云う北西寄りの冷たい風が吹き、春はまだまだお預けといったところ、でもよく晴れた時にはどこからでも眺められる筑波山、瀬戸内と違った味わいを見せてくれた。在職中の生活の本拠地であった「桜村並木2丁目の宿舎から本所まではバスを利用、(再移転後は「榎戸」のりかえ蚕糸試間の往復通勤)。一日のバス運行回数が少ないため、その不便の解消は団地内各機関に亘る共通問題であり、増発を願って団地連絡協議会の統一要望として関係機関、団体等に対する働きかけを行ってきたが・・・・・。

昭和58年に至り、住み慣れた本所を明け渡し蚕糸試地区(6号団地)へ移転するという所員にとってショッキングな出来事である。52年に東京から移転し、落ち着いた研究活動が好発進の最中だっただけに驚きと緊迫感は拭えないものがあった。

聞くところでは「団地2新機関の再編に絡む移転」とか・・・。移転実行の決断に当たって中川所長から詳細にわたる中央情勢の動向、移転に関わる好条件の確保、熱研の将来像等々所員一同及び組合側への誠意を尽くしての説得により整然と再移転が行われたものと理解し、今もって所長の偉業は忘れることはできない。また、移転に際し終始ご苦労された会計課ご一同様に厚くお礼を申し上げます。

なんといっても熱研の大黒柱は、海外派遣研究員の双肩にあるといっても過言ではないと信じているが、しかし国内在勤者にとっては多発する事故を見逃すことはできない、従って帰国するまでの無事故を念願すると共に「事故防止対策」の確立に向かって従来より検討の積み重ねを行ってきたが、一層現地実情調査が必要であるとの担当係長の意見もあり、承認を得て研究第一部長に同行のうえ海外現地へ出張、帰国後文書による再調査を行いその結果資料を部長会議に付議、上部機関へ説明へと在外地の安全確保確立へ取り組んだ。

熱研は創設以来総務部の設置はなく、複雑多岐に亘る情勢への対応及び研究部への支援は不可欠であると従来に引きつづき設置法改正に向けて要望していった。以上記憶を戻しつつ、綴った小文です。最後に新組織に移行して本年で30周年を迎えることとなり、心よりお祝い申し上げ今後の発展・ご活躍をお祈り致します。

末筆ながら中川所長はじめ元熱研ご一同様に在職中のご指導ご鞭撻を厚くお礼申し上げます。

私の沖縄体験

宮崎尚時
在籍：1970年7月～1976年11月　沖縄支所
1993年3月～1997年4月　生物資源部

昭和45年、発足後間もない沖縄支所に赴任したのは、もう、かれこれ30年前のことになる。途中、沖縄本島で当時の藤田庶務課長に出迎えていただき、暑い日差しの照りつけるなか、二人一緒に「摩文仁ヶ丘」まで黙々と歩いたのが、つい昨日のことのように思い出される。我々の任務が単に支所建設に留まらず、復帰前の沖縄との架け橋になることであり、そのためには何よりもまず、沖縄の原点である「姫百合の塔」や「摩文仁ヶ丘」にお参りしておいて欲しいという藤田さんの強い信念から出たことであった。戦争のときの記憶がほとんどなく、歴史上の遠い出来事のように感じていた者にとって、アメリカ軍上陸とその後の悲劇は想像を絶するものであり、私にとって沖縄第一日はたいへん印象的なものとなった。これが最初の沖縄体験である。

翌日、飛行機が珊瑚礁に囲まれた美しい石垣島に着陸したとき、一転してここには那覇のような喧噪も、金網で囲まれた大きな米軍基地もなく、まるで別天地のように感じられたことが鮮明に記憶に残っている。当時、宿舎に使っていた島の繁華街にある旅館で、児玉支所長に会い、夜は開け放しで鍵をかけなくても大丈夫と聞いたときには、ずいぶん安心なところに来たと思ったものである。

児玉さんはとても自由な発想をされる方であって、地元の豊年祭や祝い事には率先して参加された。また、沖縄の各離島のことをよく知ることが肝心ということで、皆で手分けして沖縄のほとんどの島々を回った。このとき見た先島諸島の各地に今も残る琉球王朝の収奪のあとは、美しい自然に恵まれた島々であるが故に大きなショックであった。薩摩の収奪を受けて本島が先島に科した収奪はやむを得なかったものではあろうが、世の中の一番の弱者がしわ寄せを受けるという構図であり、このショックが二番目の沖縄体験であった。

その後、石垣島での生活にも慣れ、八重山支所にも友達ができ、石垣島の人たちとも知り合いが増えたとき、沖縄のもうひとつ別の原点が見えてきた。ここには時代に流されることなく、自分たちの生活を大切にし生活を楽しんでいる人たちが居る。この人々はむしろ一番強いのではないか。大きな渦のような流れは止めようがないが、そのなかで流されることなく、自分たちの生活を守っている。沖縄ではそのような生き方を実に多くの人から教えていただいた。これが、私にとって第三の沖縄体験である。農村宣教師として良い働きをされたバーベリー先生ご夫妻、有機農業を実践されている田盛ご夫妻等々、多くの方々に出会えたのはたいへん幸せであった。今、遺伝資源の仕事に携わるようになって、このような沖縄での体験や視点が、とても貴重に思われるようになった。

熱帯農業研究センターの思い出

村田伸夫

「師と友にめぐまれし日々を思ひ出づ梅紅に咲き染む朝」とお別れセミナーの黒板に書いて1993年3月に熱帯農業研究センターを去ったが、36年の公務員生活の最後をこのセンターの部長でおくられたのは幸いであった。他の場所では、おおむね部長と研究員の間に室長（時には科長も）があり、若い研究員との直接の接触の機会が限られていたが、私の場合は、直接研究の現場に触れ、切磋琢磨することができたからである。また、丁度このセンターが変貌を遂げようとしていた時期でもあった。

前任の西山岩男部長から引き継いだ新設の基盤技術研究部は、それまでの「研究は長期派遣によって海外で」という状態から、熱帯諸国の体制の進展に合わせて、国内研究をともない基礎的研究を行う方向に転換しようと

していた。

長期派遣では、工藤博がマレーシアでルーメン微生物の研究を進め、これに後で川島知之が加わった。ナイジェリアのIITAのカノ試験地におけるカウピーの研究には渡邊巌、寺尾富夫が相次いで現地に滞在し、国内で箱山晋が支援した。中野正明はCIPでバレイショの病害に取組んだ。友岡憲彦、後に江川宜伸のタイ国チャイナートでのVigna属マメの研究も成果をあげた。線虫の樋田幸夫、微量要素の渡辺久男もタイで活発に活動した。伊敷弘俊はエクワドルの高地で地下作物の細胞遺伝研究を進めた。

国内の比重が大きい課題としては長期派遣の村上敏文と国内の今井秀夫、横山正がタイ農業局と協力して進めた根粒菌の研究がある。新人の中島一雄に後に林隆治が九州から加わったタイ北部でのマイコプラズマの研究は協力研究の新分野を開いた。中島は後日この研究で学会奨励賞を受けた。新たに採用された高木洋子、篠崎和子ともにセンターに新境地をもたらした。ICARDAで業績を上げ待機中の稲垣正典、地下作物の加藤真次郎、雑草の高林実からも学ぶところが多かった。派遣職員として、松永亮一がICRISATで活躍していた。

記憶に残る旅行があった。野並章司事務官とともにアフリカを旅した時のことである。私は以前の国際原子力機関在職中も含めて幾度目かのアフリカ訪問であったが、野並氏にとってははじめてで、印象は強烈であったようだ。(実は事務官のアフリカ出張もはじめてであった。)厳しいスラムの現実を前に私は「ここには、一人ではとても住めない。けれど、愛するものたちといっしょなら暮らせるような気がする」と言った。すると野並氏がいわれた。「昨日、農家で粗末な泥の小屋ではあるが、親の小屋を囲んで、子供達の小屋がならび、孫の幼児が遊んでいるのを見た。私は親や家族を北海道に置いて、ひとりつくばに暮らしている。どちらが本当の生活かと思った。」

在職中、国際植物遺伝資源委員会の理事としてこの方面の知己を得たのもありがたかった。表記の短歌には別のバージョンがある。「よき秘書に恵まれし日々を…」というのだ。伊藤夏江、岡田悦子、鈴木ふじい、大平かなみの諸氏にも感謝している。

熱研との関わり合い

持田　作
在籍：1980年4月～1987年3月　研究第1部
現在：Santa Cruz, Bolivia

1974年1月放射性同位元素研修で、農業技術研究所（西ヶ原）クラブに宿泊していた小生（九州農試虫害3研、筑後市）は、農技研病理昆虫部長高木信一博士より「IRRI（国際稲研究所）の新プロジェクトーインドネシア・西ジャワ州・中央食用作物研究所・スカマンデイ支場（現在の稲研究所）に、昆虫学者として参加しないか。詳細は山田登熱研所長に会って聞け」と言われた。農技研裏手の農総研の敷地内に在った熱研で、18～20時頃までそのプロジェクトについて熱心に説明された所長は、もう真っ暗になった玄関まで若輩の小生を見送って下され、「頼んだよ！」と幾度も念を押された。この話を聞いた瞬間、小生は「お願いします」と即決。しかし、木っ端役人の常として、「帰場しまして、上司・家族と良く相談のうえ、後日返事申し上げます」と模範的？答弁をした。翌日夕方高木部長に、山田所長の説明内容を報告する為、再度農技研を訪れた。その時河野達郎昆虫科長に呼びとめられ、「高木部長から、IRRIプロジェクトに参加するように言われただろう。今直ぐ断って来い。君は熱研でスリランカに行くことになっている」と強い口調で言われた。それで、高木部長に会い、「二人が異なることを言われたら、私はどうすれば良いのですか？」と申し上げた。細かい経過は省くが、結局小生はIRRIを選び、農技研昆虫科からはその後長きに渡って「昆虫筋の意向に従わなかった」として、冷たい仕打ちを受けた。しかし、それを契機にIRRIという土俵の上で、スケールの大きい仕事をすることができて善かったと後悔したことはない。

74年9月（実際には10月）首都ジャカルタからジャワ島北海岸線を東へ121km行ったス

カマンデイに、小学1年生の長女、幼稚園の二女、生後4ヶ月の双子の長男・二男と家内とで赴任、79年12月15日までIRRI職員として滞在。当時支場は530haの敷地があったが、無電灯地帯に種子公社（3,000ha）と支場がポツンとあるだけ。専門家7人が居るはずなのに（インドネシア人支場長が大豆専門家を兼務）、外部からの専門家は赴任当時建築屋（ステーション・ディヴェロープメント）のフィリピン人夫妻と小生等だけ。身分は九農試からIRRIへの出向。九農試にしては初めて、市役所にしても外国へ住民票移動は極めて希なケースだったようで、関係者・申請者（小生）もその手続きの煩雑さに音を上げた。IRRI出向中、日本に帰国しても九農試以外行く所がないので、熱研職員でもないのに熱研に勝手に出入りした。それらの事情を察してか、梶原敏宏（JICAインドネシア・ボゴール・植物保護プロジェクト専門家、のち熱研研究第一部長、所長）・阿部登（熱研主研）さんから、「熱研に来ないか」と誘って下さった。それで、80年4月から（87年3月まで）熱研にお世話になった。熱研・つくばに来てみたら、その後再びIRRIへ出向・住民票を5年半抜くことも、スイスイと運び、筑後の苦労が馬鹿に思えた。熱研赴任時「君なら此処で十分働いてもらえる！」（岡部所長）、農研に移ると決めた時（87年初め）「熱研にいたければ、無理に出て行かなくてもいい。何とでもして断るから」（梶原所長）、「熱研職員の米の味指向性は特異的、日本米ではなく、品種ホンジュラス」（杉本勝男さん）、マラヤ農大で79年お会いした山田行雄博士（元熱研企画室長、当時京大教授）の「日本人にない発想法」、「生き字引」（三宅正紀博士）等印象に残る。ガンジガラメの組織から、自由な熱研に来て、目から鱗の感じ。熱研に籍を置きながら、熱研本来の業務をせず、IRRI業務に明け暮れた小生を快く（？）認めて下さった当時の熱研の度量の大きさに感謝している。

熱帯農業研究センターの思い出

本村 悟

私が熱帯農業研究センターに在籍したのは前後2回、通算で6年6ヶ月に及ぶ。最初は昭和45年2月から3ヵ年余、在外研究員として当時のタイ国米穀局技術部において共同研究に従事した。タイ国水田土壌の生産力解明を大きなテーマに掲げ、北タイ、東北タイ、中央平原、南タイと全土を駆け巡り、約200地点で断面調査と分析用の試料を採取した。中央平原にみられる塩基性硫酸第二鉄塩の藁黄色斑紋を特徴とする酸性硫酸塩土壌、そこに生育している水稲のりん酸欠乏の典型的な症状を観たときの感激、掘れども掘れども細砂の東北タイの水田、そこに生育している水稲はみじめなくらいに貧弱で、乾季には地上に噴出した塩を集めての製塩風景は今でも脳裏に刻まれている。この間、それぞれの地域特有の風俗・人情に触れ、古代遺跡に民族発展の道程を偲ぶことができた。バンコクでは熱研の独身寮ともいうべきブサボン・アパートメントで、夕餉の後、独身者の気楽さから時を忘れて、熱帯農業の現状と展望、熱研の研究の進め方、とくに国際協力か国際共同研究か、これに対する熱研の将来展望などを語りあった。かくして3ヵ年の在外研究はあっという間に過ぎ去り、名残を惜しみつつドンムアン空港を後にした。

第2回は、昭和54年12月から3年4ヶ月、企画調査部で勤務することになった。翌55年は熱研創立10周年に当たることから、記念行事の企画が最初の仕事となった。熱帯農研集報創立10周年の記念特集号の編集、創立当時から懸案となっていたシンボルマークの制定、記念式典での講演会、祝賀会等など。小倉武一先生は記念講演の中で「熱研は海外農林（水産）業研究センターに改めるべきです」と熱研の将来を展望され、深い感銘を受けたのを覚えている。現在、熱研は国際農林水産業研究センターとして飛躍的に発展しており、今昔の感に耐えない。

当時、熱研は技術会議の中でも十分に認知されておらず、総て国内法の枠内に縛られており、習慣や制度が異なり、生活環境や研究条件が厳しい熱帯での特殊な研究環境を理解して貰うのに技術会議国際協力班と口角泡を飛ばすの侃々諤々の議論は深夜に及ぶこともしば

しばであった。研究の内容、進め方、研究の評価、研究成果の情報化、それに伴う研究員や研究管理者の派遣計画などは勿論のこと、数次パスポートの発給、所長の海外出張の制約、熱帯圏以外への出張制限、家族同伴した場合の便宜供与など今では考えられない事項が議論の対象となった。

在任中の大きな問題は試験研究機関の再編整備に伴う庁舎の移転問題であった。観音台の地に建設されて10余年、建物の風格も備えてきた矢先の移転問題、なかでも、幾多の先人達が苦労して集められ、育てられてきた熱帯植物の円形温室をどうするか。苦渋の選択として現在地に移転が決定されたが、私は最終的な決着をみるまえに佐賀県農業試験場へ転勤となった。

「21世紀は農の時代」との認識が浸透している。熱研創立から30年、飛躍的に発展した国際農林水産業研究センターは農の時代を担う国際的な研究機関として益々発展・活躍されることを祈念してやまない。

新鮮な出会い

桃木徳博
在籍：1984年4月～1988年9月　沖縄支所作物導入じゅん化研究室
現在：北海道農業試験場畑作研究センター

つくば研究学園都市を基点とすると、沖縄支所はかなりの遠隔地に位置していたから、当時の仲間は研究情報の収集に苦労していた。今頃のように、メールやインターンネットが十分に使いこなせる時代ではなかった。他にもいろいろと研究環境は厳しかったが、未開拓の研究領域が随分残っていた。

〖研究レポートづくりの達人〗

赴任してすぐ、故・北村征夫氏と出会った。赴任早々、厚さ5cmもあるファイルを渡され、これを読んでくれとのこと。中を見ると、日本草地学会誌等の別刷りがぎっしり詰まっていた。50～60編のレポートが挟んであった。後で聞いた話だが、学会の事務局から「一度に沢山の原稿を出さないでもらいたい。あなただけの学会誌ではない」と提出しすぎるなと言う注文がついたそうである。レポート作りのコツを聞くと、①当時の草地、飼料作栽培研究では珍しい熱帯マメ科牧草を研究対象とした。研究材料に新規性がある。②栽培研究に牧草の消化試験を組み入れ、生産量と共にその質の改善に取り組んだ。先進性がある。③畜産振興の最中の沖縄の草地改良に熱帯マメ科牧草の導入に力を尽くした。地域への貢献も大きい。以上は、レポート作りには欠かせない要件であると誰もが知っているが、なかなか実行できない。北村氏は余人をもって換えがたい才能の持ち主であった。

〖植生を利用した野菜の導入〗

当時、沖縄では夏野菜の種類が本当に少なかった。本土から野菜の移入は多かったが、夏季は台風銀座の異名がある通り、離島では船がよく欠航し頼りにできなかった。そこで、無謀とも思える夏野菜の導入計画を実行。沖縄の植生は夏期間、ちゃんと生きている。野菜も植生と類似した適応のしくみを持っていれば、瑞々しく、すくすくと育つに違いない。沖縄の植生や落葉調査法を習い、慣れない手つきで適応性の調査開始、3年がかりで仮の結論に到達。その結論をもとに、沖縄の植生と類似した適応のしくみを持つ植生は何処にあるか。世界の植生図を見ながら、「このあたりかな」と眼を付け、データで確かめ、マレーシア・ボルネオに探索。240余点の野菜を導入、評価研究を行った。殆どの野菜が沖縄の夏でも十分育った。サヤインゲンは最近、「ハイブシ」という品種になった。植生を利用した作物導入の実施は「自然と対話」しながら作物の生きざまを知る面白さを教えてくれた。

〖優しい仲間〗

業務科には、地元の人が多かった。7月は収穫の季節、豊年祭の季節。集落ごとにお祭りがある。私ども職員も大浜町の豊年祭に毎年参加した。一ヶ月前から、昼休み踊りの練習。当日はハッピ、白足袋姿の正装で参加。気恥ずかしい思いもしたが、隊列を組んで人前で踊り、神様に奉納した。広場での祭りが終わった後は業

務科の方が、毎年交代で宴を設定、大宴会。午前様になって宿舎に帰った。本土から暑い沖縄に来ての仕事、大変だろうと慰労して頂いたのだと思うが、なかなか出来る話ではない。有り難うございました。

行きは怖くて帰りはよいよい
―熱研スリランカ時代の記憶―

森田弘彦
在籍：1984年10月～1987年3月 研究第1部
現在：農究センター耕地利用部水田雑草研究室

北海道農試に配属されて14年半、他場所への異動など考えもしなかった私に、スリランカに行くために熱帯農業研究センターに転勤する話が来たのはまさに晴天の霹靂でありました。「仕事のことは余り考えなくてよい。」、「相手機関には日本語の分かる人がいるので、英語はできなくてもよい。」と詰められたため、ついに断る理由がなくなったためでした。1984年10月に桜の古木のそびえる常磐線牛久駅に降り立ち、タクシーに「熱帯農研まで」と言ったものの「知らない」と言われ、行く先の厳しさを感じたものでした。何とかたどり着くと、居室の先輩は、私に運転免許がないことを知るや否や「海外では何はなくとも運転免許！」と、瞬く間に私の自動車教習所通いの手続きを決めてしまいました。「現地にやってから免許を取らせればよい」との意見も上層部にはあったようですが、無事に国内で免許を取得して、前任のY氏に伴われてタイ経由でスリランカに出発したのが1985年1月のことでした。Y先輩は私の滞在に必要な諸条件を実に手際よく整え、1ヶ月後にコロンボ空港から帰国されました。Y先輩の乗った飛行機が離陸すると、「英語もわからない人間を一人残して帰るなんて、何て冷たい！」と本気で思い、涙さえ浮かんできたものでした。熱研の海外共同研究の出発点で、多くの分野で多数の長期在外研究員の活躍されたスリランカでしたが、当時はすでに稲の栽培に関する分野のみで、他分野は引き上げた後でしたから。

スリランカでも外国人が長期に滞在するのは初めて、というCentral Rice Breeding Station (Bata1agoda, Ibbagamua) の宿泊施設の1室を根城に、「水稲短期品種の収量安定要因の解析」という研究課題をスタートさせることになりました。一帯は緩やかな起伏の続く平坦地で、ココナツ園の間に水田が広がる純農村地帯で、試験場もその中にあり、朝夕に稲を見ることができる、という恵まれた条件にありました。稲作の研究をするのには大変に適したバタラゴダの試験場で生育期間を異にする稲の試験研究を開始したわけですが、当時各地で発生していた「不稔現象」の解析がスリランカの関係者から要請されました。この問題は出発前から話題にあがっていて、相対的な低温が要因ではないか、とも言われていましたが、「熱研の研究としては低温問題はどうか」とされていたものでした。この「不稔現象」は現地語のシンハラ語で「Ehara Pussa（8月の空籾）」と呼ばれるほど古くからある現象だとのことで、取りあえずこの現象の発生した現地に行って、材料を集めることから始めました。北海道で培った「不稔籾は開いて中身を確かめる」経験を適用して、最終的にはこの現象の大部分がタイワンクモヘリカメムシと稲籾枯細菌病によることを確かめ、前者は熱研の害虫研究の先輩が引き継いで下さいました。一方、ゆっくりと流れる時間を持て余した結果、そこら中の植物をスケッチして「スリランカ植物雑記帳」にまとめました。これはJIRCASの図書室に置いて頂いています。

初めての長期の海外生活で、現地の方々や熱研の皆さんに大変にお世話になりました。「海外アレルギー」を逆療法で直して頂いたことに今でも深く感謝しております。

タイ農業局稲病害研究室　1978 ～ 1981

守中　正
在籍：1978 年 6 月～ 1981 年 4 月　熱帯農業研究センター研究第 1 部
1986 年 4 月～ 1988 年 1 月　熱帯農業研究センター調査情報部

1978 年 9 月、「熱帯アジアのイネ及びマメ類のウイルス病に関する研究」プロジェクトの一員としてタイへ派遣となり、バンコク　バンケンにあるタイ農業局稲病理研究室で、イネウイルスの研究員グループと机を並べた。稲病理研究室は菌類病、細菌病、ウイルス病の 3 グループに分けられていて、ソムキッド室長以下 20 人ほどの室員がいた。ウイルスのグループは、研究員が 3 人と助手 1 人、雇 2 人で、男性はメティーさんだけだった。メティーさんは私より一回りほど若いが、気配りのきく人柄で、稲病理研究室の番頭的な役割りをしており、全体の面倒もみていた。メティーさんは私が加わって男性の仲間ができたこともあって、共同研究者として、また個人的友人としても親しく付き合うことになった。祭日の連休に、チャンダブリにある彼の実家のタンブン（法事）にさそってくれ、家族と数日を過ごしたこともある。20 年以上経った現在でも、折りにふれて近況を伝える手紙のやりとりが続いている。

当時、東南アジア各地で、イネラギットスタント病が多発していた。私たちは、この病気を中心に、媒介昆虫トビイロウンカを飼育し、保毒虫の検定、イネの発病と媒介昆虫の発生消長を調査し、イネ品種の抵抗性の検定をした。

圃場試験は、バンケンの場内水田だけでなく、バンコクの北方約 180km のチャイナート試験場でも、病理のタワットさんの協力で圃場試験を行い、メティーさんと毎月一泊で病害発生調査に行った。途上国の研究者は圃場に入らないと、よく言われていたが、メティーさんたちは、どんどん水田に入って、調査やサンプルの採集をした。

私たちはチャイナートで、非常に矮化したイネを見付けていたが、これが新しいウイルスによることを、ウイルス研大村氏たちが確認し、ゴール・ドワーフと命名した。

この発見は、このプロジェクトの大きな成果である。マメのウイルス研究グループも、ウイルスの新分布発見などの業績をあげた。このプロジェクトでは、タイ農業局に電子顕微鏡、超遠心機を含むウイルス研究用機器を設置することが、もう一つの仕事であった。当時としては、充実した研究装備の一式であった。機器の受け取りには時間がかかったが、完成した時には、ラーク病理部長の挨拶にプラコフ農業局長と五十嵐熱研代表のスピーチ、テープカット等のセレモニーをした。

2年7ヵ月の滞在を終えて帰国するとき、ゴール・ドワーフの写真を表紙に稲病理研究室全員のスナップ写真を配置して仕上げた大きいカードを、プレゼントしてくれた。これは私の宝ものとして、今もリビングルームの棚に飾ってある。

異文化に刻まれる技術と経営

諸岡 慶昇
現在：農業研究センター農業計画部

熱研や JIRCAS から海外に派遣され、そこで生活を始めた経験のある方は、日本とは異なる他国の文化や慣習に驚かされたり、これを新鮮に感じることが少なくないだろう。農業経営という専門分野は、マクロでは国や地域、ミクロでは集落を単位として、そこに住む人々と農業技術と経済のメカニズムをときほぐす学問であるが、社会や人間の在り方の違はこの時に大きな相違となって立ち現れることが多い。事実、東南アジアの数カ国に暮らした経験からも、近隣諸国でありながら、それぞれの独自で多彩な文化に眼を奪われることが多かった。

今、私の手元には『北馬双報』という冊子のコピーがある。このガリ版刷りで手書きの冊子は、1968 年 6 月の創刊号から 15 号まで続いたもので、当時の農林省熱帯農業研究管理室から

マレーシアの北部に派遣されていた永井皐太郎、杉本勝男両氏が、現地のホットな話題を発信されていたものである。派遣先の試験場の近況報告や日程、感想やマレイ社会の紹介、短歌や俳句といった盛りだくさんの内容は、同人誌のような趣があり、この冊子をみると当時のマレーシアと日本の農業共同研究の様子が生き生きと伝わってくる。中には当時アジア経済研究所から派遣されていた堀井健三氏の調査ノートや、京都大学の研究プロジェクトを教導された口羽益生氏がマラヤ農村への深い洞察を加えた論考が寄稿されている。周知の通り、お二人は東南アジアの農業・農村社会研究の第一人者である。こうした盛りだくさんの『北馬双報』をひもとく時私がいつも感じるのは、永井、杉本氏やこれに寄稿した人達の、異なる文化に対する素直な驚きと好奇心である。そして、外国人の観点からとはいえ、これらがマレイ農村に暮らす人々への深い共感にもとづいているように思える。

社会科学の分析には、時代性、階層性、地域性の全ての視点が必要である。時代性とは、歴史や経済の発展過程で分析対象国の人々や我々がどこに立っているかを示すものであり、また階層性とは狭義には経済階層を指すが、広義にはそこの社会に住む多様な人々の命をめぐる力関係といってよいだろう。地域性とは、生態系や社会経済の相違に根ざした生産や消費行動の多様性を示している。こうした観点が必要であるといわれながら、いったん開発途上国との関係になると、得てして経済の発展段階や先進国からの進んだ技術の移転というところに眼がいきがちで、異なる文化や慣習の中に内在する地域に伝統的で固有な技術を過小評価したり、社会慣習を必要悪と見なしがちである。

経済や技術だけで社会が豊かになり人々が必ずしも幸せになるわけではないことに、20世紀を生きた同朋は薄々気づき始めたようである。もちろん、私は技術や経済の力が今後も重要なファクターであり続けることを否定しているわけではない。ただ、異なる他者の価値観に対する許容力をどうも忘れてしまいそうになっているのではないだろうかと、『北馬双報』の時代を振り返ると感じるのである。ポール・ラビノーという米国の文化人類学者が、異文化の理解とは、他者の理解という迂回路を経ることによる自己の理解であるという言葉を残している。異文化に対する観察と理解は、自己に対する洞察をともなってはじめて叶うものではないだろうか。外国人が異なる文化の社会において調査研究を行うということは、アプリオリに自国の文化的背景や各自の価値観を背負っていることを、研究者は今また改めて問い直すべきではないかと思う。多くの国との間で共同研究が行われ、また科学の面で一見国境が見えなくなっているように錯覚しがちな今日でも、異なる文化をもつ国々の多様性を、技術と経営を介し比較考察する意義は一層大きくなってきている。

家族赴任の泣き笑い

八木忠之
在籍：1977年3月～1980年3月
現在：北陸農業試験場

はじめに

私は1977年3月～80年3月までの間、研究第一部に在籍しタイ国農業局に派遣された。研究基地は稲作研究所（Rice Division）であった。目的は、中央平原に広がる酸性硫酸塩土壌に適応する稲品種の育種法の開発である。前任の浜村邦夫さんが浮き稲で成果を上げておられたので、それを補完する意味もあり、酸性土壌下での品種間差異を発見された小山雄生さんの成果を育種に生かそうとのねらいであった。折からIRRIでも問題土壌対策への取り組みが始まり、国際的な関心をもたれた課題であった。

家族で赴任して

私の場合は家族で赴任するのが当然と考えていた。前任の浜村さんを含めてそれ以前の周りの熱研派遣者はほとんど家族赴任だったからである。子供も5歳一人だったので単身など考えもしなかった。結果は大正解、で家族共々楽しく過ごすことができたし、第2子にも恵ま

れた。バンコックにある同じアパートの久保田徹さんや鈴木正昭さんから、タイ国内での生活指導をしていただき楽しく過ごすことができた。カウンターパートが仏門にはいるというので、儀式を間近で見学させてもらったり、近くの友人の結婚式や突然の悲しい葬式など様々な異国の生活にふれることができた。

子供のつきあいを通じて熱研以外の日本人ともつきあいが多く、しばしばタイでの生活の難しさ、怖さを教示された。しかし、我が家族は怖い目にあったことは一度もなかった。家内も一般のバスに何度も乗ったが、いつも親切にしてもらい席を譲られたこともたびたびだった。

また、タイ料理を家族で楽しんだことも思いで深い。外食では足りなくて家庭でもよくタイ料理を作った。トムヤムクン、ヤムヌア、ヤムブンセン、ソムタムなどはしょっちゅう作っていた。外食ではシーコームートート、ヤムホイクレンなどが定番で、特に後者の赤貝のヤムは生なので、危険を冒すスリルも加わったのかとても懐かしい。我が家では、そのうちいくつかを今でも月一ぐらいで作っている。最近は原材料が手に入りやすくなったのがありがたい。バンコックには中国人も多いせいか中華料理もうまかった。中でも鈴木さん紹介の北京ダックは特にこんなことがあっていいのだろうかと思うほど安くうまかった。そのとき出された漬け物とともに思い出すだけで頬がゆるむ。

タイにおける熱研チームは、全家族がよく会合し、まとまった雰囲気があるため違った専門分野の方々と親しくおつきあいさせていただき、私にとって貴重な財産となった。家族にとっても、子供の教育も含めてよい体験ができたと思う。会合では必ず歌がでて、八田さんは椰子の実、五十嵐孝典さんは海軍歌、久保田さんは千曲川旅情の歌、鈴木さんはダヒルサヨ等々、私は高田の四季だったと記憶している。

研究者として

熱研以前は、北陸農業試験場に新卒で入って以来10年居た。水稲の育種及び育種法の研究をしていたが、論文の書き方などほとんど経験がなく、研究者としては半人前はおろかほとんど素人であったように思う。タイ国に派遣され、時間的な余裕ができたせいもあるが、代表の八田貞夫さんをはじめ熱研の諸先輩、特に梶原研究部長に図表の書き方や英語の論文など指導をいただき、ようやく研究者になれたような気がする。

カセサート大学に隣接した稲作研究所にデスクがあった。私自身はがんがんクーラーをきかした部屋で、電卓用の分散分析ソフトを作ったりしたこともあったが、大先輩の高橋治助さんがクーラーなしの部屋で頑張っておられて、Dr. Ben Jacksonとタイ語で掛け合い漫才をされたなどのように、在タイ熱研メンバーの間にはタイにとけ込もうという雰囲気が強かった。現地試験は酸性のマイルドな Khlong Luang 試験場と酸性に強い Ongkalak 試験場の 2 カ所であった。思いっきり多数の品種を、観察用の木の橋を造ってもらった広大な圃場でスクリーニングすることができた。その結果、Khao Dawk Mali 105 を適応性品種として選定でき、育種法も提案できた。Khao Dawk Mali 105 は読んで字のごとく香り米で純系選抜品種である。インド型品種の中ではアミロース含量が低く多少粘りがあるためタイ国滞在の日本人などに好まれ、高値で取り引きされている。熟色が大変きれいでジャポニカに近い感じがする。耕地が開発され汽水域地帯も乾陸化が進行するとさらに新たな酸性土壌が生まれる可能性がある。またこれらの適応性品種は土壌に吸着された燐酸を効率よく吸収するようであり、限られた燐酸資源の効率的活用にも生かされるものと思う。

おわりに

赴任した時期が前任の浜村さんとタイで重なるようにとの配慮から、3月になった。これは赴任事務に当たられた方々に多大のお力添えをいただいたことと思う。また、途中で父を突然なくし急遽帰国させていただいた。代表の五十嵐さんには関係筋を付き添って回っていただき、JAL の配慮もあって書類全くなしの緊急出国で帰国できた。その後も同様に研究を継続することができたことは、関係された多くの方々の配慮によるものと心から感謝いたします。今から思うと若気の至りで赤面すること多々ありですが、若いからこそ熱研やタイの方々のおかげで3年間やってこれたと思い、感謝いたします。

ゾーリ氏が見た共同研究30年

安延 久美
現在：農業研究センター経営管理部

ゾーリ・アハマッド氏（50 才）は、マレーシアのムダ地区マタンピナン村に住む農民です。彼はグループ・ファーミングの中核農家で、稲作の仲間や農業普及員との連絡を取るために、舗装されていないガタガタの赤土道路（タナメラ）を小さなオートバイで走りまわり、また朝早くから請負仕事の草刈りにでかけるという働き者です。その上、小さいながら自作地である水田圃場の見回りを毎日決して欠かさず、渇水でダムの水が止まりそうだと耳にすると数十キロある山奥のダムまでひとり観察にでかけ、トビイロウンカの発生を早くに知るためにタライに油を注いで圃場に置いておく創意工夫をし、新しい品種があると聞くと分けてもらって試作するという篤農家でもあります。このゾーリ氏が毎日のように通る農道から、シルバーハウスを見ることができます。シルバーハウスは熱研とMADAとの共同研究圃場の呼称で、機材置き場が銀色のトタンでできていたことからその名前がつきました。

日本からマレーシアへの専門家派遣が始まったのは1958年のことです。当時独立間もないこの国に、水稲二期作品種の育成のために専門家が派遣されマリンジャやマスリといった後世に名前を残す品種が開発されました。また水稲栽培、土壌、病害虫、農業経営の専門家が現地で試験研究・指導にあたり、そこから当国の農業研究を担う多くの人材が育ったことは広く知られています。コロンボ計画下の一連の成果は、1970 年代から特に栽培学と農業工学分野を核とした研究協力として熱研・JIRCASへと引き継がれ、その後もムダ稲作地域での共同研究は形を変えながらも今日まで続いています。

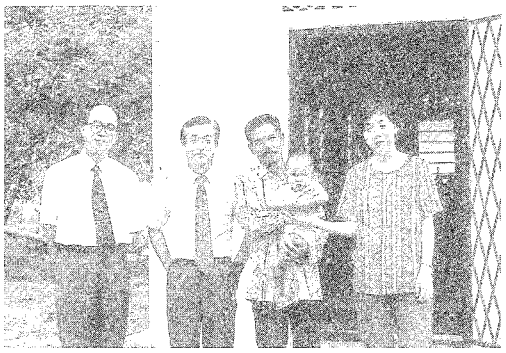
さて私がゾーリ氏に初めて会ったのはムダ地区のグループ・ファーミングの調査を行った1990年です。その後彼は、1995年から1年間毎日労働時間と現金収支の記録をつけるという農業経営の調査研究に協力してくれました。現在でもこの地域の正確な農家経済のデータはほとんど無いといってよく、その記録によってはじめて稲作農家の就業や農業経営の実態、農村生活の一端を明らかにすることができました。何の対価も期待せずに、一日も欠かさずに1年間記録をつけ続けてくれたゾーリ氏のモチベーションは何だったのでしょうか。ゾーリ氏は協力を少しも惜しまず胸襟を開いてくれ、快く村や家に迎えてくれました。また経営記録をつけることによって改めて自分の経営が客観的にわかるようになってよかったと言ってくれたことも、嬉しい思い出として印象に残っています。しかしお互いの国の言葉も十分に話せない上での信頼関係は、私ひとりの努力では決してできなかったものだと思います。

ゾーリ氏は、30 年の間ずっと見てきたのです。日本人の研究者達がシルバーハウスの圃場で汗だくになってイネの調査をしている姿や泥まみれになって計測をしている姿、炎天下や土砂降りの中でも一戸一戸の農家を尋ね歩いている姿を。試行錯誤の繰り返しであったり、仮に思ったような研究成果ではなかったとしても、そこで苦心する日本人研究者達それぞれの人間の生き方をゾーリ氏は見ていたのではないでしょうか。それがゾーリ氏やその他多くのマレー稲作農民にとっての日本だったに違いありません。私は共同研究の成果って何だろうと考える時、彼がいつも「TARCは今度いつムダに来るのか？」と尋ねていたことを思い出します。そんな時に30年もの長い間の数多くの研究者達の小さな小さな積み重ねが農家の心に届いた時に、これがはじめて共同研究の財産となっていくのではないかという思いを強くするのです。

帰国して数年がたったにもかかわらず、いまでもゾーリ氏は力強い筆圧の鉛筆書きで、「今年の収量は結構よかった」と作況を知らせる手紙を送ってくれます。マレーシアだけでなくきっといろいろな国にゾーリ氏のような農家はたくさんいるはずで、じっと私達の様子をながめているに違いありません。これからの共同研究は、各地のそれぞれの「ゾーリ氏」との信頼関係をどのくらい作っていけるのでしょうか。世界各地のJIRCAS調査研究サイトで、それぞれの「ゾーリ氏」と日本人研究者との友情

が確かに育まれるような共同研究の歴史が、これからどのようにできるのか楽しみだと思います。

写真説明：ゾーリ氏（右より2番目）とJIRCASスタッフ



思いで

山口武夫
在籍：1982年9月～1986年3月
1988年10月～1993年3月
研究第1部・企画連絡室・研究第2部・研究第1部

私は、昭和56年9月から昭和61年3月までと昭和63年10月から平成5年3月までの二回約10年に亘って、熱研に在籍しました。この間に会った出来事を通じて、熱研という組織が政府機関でありながら、柔軟性を持ち、臨機応変の対応が出来た機関であったと感じています。何故そのように感じたかを幾つかの例を挙げてみたいと思います。

昭和58年9月の国際シンポジウムはAVRDCとの共催で約100名近い外国の研究者が参加されました。そのエクスカーションの時、エジプトからの参加者が心臓発作を起こしてしまったのです。エクスカーションを案内していた熱研の研究者は、先ずその人を病院へかつぎ込んで応急処置をしてから、シンポジウムの本部である企画連絡室（その当時は企画連絡室が担当していた）に連絡して参りました。普通の官僚組織であれば先ず本部にお伺いを立ててから処置するものと思います。熱研の方々は緊急に処置すべき方からすまして、いわゆるお役所の手続きはその後にと臨機応変の処置をとられました。

熱研の海外研業務を通じて最初で最後のことと思いますが、海外出張中の研究員が外国でお亡くなりになるという緊急事態が、1度だけありました。それは2月の初めで、その年度の海外派遣計画は大部分が実施されており、予算はごく僅かしか残っていませんでした。しかし、遺体引き取りのため遺族の方や担当部長の誰かを出張させなければならなくなり、そのための予算のやりくりをする必要が生じました。そのため、既に海外出張の予定であったヒトにお願いして、その出張を取りやめて貰って、これまた臨機応変の処置を執らせていただきました。

予算の執行、経常予算とプロジェクト研究予算で、特に海外派遣旅費と研究費については、本来ならば別立てに執行をしなければならないのですが、経常予算には海外派遣旅費が多く研究費は少ない、プロジェクト予算では海外派遣旅費は少なく研究費は多いと言う難点がありました。そこで、経常の海外派遣旅費で、プロジェクト研究の担当者を派遣し、プロジェクト予算の研究費を経常研究で海外に派遣されている人にも回すということを研究部長間で相談して、予算の執行を行って参りました。

以上の例はほんの一部にすぎないかもしれませんが、この様に柔軟に対処できたのは、熱研という組織が政府機関でありながら、海外対応、特に開発途上国との対応をその本務としたことから、生じたものと思います。国際農研と名前は変わりましたが、この様な柔軟性を失うことなく、益々開発途上国の農林水産業の発展に邁進していただきたいと願っております。

共に歩んだ熱研

横田一郎

私は研究機関の筑波移転に伴い熱帯農業研究センター（熱研）（現、国際農林水産業研究センター）に採用された一人です。入省当時、昭和49年5月農林団地建設の真っ最中で道路も整備されておらず、雨が降るとあちこちに水が溜まり、晴天の日は砂埃が立つ毎日でした。圃場は農業機械化公団により畑70アール、水田50アールの造成が完了しており、私はその管理をすることになりました。当時、熱研は東京西ヶ原に本所がありました。そのため私は技術会議事務局施設計画室筑波分室駐在として採用されました。ここでは、熱研の先発隊として異動されていた大野芳和技官と二人で、青刈作物やソルゴ等を栽培し地力増進に取り組みました。特に大変だったのは水持ちの悪い水田管理で、排水路を堰き止めて水位を上げる力仕事でした。この大変な時期に頑張れたのは、農業に従事してきた経験があったからと思っています。

その後、熱研の本館（現農業生物資源研究所本館）が完成すると同時（49年8月10日）に、私は本館に移動しました。引越しの日、お祝いにと大野技官と二人で一杯交わした夜、大きな雷鳴と共にどしゃ降りになったことが記憶に残っています。また、移動した当初の本館は湿気は多く朝夕全館の窓を開閉しながら、圃場管理をすることになりました。

昭和50年に入って圃場管理棟、円形温室および隔離温室等が完成、東京の本所から研究員が毎日交代で移転準備に来所することになったため、私には荒川沖までの送迎任務も加わりました。熱研の移転が完了するとともに、周辺の植栽が進められケヤキ、ヒマラヤスギ、メタセコイヤ、イチョウ等が植えられました。農林研究団地の中で最初に建設された熱研の円形温室は、1年後にひときわ目立つ存在となりました。中にはパパイヤ、バナナ、ハイビスカス、ヤシ等熱帯性の有用作物が生長し当時のそれは見事なもので、近郊近在の農協、各種団体の方々が年間数千人も見学に訪れ、職員はその案内に忙しい毎日でした。私ども業務科員は円形温室や圃場及び庭園の芝生の管理に取り組む日々でした。

昭和58年農林研究機関の再編により、こよなく愛した熱研は、現在の蚕糸・昆虫農業技術研究所（蚕昆研）と同居となり、圃場は蚕昆研の八幡台の桑園の一部を譲り受け、新たに水田と畑を造成し直すことになりました。水田の造成は表土を30cm剥ぎ取り、渡瀬遊水池から水田用土壌を移入して造成されました。その水田は昭和60年3月に完成し植え付けられたイネは、初年度にかかわらず見事な出来でした。この年は筑波科学博覧会が開催された年でもあります。

平成3年に上司・先輩の勧めで17年間共にした熱研から現農業生物資源研究所に異動になりました。帰ってみると、私たちがきれいに管理していた円形温室、芝生等の面影は薄れていました。元熱研育ちの私は、何とかしなければと思い業務の合間に温室の管理等をしてきました。

省みると研究機関の筑波移転からはや25年が経っており、円形温室の雨漏りは仕方がないかと思います。一方、当初植栽した樹木は大地にしっかり根を下ろし見事に生長しております。熱研の移転準備から圃場造り、圃場管理、緑地管理等に当初から携わってきた私には感慨深いものが数々あります。しかし、創立30周年と機を一にして、私は25年有余の長きにわたり勤務させていただいた職場を無事卒業することとなりました。皆さんのご指導と沢山の思い出をありがとうございました。最後に国際農林水産業研究センター創立30周年を祝うと共に、研究の益々の発展と国際農業への貢献を祈念します。

トアランでの思い出

和田源七

私がはじめて長期間に亘り海外生活を最初に送ったのがマレーシア、サバ州のトアランで、そこの農試で合計4年6¼月を、さらにその後1988年まで数回訪問し、熱帯農業の勉強を致しました。当地は非常にユニークな所で、少年時代に読んだ冒険ダン吉を思い出すような所でした。

当時、サバ州はマレーシア連邦を形成する一州で半独立国のようなものでした。赴任途上にKuala Lumpur（KL）でMARDIおよび半島の農業省に表敬をした後で親しい農業部の技師がサバで農業研究をするのに半島の農業省に表敬しても無意味でサバの農業省とは実務的に何の関係もなく、入国管理もKLでなくKota Kinabalu（KK）でしなさいと教えてくれました。さらに空港ではKK行は国際便で出入国管理と税関をクリアする必要がありました。さらに半島に行く時は再入国許可を得る必要があり、物資の移動も輸出入になるとの事でした。このように当時は二つの国のようでした。日本よりの研究資材の受入れ、出入国関係の業務一切は試験場の総務でやってくれるので助かりました。サバ州はその規模が小さいのでよその省の人達と顔なじみになるのが容易で、そのためには一緒に数回食事するか賭け事あるいは何か不道徳なことを一緒にすることです。そうすると何事も本音で話すようになります。当地はたて前と本音とがはっきりしている所で親しくない人とはすべてたて前ですので物事を処理するのはなかなか々大変なようです。ここでは何かの理由をつけては一緒に食事をするのかその前に賭け事をするのが日常です。これは当地は本当の回教徒が非常に少ないためです。試験場の技師の大部分は華人とカタザシ族ですので食事についての問題はありません。私が勤務している間に回教徒の研究者は1978年に半島より来たマレー人一人でした。その反面、マレー語のできる人が少ないのが短所でした。1979年に回教徒の農民が試験場見学に来た時、場内にはマレー語のできる技師は居らず（回教徒の技師は出産で休暇中）困りました。丁度その頃橘高さんが育種の手伝いに来ていましたので、彼に案内を頼みました。見学者は彼が西マレーシアから来ているものと信じていました。また農技研の服部さんがメイ虫の研究で当地に見えた時、出入国管理事務所から電話で、農業省の人だけが日本からきたMissのDr.と接触できるのは不公平である。是非こちらに連れて来いとの事で服部さんにImmigrationに行って貰いました。帰ってきた後彼女にその話をしたら道理でいろんな人が部屋に入って来たと言って笑っていました。私が赴任した翌年に火災があり、西マレーシアより来ている研究者がほとんど帰ったために私の負担が大きくなり、ココアおよびアブラヤシの部門も担当することになり、農園業者との接触も多くなりました。赴任後3年目のある日農園から引き抜きの声がかかりました。かなりの好条件でした。当地では農園等からの引き抜きが多く、私が帰る時には試験場で古い方から二番目となりました。

このように日本では考えられない面白いことが多々ありました。今となってはなつかしい思い出です。

台湾のサトウキビの土壌病害研究の思い出

渡邊恒雄

駐在期間：1972年4月～1972年10月

駐在場所　Taiwan Sugar Experiment Station, Republic of China

元農業技術研究所

現在：通産省工業技術院 生命工学工業技術研究所 複合生物系プロジェクト研究室

台湾での研究成果は、すでにその概略を報告（渡辺、1974）し、また研究生活についてもその思い出を最近書いた（渡邊、2000）ので、一部内容の重複はお許し願いたい。

台湾糖業試験所の要請に応じて1972年4月から半年間台南で生活し、サトウキビの株出し不良とそれに関わる亜熱帯産の土壌菌について研究し多くの知見と経験をした。病原菌の特定や分離した土壌菌の分類・同定には多くの時間を割くことができた。ここで得られた成果は、日本菌学会報上などで7編の論文となった。特にこの時見つけた新種のカビには、生まれて初めてHumicolatainanensisと命名したが、この菌株は今もアメリカ（ATCC 32917）とオランダ（CBS269.76、Microdochiumtainanenseに改名される）に保存され、菌学研究に役立っており、また成果の一部は土壌菌の図鑑（渡邊、1993；Watanabe, 1994）を作る際の基礎となった。

また当時知り合った台湾の研究者とは長い間交流が続き、研究生活に大いに役立ち、1984年台湾の植物防疫学会設立30周年記念大会に招待されもした。

帰国が間近にせまった9月末、田中首相による日中国交回復に伴い台湾との国交が突然断絶され、台湾国中には日本への不平不満が充満したが、個人的には何ひとついやな思いをしたことはなく楽しい思いでばかりであった。台湾滞在中専門分野を異にする多くの日本人と知り合えたのもここでの研究生活を一層楽しいものとした。

参考文献

渡辺恒雄　1974. 台湾のサトウキビの株出し不良を引き起こす病原菌について. 熱帯農研集報 27: 114－116.

渡邊恒雄 1993. 写真と図解　土壌糸状菌. ソフトサイエンス社.

Watanabe, Tsuneo. 1994. Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi. Lewis Publishers, Boca Raton, U.S.A.

渡邊恒雄　2000. 研究全録 植物病理学と土壌菌. ライフリサーチプレス.

大豆の不稔現象

渡辺 泰

在籍：1978年4月～1980年4月 研究第1部

私が熱研に在籍したのは1978年4月から2年余りの短い期間でした。熱研は、あちこちで槌音が聞こえる建設途上のつくば学園都市の農林団地移転第一陣機関として現在の生物研の研究本館へ移転したばかりであり、職場には進取の雰囲気がみなぎっておりました。

当時、熱研はタイ農業協同組合省農業局と連携し「熱帯における水田の高度利用に関するプロジェクト研究」（1973年4月～78年3月）を実施しておりました。私に与えられた在外研究の課題はプロジェクト研究サイトのスパンブリ稲作試験場に駐在し、水田導入大豆に発現していた不稔現象の原因を解明し安定栽培技術の確立を図る一方、プロジェクト研究で展開してきた業務を経常的課題へ軟着陸させることでした。

1978年9月に任地へ行き、前任者の原城隆さんに水田一面水稲で覆われた中にある大豆圃場へ案内され、莢の全くないものや大小さまざまの不稔莢を着けた青立ち状の大豆を見せられました。着任前は高温受精障害が原因だろう等といろいろ聞かされましたが、我が国でも知られているカメムシ類の吸汁で現れる、いわゆる板莢が見られたことから虫害が主因に違いないと直感しました。これに関連し、石倉秀次氏らの瀬戸内海地域のカメムシ類による大豆の不稔現象に関する詳細な研究報告（石倉秀次他。四国農試報 1：186. 1953）があることを知り早速、梶原部長に論文コピーの送付をお願いしたことを思い出します。

熱研の連携相手が農業局技術部作付体系研究室であったため、当初はプロジェクト研究を継続的に発展させるような水田利用に直接係る課題を要請されましたが、経過を説明し経常的共同研究としての取組みに理解をいただきました。乾季始まりの12月から終わりに近い4月にかけて播種期を変え、殺虫剤処理による害虫防除区と無防除区を設けて実証試験を行うことにしました。結果は予想通りでした。乾季最盛期の2月中旬から4月上旬に開花成熟期がくる1・2月播種の大豆は正常な生育を示しましたが、播種期が遅れ開花成熟期が雨季初めにきた大豆は急に莢着きが悪くなり、開花成熟期が遅れると前年9月に見たような姿になって

しまいました。これに対し防除区の大豆は雨季に開花成熟期がきてもほぼ正常な生育経過をたどりました。当時、農業局へ熱研から派遣されておりました害虫専門家の日高輝展さんに調査を依頼し5種類の害虫を確認していただきましたが、障害の主因害虫名を確定するには至りませんでした。

この結果は、タイ中央平原で雨季作水稲の跡に大豆を導入するには乾季内に生育が完了できる作期に作付けする必要があるという当り前の結論でした。熱帯で水田の高度利用を図るためには、生態系に調和し現場に即した要素技術の確立が不可欠であることを痛感しました。この不稔現象対策も大豆の生育と害虫の発生生態を併せて追跡しないと明確な技術指針は得られないと思いました。79年11月にマレーシア農業大学で開催された「熱帯の豆類シンポジュウム」でこの成績を報告した際、大豆が害虫のトラップ作物になって異常生育を示したのではないかと指摘され、苦い思いをした記憶があります。

当初、熱研の方針と赴任先の意向との調整等に苦慮しましたが、その他の試験課題を含め円滑に気持ちよく進め国内勤務では得られない有意義な体験をすることができました。ひとえにタイ農業局の多くの関係者及び当時の熱研の岡部四郎所長・梶原敏宏研究第一部長・五十嵐孝典タイ駐在代表をはじめ、諸先輩・同僚の暖かいご指導・ご協力のお陰だったと感謝しております。改めてお礼を述べさせていただきます。

（著者50音順に配列）